

2024年度
大学院国際文化研究科
講義概要 (シラバス)



法政大学

科目一覧

〔発行日：2024/5/1〕最新版のシラバスは、法政大学Webシラバス (<https://syllabus.hosei.ac.jp/>) で確認してください。

凡例 その他属性

〈他〉：他学部公開科目	〈グ〉：グローバル・オープン科目
〈優〉：成績優秀者の他学部科目履修制度対象科目	〈実〉：実務経験のある教員による授業科目
〈S〉：サーティフィケートプログラム_SDGs	〈ア〉：サーティフィケートプログラム_アーバンデザイン
〈ダ〉：サーティフィケートプログラム_ダイバーシティ	〈未〉：サーティフィケートプログラム_未来教室
〈カ〉：サーティフィケートプログラム_カーボンニュートラル	

【X2001】 国際文化研究A [LETIZIA GUARINI] 春学期授業/Spring	1
【X2002】 国際文化研究B [釜土 詳二] 秋学期授業/Fall	3
【X2003】 国際文化共同研究A [松本 悟、張 晟喜] 春学期授業/Spring	4
【X2004】 国際文化共同研究B [和泉 順子、張 晟喜] 秋学期授業/Fall	6
【X2005】 多言語相関論I A [粟飯原 文子] 春学期授業/Spring	7
【X2006】 多言語相関論I B [粟飯原 文子] 秋学期授業/Fall	8
【X2007】 多言語相関論II A [大野 ロベルト] 春学期授業/Spring	9
【X2008】 多言語相関論II B [大野 ロベルト] 秋学期授業/Fall	10
【X2009】 多言語相関論III B [輿石 哲哉] 秋学期授業/Fall	11
【X2010】 多文化相関論I A [LETIZIA GUARINI] 春学期授業/Spring	12
【X2011】 多文化相関論I B [LETIZIA GUARINI] 秋学期授業/Fall	13
【X2012】 多文化相関論II A [小川 敦] 春学期授業/Spring	14
【X2013】 多文化相関論II B [小川 敦] 秋学期授業/Fall	15
【X2014】 多文化相関論III [佐々木 一恵] 春学期授業/Spring	16
【X2015】 多文化芸術論I [佐藤 千登勢] 春学期授業/Spring	18
【X2016】 多文化芸術論II [廣松 勲] 秋学期授業/Fall	20
【X2017】 異文化社会論I A [今泉 裕美子] 春学期授業/Spring	21
【X2018】 異文化社会論I B [今泉 裕美子] 秋学期授業/Fall	23
【X2019】 異文化社会論II A [浅川 希洋志] 春学期授業/Spring	25
【X2020】 異文化社会論II B [浅川 希洋志] 秋学期授業/Fall	26
【X2023】 マイノリティ社会論A [張 勝蘭] 春学期授業/Spring	27
【X2024】 マイノリティ社会論B [張 勝蘭] 秋学期授業/Fall	29
【X2025】 ジェンダー論 [佐々木 一恵] 秋学期授業/Fall	31
【X2026】 多言語社会論A [大中 一彌] 春学期授業/Spring	33
【X2027】 多言語社会論B [大中 一彌] 秋学期授業/Fall	35
【X2028】 多民族共生論I A [松本 悟] 春学期授業/Spring	37
【X2029】 多民族共生論I B [松本 悟] 秋学期授業/Fall	38
【X2030】 多民族共生論II A [高柳 俊男] 春学期授業/Spring	39
【X2031】 多民族共生論II B [高柳 俊男] 秋学期授業/Fall	40
【X2032】 国際ジャーナリズム論 [神林 毅彦] 秋学期授業/Fall	41
【X2033】 国際文化交流論II A [木村 真] 秋学期授業/Fall	42
【X2034】 比較宗教文明論 [白杵 陽] 秋学期授業/Fall	43
【X2035】 多文化情報メディア論I A [大嶋 良明] 春学期授業/Spring	45
【X2036】 多文化情報メディア論I B [大嶋 良明] 秋学期授業/Fall	46
【X2037】 多文化情報メディア論II [重定 如彦] 秋学期授業/Fall	47
【X2038】 外国語実践研究A (英語) [MARK E FIELD] 春学期授業/Spring	48
【X2039】 外国語実践研究B (英語) [大野 ロベルト] 秋学期授業/Fall	49
【X2040】 外国語実践研究A (ドイツ語) [小川 敦] 春学期授業/Spring	50
【X2042】 外国語実践研究A (ロシア語) [佐藤 千登勢] 春学期授業/Spring	51
【X2043】 外国語実践研究B (ロシア語) [佐藤 千登勢] 秋学期授業/Fall	52
【X2044】 Thesis Writing A [MAXIM WOOLLERTON] 春学期授業/Spring	53
【X2045】 Thesis Writing B [MAXIM WOOLLERTON] 秋学期授業/Fall	55
【X2046】 Oral Presentation [MARK E FIELD] 秋学期授業/Fall	57
【X2047】 国際協力論 [松本 悟] 春学期授業/Spring	58

【X2048】	国際人権論 [藤岡 美恵子] 春学期授業/Spring	59
【X2049】	多文化情報ネットワーク論A [和泉 順子] 春学期授業/Spring	61
【X2050】	多文化情報ネットワーク論B [和泉 順子] 秋学期授業/Fall	62
【X2051】	国際文化研究日本語論文演習A [浅利 文子] 春学期授業/Spring	63
【X2052】	国際文化研究日本語論文演習B [浅利 文子] 秋学期授業/Fall	65
【X2053】	国際文化研究日本語論文演習C [浅利 文子] 春学期授業/Spring	66
【X2070】	修士論文演習A (代表シラバス) [浅川 希洋志、大野 ロベルト] 春学期授業/Spring	67
【X2080】	修士論文演習A [LETIZIA GUARINI] 春学期授業/Spring	68
【X2071】	修士論文演習B (代表シラバス) [浅川 希洋志、大野 ロベルト] 秋学期授業/Fall	69
【X2081】	修士論文演習B [LETIZIA GUARINI] 秋学期授業/Fall	70
【X2072】	修士論文演習A [浅川 希洋志] 春学期授業/Spring	71
【X2073】	修士論文演習B [浅川 希洋志] 秋学期授業/Fall	72
【X2074】	修士論文演習A [大嶋 良明] 春学期授業/Spring	73
【X2075】	修士論文演習B [大嶋 良明] 秋学期授業/Fall	74
【X2076】	修士論文演習A [松本 悟] 春学期授業/Spring	75
【X2077】	修士論文演習B [松本 悟] 秋学期授業/Fall	76
【X2078】	修士論文演習A [佐藤 千登勢] 春学期授業/Spring	77
【X2079】	修士論文演習B [佐藤 千登勢] 秋学期授業/Fall	78
【X2101】	博士論文演習I A (代表シラバス) [浅川 希洋志、大野 ロベルト] 春学期授業/Spring	79
【X2117】	博士論文演習I A [佐藤 千登勢] 春学期授業/Spring	80
【X2119】	博士論文演習I A [浅川 希洋志] 春学期授業/Spring	81
【X2102】	博士論文演習I B (代表シラバス) [浅川 希洋志、大野 ロベルト] 秋学期授業/Fall	82
【X2118】	博士論文演習I B [佐藤 千登勢] 秋学期授業/Fall	83
【X2120】	博士論文演習I B [浅川 希洋志] 秋学期授業/Fall	84
【X2103】	博士論文演習II A (代表シラバス) [浅川 希洋志、大野 ロベルト] 春学期授業/Spring	85
【X2104】	博士論文演習II B (代表シラバス) [浅川 希洋志、大野 ロベルト] 秋学期授業/Fall	86
【X2105】	博士論文演習III A (代表シラバス) [浅川 希洋志、大野 ロベルト] 春学期授業/Spring	87
【X2106】	博士論文演習III B (代表シラバス) [浅川 希洋志、大野 ロベルト] 秋学期授業/Fall	88
【X2109】	博士論文演習II A [佐藤 千登勢] 春学期授業/Spring	89
【X2110】	博士論文演習II B [佐藤 千登勢] 秋学期授業/Fall	90
【X2111】	博士論文演習III A [高柳 俊男] 春学期授業/Spring	91
【X2112】	博士論文演習III B [高柳 俊男] 秋学期授業/Fall	92
【X2113】	博士論文演習III A [浅川 希洋志] 春学期授業/Spring	93
【X2114】	博士論文演習III B [浅川 希洋志] 秋学期授業/Fall	94
【X2115】	博士論文演習III A [佐藤 千登勢] 春学期授業/Spring	95
【X2116】	博士論文演習III B [佐藤 千登勢] 秋学期授業/Fall	96
【X2121】	博士ワークショップI A [重定 如彦、大野 ロベルト] 春学期授業/Spring	97
【X2122】	博士ワークショップI B [重定 如彦、大野 ロベルト] 秋学期授業/Fall	98
【X2123】	博士ワークショップII A [重定 如彦、大野 ロベルト] 春学期授業/Spring	99
【X2124】	博士ワークショップII B [重定 如彦、大野 ロベルト] 秋学期授業/Fall	100
【X2125】	博士ワークショップIII A [重定 如彦、大野 ロベルト] 春学期授業/Spring	101
【X2126】	博士ワークショップIII B [浅川 希洋志、大野 ロベルト] 秋学期授業/Fall	102

OTR500G1 - 001 (その他 / Others 500)

国際文化研究 A

LETIZIA GUARINI

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この科目「国際文化研究A」は、新入生（修士課程1年生）が大学院生として必要とする文献調査および講読、講義ノートの作成や整理に必要な技術を身につけることに主眼を置く。

【到達目標】

- (1) 研究上必要な書誌情報にアクセスする方法を理解している。
- (2) 本研究科における研究の学際性について、本研究科に在籍する修士1年生にふさわしい認識を有している。
- (3) みずからの関心を研究成果につなげていくための方法論について、本研究科に在籍する修士1年生にふさわしい認識を有している。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- (1) 第1回～第4回：大学院生として研究をおこなう上での基礎知識や、本研究科を取り巻く環境に慣れるための授業をおこなう。
- (2) 第5回～第13回：毎回異なるスピーカー（本研究科の専任教員）が、修士1年生向けに講義をおこなう。
- (3) 第14回：全体のまとめをおこなう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	自己紹介・関心紹介、授業計画について説明を行う。
第2回	リサーチデザイン(第1回)	・大学院における学習・研究について解説する。 ・受講学生たちのこれまでの研究状況を確認する。
第3回	リサーチデザイン(第2回)	・引き続き、大学院における学習・研究について解説する。 ・研究計画作成の重要性について意識を高める。
第4回	図書館ガイダンス	図書館員による図書館ガイダンスを利用しつつ、法政大学図書館を介した文献調査のイロハを学ぶ。
第5回	オムニバス形式の講義(第1回)	佐藤千登勢先生(20世紀ロシア文学、文学理論、ロシア(ソ連)映画に関する研究)が講義を行う。
第6回	オムニバス形式の講義(第2回)	和泉順子先生(インターネット上の情報流通に関する研究)が講義を行う。
第7回	オムニバス形式の講義(第3回)	今泉裕美子先生(国際関係学、太平洋島嶼国際関係史、ミクロネシア研究、沖縄研究)が講義を行う。
第8回	オムニバス形式の講義(第4回)	重定如彦先生(情報科学の研究)が講義を行う。
第9回	オムニバス形式の講義(第5回)	レティツィア・グアリーニ先生(日本現代文学、ジェンダー論に関する研究)が講義を行う。
第10回	オムニバス形式の講義(第6回)	大嶋良明先生(デジタル・メディア処理、音声情報処理に関する研究)が講義を行う。

第11回	オムニバス形式の講義(第7回)	廣松勲先生(フランス語圏文学、文学理論に関する研究)が講義を行う。
第12回	オムニバス形式の講義(第8回)	大中一彌先生(近現代のフランスを中心に政治学、政治思想史に関する研究)が講義を行う。
第13回	オムニバス形式の講義(第9回)	佐々木一恵先生(歴史学、ジェンダー研究、異文化接触論、帝国主義研究)が講義を行う。
第14回	総括	これまでの議論を踏まえて補足授業を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

別途指示する。

【参考書】

別途指示する。

【成績評価の方法と基準】

成績評価は、下記の①+②の提出物などを総合的に判断して行う。
①「リサーチデザイン」+②9つのオムニバス形式の講義ごとに「ミニ課題」にて採点：10%×10

【学生の意見等からの気づき】

ディスカッションをファシリテートする際に受講生をグループで分けて論点を示す必要があります。

【学生が準備すべき機器他】

課題提出などは、主にLMS（HoppiiやGoogle Classroom）を通じて行う。ただし、社会人学生などで、日中の授業に参加することが継続的に難しいM1生がいる場合、Zoomで授業を録画し、当該のM1生と共有する。当該のM1生（社会人学生）の発表担当についても、動画やLMSを介した双方向のやりとりを行う。

【その他の重要事項】

修士課程1年は必ず履修すること。

【担当教員の専門分野等】

レティツィア・グアリーニ

<専門領域>

日本近現代文学、ジェンダー理論、表象文化論

<研究テーマ>

現代日本社会における家族、とりわけ父親や父娘関係の表象について研究している。また、日本現代文学における妊娠・出産・授乳や現代文学とに焦点を当て、「女性の身体」という問題について文化表象の側面から考えている。

<主要研究業績>

Guarini, Letizia. "Voices against Gender-based Violence in Contemporary Japanese Literature: An Analysis of Two Novels by Kaoruko Himeno and Aoko Matsuda." *Voiced and Voiceless in Asia*, edited by Halina Zawiszová and Martin Lavič ka, Vydavatelství Univerzity Palackého, 2023, pp. 457-486

Guarini, Letizia. "Shōjo Sexuality in Post-War Japan: Parody and Subversion in Kurahashi Yumiko's *Divine Maiden*." *Japanese Studies* vol. 42, no. 3, 2021, pp. 339-353, DOI: 10.1080/10371397.2022.2134098

グアリーニ・レティツィア「娘は父の支配から逃れられるのか？ — 角田光代の『ゆうべの神様』と『父のボール』に見る父娘関係」『ジェンダー研究』第23号（公益財団法人東海ジェンダー研究所発）、2021年、55-79頁

【Outline (in English)】

(Course outline)

This course introduces the foundations of the Graduate School of Intercultural Communication according to three domains of interdisciplinary research: multicultural interrelations, multiethnic coexistence, and multicultural informatics.

(Learning Objectives)

- (1) To understand how to access bibliographic information necessary for research.
- (2) To understand the interdisciplinary nature of research at the Graduate School of Intercultural Communication.
- (3) To understand the methodologies used at this Graduate School to translate one's interests into research results.

(Learning activities outside of the classroom)

Students are expected to read the reference material and prepare for each class meeting (one to three hours for each session).

(Grading Criteria /Policy)

Assignments for each topic: 100% (10%x10 topics)

OTR500G1 - 002 (その他 / Others 500)

国際文化研究B

釜土 詳二

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この科目「国際文化研究B」では、参加者の研究に寄与するような、発表・ディスカッションの実践を積み重ねていく。

【到達目標】

- (1) 研究発表に必要な資料を、大学院生にふさわしく、適切な仕方で作成することができる。
- (2) 研究テーマが異なる他の参加者に対して、みずからの研究の意義を適切なしかたで説明することができる。
- (3) アカデミックな表現や国際文化研究における基本的な概念を使って、学際的な場におけるディスカッションに参加することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

- (1) 第1回：全体のイントロダクションを行う。
- (2) 第2回～第13回：「国際文化情報学会」などにおける研究発表を念頭に、授業参加者が口頭発表や資料作成の進捗報告を行う。ただし、履修者数により、口頭発表の方法や課題提出のあり方を変える。
- (3) 第14回：全体のまとめと授業内容の補足を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	自分の研究テーマを中心とした自己紹介、本授業の進め方とスケジュール決定。
第2回	学生による発表(1)	発表者1、2による1回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。
第3回	学生による発表(2)	発表者3、4による1回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。
第4回	学生による発表(3)	発表者5、6による1回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。
第5回	学生による発表(4)	発表者7、8による1回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。
第6回	学生による発表(5)	発表者9、10による1回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。
第7回	学生による発表(6)	発表者11、12による1回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。
第8回	学生による発表(7)	発表者1、2による2回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。
第9回	学生による発表(8)	発表者3、4による2回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。

第10回	学生による発表(9)	発表者5、6による2回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。
第11回	学生による発表(10)	発表者7、8による2回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。
第12回	学生による発表(11)	発表者9、10による2回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。
第13回	学生による発表(12)	発表者11、12による2回目の口頭発表と資料作成の進捗状況報告。発表内容については、参加者全員で討論を行う。
第14回	総括	これまでの議論を踏まえて、授業を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

別途指示する。

【参考書】

別途指示する。

【成績評価の方法と基準】

自分の発表時の内容40%、討論での貢献度30%、平常点30%を目安に、総合的に評価する。
この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【学生が準備すべき機器他】

課題提出などは、主にLMS（HoppiiやGoogle Classroom）を通じて行う。ただし、社会人学生などで、日中の授業に参加することが継続的に難しいM1生がいる場合、Zoomで授業を録画し、当該のM1生と共有する。当該のM1生（社会人学生）の発表担当についても、動画やLMSを介した双方向のやりとりを行う。

【その他の重要事項】

修士課程1年は必ず履修すること。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

倫理学、宗教哲学、哲学的人間学

<研究テーマ>

承認論などの人間存在をめぐる倫理的問題の研究。例えば、西田幾多郎の宗教哲学等を参照しつつ、人間存在の基底から、「人間の尊厳」「他者に対する責任や義務」「自己と他者の承認関係」等について考察する。

<主要研究業績>

【単著】釜土詳二『愛と承認をめぐる闘争—チャールズ・テイラーと西田幾多郎の宗教哲学』株式会社インプレス、2020年

【論文】釜土詳二「愛と承認をめぐる闘争—承認論の原型をめぐって—」、『法政大学大学院紀要』第81号、2018年

【論文】釜土詳二「自己と善—チャールズ・テイラーと西田幾多郎」、比較思想学会編『比較思想研究』第43号、2017年

【論文】釜土詳二「バーリンとテイラーにおける「自由」概念の差異：多元性を擁護する「自由」にかんする比較思想的考察」、法政大学国際文化学部編『異文化論文編』第17号、2016年

【Outline (in English)】

This course is a continuation from the spring semester and is mandatory for all first-year graduate students. It offers opportunities for practicing presentations and engaging in discussions to enhance students' studies.

Students are expected to dedicate a total of 4 hours to reviewing and preparing for each class meeting.

The grading criteria are as follows: 40% for presentations, 30% for contribution, and 30% for participation. Students who successfully achieve 60% or more of the course goals will earn a passing grade.

OTR600G1 - 003 (その他/Others 600)

国際文化共同研究 A

松本 悟、張 晟喜

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

本研究科では、「多文化相関」、「多文化共生」、「多文化情報空間」の三領域が今日的な研究課題のスクープの中で深く連関することを学んでいきますが、本科目は、テーマ設定・リサーチ等を共有しながら、それが自らの研究で達成できているか確認していくことを目的とします。

受講者は、自らの研究発表を蓄積し、それを共有・公開することにより、問題意識や研究成果を外に発信して共有していく研究スタイルを身につけていきます。

その上で、上記の研究スタイルを身につけることを通じて、各自の研究の中に、本研究科の特色である「学際的志向の強みを編み込んでいく」ことを目指します。

【到達目標】

上記のテーマを念頭におきながら、受講者各自が修士論文を完成させることが第一の到達目標です。

その中で、特に、既存の学問の枠組みから飛び出して学際的なアプローチをしていくこと、「今、ここ、自分」といった切実な問題として、研究対象を捉えていくことを目指します。

また、「部屋にこもって、一人でしっかりと学級を極める」タイプの研究から踏み出し、自ら外に発信しつつ、他者の研究テーマについても一緒に考えていく中で、発信すること、研究を一緒にやっていくことの意義を実感していくことも、到達目標として掲げます。「共同研究」と取敢て謳っているのは、そういう意味があるのです。

さらに、プレゼンテーション(プレゼン、発表)にはdelivery(表出の仕方)のテクニックがありますし、論文には引用、注の付け方などの規則がありますが、そういうことについても再度確認しながら身につけていくことも、目標の一つです。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

大学と研究科の授業実施方針に則して授業を行います。基本的に教室での対面授業としますが、必要に応じてオンラインでの受講を可とするように処置します。本授業の基本的な授業計画はシラバスに沿って進めますが、変更がある場合には、「学習支援システム」で提示いたします。本授業の開始日まで具体的な授業方法などを同システムで提示します。

発表者(プリゼンター)は自分のプレゼンに関するレジюме等を作成し、プレゼンを行い、出席者皆で討論していきます。プリゼンター以外の受講生は、疑問点・意見等を準備した上で、討論に参加します。

修士論文構想発表会を大きな節目と捉え、それに向けて進捗状況や、研究上の悩み・問題点などを受講者・教員間で共有していきます。

上記の節目を意識しながら、受講者の「書く行為による成果物」(例えば、報告書・論文など)についても、その内容、論の提示の仕方、形式などについて、随時指導していきます。

受講者の質問等には、授業時、あるいは授業後に「学習支援システム」あるいは個人メール等を用いてフィードバックを行います。そのようななかたちで、毎回の授業の成果の共有・蓄積を図ります。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり/Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	<ul style="list-style-type: none"> 授業の進め方について周知する。 発表のスケジュールを立てる。 受講者の研究の進捗状況について報告してもらう。
第2回	論文の書き方について	<ul style="list-style-type: none"> 論文を書くことの意味と書き方について確認する。
第3回	発表とその指導 1	学生2名による発表 <ul style="list-style-type: none"> 質疑応答。 発表のdelivery, 論文の書き方などについての指導(随時行う)。
第4回	発表とその指導 2	学生2名による発表 <ul style="list-style-type: none"> 質疑応答。 発表のdelivery, 論文の書き方などについての指導(随時行う)。
第5回	発表とその指導 3	学生2名による発表 <ul style="list-style-type: none"> 質疑応答。 発表のdelivery, 論文の書き方などについての指導(随時行う)。
第6回	発表とその指導 4	学生2名による発表 <ul style="list-style-type: none"> 質疑応答。 発表のdelivery, 論文の書き方などについての指導(随時行う)。

第7回	発表とその指導 5	学生2名による発表 <ul style="list-style-type: none"> 質疑応答。 発表のdelivery, 論文の書き方などについての指導(随時行う)。
第8回	前半総括・その他	<ul style="list-style-type: none"> 前半の発表の総括。いい点は何か見つめつつ、悩み・問題点等の共有と、その解決を図る。
第9回	発表とその指導 6	学生2名による発表 <ul style="list-style-type: none"> 質疑応答。 発表のdelivery, 論文の書き方などについての指導(随時行う)。
第10回	発表とその指導 7	学生2名による発表 <ul style="list-style-type: none"> 質疑応答。 発表のdelivery, 論文の書き方などについての指導(随時行う)。
第11回	発表とその指導 8	学生2名による発表 <ul style="list-style-type: none"> 質疑応答。 発表のdelivery, 論文の書き方などについての指導(随時行う)。
第12回	発表とその指導 9	学生2名による発表 <ul style="list-style-type: none"> 質疑応答。 発表のdelivery, 論文の書き方などについての指導(随時行う)。
第13回	発表とその指導 10	学生2名による発表 <ul style="list-style-type: none"> 質疑応答。 発表のdelivery, 論文の書き方などについての指導(随時行う)。
第14回	総括	<ul style="list-style-type: none"> 授業の総括。いい点は何か見つめつつ、悩み・問題点等の共有と、それらの解決を図る。これ以降どう進めたいか考える。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

- 発表者は、各自レジюме、プレゼン・スライド等を作成し、自らの発表を用意する。
- 発表回のみならず、常に修士論文の執筆を念頭に置き、意味をかみしめながら、「書くという行為」を積極的に行う。
- 発表者以外の受講者は、発表者の内容を可能な限り授業で検討できるよう、発表の内容に関する事柄を調べておく。さらに、発表者に対する質問・コメント等を用意しておく。
- 修士論文のよりよい完成を目指すために、本授業を積極的に活用する。
- 授業後に、指摘された点を見直したり、関連文献等を積極的に読んだりすることで、自分の視点を広げていく。
- 本授業の準備・復習時間は、各4時間を標準とします。

【テキスト(教科書)】

随時指定しますが、取りあえずは、以下のものを用意してください。

- 斉藤孝・西岡達裕(2005)、『学術論文の技法』[新訂版]、東京：日本エディターズスクール出版部。(論文の基本的な形式等については、この本を中心に解説します。)
- 刈谷武彦(2002)、『知的複眼思考法 誰でも持っている想像力のスイッチ』、東京：講談社。(通読することで、読む・書くという行為の意味を再確認させてくれます。)

【参考書】

授業において適宜指示します。

【成績評価の方法と基準】

発表70%

討論への参加度・貢献度30%

上記はあくまで目安であり、担当者の協議により、必ずしも数値化に寄らない側面も考慮することがありますが、ご理解ください。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

発言しやすい場を作ることに留意します。

【学生が準備すべき機器他】

辞書・パソコンなど。

【その他の重要事項】

- 受講者数により、発表の回数が増減することがあります。
- 修士課程2年目の春学期の科目であることを、特に意識して運営していきます。従って、修士論文の基本方針等を固めていくことを念頭に置き進めていきます。
- 発信していくことは、それだけでも意味があることです。それを意識し、同時に自分と異なった意見を受け入れていく姿勢を身につけます。
- 問題と同次元で「ベタに」(あるいは「ガチに」といってもいいかも)問題に取り組むだけでなく、より高い次元で、自分の研究の意味に括弧を付けてその意味を問いかけていく、「メタな」取り組みを取り入れる必要があります。是非、ある時点で立ち止まって考えてみてください。
- 「論文を書く」というのは、自分の研究してきたことに自分自身で「区切りをつける」仕事でもあります。そのことを意識し、必要な文献等をしっかり読み込み、執筆に向けての準備をしてください。

【担当教員の専門分野等】

松本 悟

<専門領域>国際開発研究

<研究テーマ>影響評価、国際機構論、国際協力学

<主要研究業績>『国際協力と想像力』（共編著、日本評論社、2021年）、『調査と権力』（単著、東京大学出版会、2014年）、『NGO から見た世界銀行』（共編著、ミネルヴァ書房、2013年）、『映画で学ぶ国際関係II』（分担執筆、法律文化社、2013年）、『人々の資源論』（分担執筆、明石書店、2008年）、『シリーズ国際開発 生活と開発』（分担執筆、日本評論社、2005年）

張 晟喜

<専門領域>児童文学、日韓童謡史。

<研究テーマ>日本と韓国の童謡比較、まど・みちおとユン・ソクチュン童謡比較

<主要研究業績>『まど・みちお 詩と童謡の表現世界』（単著、風間書房、2017年）、『日韓童謡国際フォーラム論文集』（共著・編集・翻訳、方定煥研究所、2020年）

【カリキュラム上の位置づけ】

修士論文を完成される年度の前半に配当され、「国際文化研究A, B」の延長線上で、かつ秋学期の「国際文化共同研究B」の直前の科目です。この科目は修士1年目での研究の上に、いよいよ修士論文執筆を視野に入れる点で、極めて重要な意味を持ちます。

【Outline (in English)】

【Course outline】

With respect to our Graduate School, it is of fundamental importance to study how the three fields — 'Intercultural Correlation Studies', 'Multiculturalism Studies', and 'Multicultural Information Space Studies' — are intertwined with each other in the scope of today's research enquiries. The objective of this course is to make sure that your own graduate research attain that by sharing your own theme settings and research results.

By the end of course, you should be able to acquire a research style, wherein you disseminate your own problem awareness and research results by accumulating, sharing and publicising your own research results.

Besides that, through this acquisition process, you are expected to go up to the stage where you can make this 'strong point of our graduate school interwoven' with your own research.

【Learning Objectives】

The objective of this course is to make sure that your own graduate research attain that by sharing your own theme settings and research results.

【Learning activities outside of classroom】

Students will be expected to have completed the required assignments after each class meeting. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria /Policy】

Final grade will be calculated according to presentation(70%) and contribution in each class meeting(30%).

OTR600G1 - 004 (その他/Others 600)

国際文化共同研究 B

和泉 順子、張 晟喜

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

本科目は、修士論文あるいはリサーチペーパーの完成に向けて、受講する2年次の院生と教員で切磋琢磨する授業で、1年次の「国際文化研究A」「国際文化研究B」、2年次春学期の「国際文化共同研究A」の延長線上にある。

「共同研究」というと、通常は共通テーマのもと、複数人が分担しながらともに研究することを意味するが、この場合の「共同」には、修士論文作成という共通の課題に向けて、それぞれ知恵を出し合い、協力し合う意味が込められている。

研究科の3領域、すなわち「異文化相関関係」「多文化共生」「多文化情報空間」に目配りしつつ、自分の研究の位置づけや方法論などを他者のそれと比較し、再検証することを通して、より完成度の高い論文を目指す。

とりわけ、本研究科の特色である学際的思考を組み込んでいく。

【到達目標】

上記の「授業の概要と目的」を念頭に置き、受講者各自がそれに見合った修士論文を完成させることを、本科目の最大の到達目標とする。

一定の構成・分量と主張をもつ論文の執筆は、誰にとってもたやすいことではない。一人で悩んだり、壁にぶつかって立ち往生することなく、同様の課題に直面している他の受講生からアドバイスをもらい、この道の先輩である教員の体験を聴くことで、困難な作業を順調に進めることができるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士論文の進捗状況に関する受講者の発表を中心に進めていく。発表者はレジュメもしくはパワーポイントを作成して発表を行い、他の出席者からの疑問・意見・助言等をまじえ、全員で討論していく。

修士論文中間発表会、修士論文の提出を二つの大きな節目と捉え、それに向けての進捗状況や研究上の悩み・問題点を受講者・教員間で共有していく。

社会情勢や受講生の状況により、オンライン授業に変更する場合もある。授業方法や進め方の変更については、Hoppii「お知らせ」により適宜連絡する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	自分の研究テーマを中心とした自己紹介、本授業の進め方とスケジュール決定。
2	修士論文中間発表(1)	発表者1、2、3による1回目の発表。7月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何に変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
3	修士論文中間発表(2)	発表者4、5、6による1回目の発表。7月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何に変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
4	修士論文中間発表(3)	発表者7、8、9による1回目の発表。7月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何に変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
5	修士論文中間発表(4)	発表者10、11、12による1回目の発表。7月に実施される研究科の構想発表会から、修士論文がどう進展し、何に変更されたかに重点を置きながら、進捗状況を報告する。
6	修士論文中間発表(5)	発表者13による1回目の発表および発表者1による2回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にししながら、進捗状況を報告する。
7	修士論文中間発表(6)	発表者2、3による2回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にししながら、進捗状況を報告する。
8	修士論文中間発表(7)	発表者4、5による2回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にししながら、進捗状況を報告する。

9	修士論文中間発表(8)	発表者6、7による2回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にししながら、進捗状況を報告する。
10	修士論文中間発表(9)	発表者8、9による2回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にししながら、進捗状況を報告する。
11	修士論文中間発表(10)	発表者10、11による2回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にししながら、進捗状況を報告する。
12	修士論文中間発表(11)	発表者12、13による2回目の発表。研究の過程で直面している問題や課題を明確にししながら、進捗状況を報告する。
13	論文提出前ディスカッション	修士論文提出を間近に控え、各自が直面している問題や課題について議論し、その解決策等を検討する。
14	まとめ	提出した修士論文を振り返り、反省会を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- (1)自分の発表時に出された質問・批判・助言などを参考にし、常に自分の論文の質を高めるよう努めること。
- (2)他者の発表時に得られたヒントや着想を、常に自らの論文に活かし、質の向上をはかること。
- (3)自分の研究テーマを常に頭の片隅におき、アイデアを遊ばせながら日常生活を送ること。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

自分の発表時の内容40%、他者の発表時の貢献度30%、平常点30%を目安に、総合的に評価する。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

受講生が論文執筆について疑問や不安に感じていることを、できるだけ授業内で共有し、適切なアドバイスを得られるようにする。

【学生が準備すべき機器他】

パワーポイントなどを使って報告する場合は、パソコンを持参し、対面授業の場合は教室でプロジェクターの準備をしておくこと。

Hoppii「掲示板」「お知らせ」などを滞りなく確認・利用できる環境を準備すること。

【その他の重要事項】

・受講生の人数によって、授業計画が変更される場合もある。

【Outline (in English)】

The seminar is designed to enhance participants' knowledge and methodologies in three key areas of study - intercultural correlation studies, multiculturalism studies, and multicultural information space studies.

At the end of the course, participants are expected to improve their interdisciplinary thinking and to write up the Master's thesis/the Research paper.

【Learning Objectives】

This seminar is designed to facilitate the development of the Master's thesis/the Research paper by providing feedback and support from other students, seniors and instructors. Students may update on their progress and discuss tasks they accomplish for the thesis. Based on [Outline] of the seminar, students are expected to prepare for interim presentation and to complete the thesis.

【Learning activities outside of classroom】

- (1) Students should develop the Master's thesis/the Research paper based on questions, comments and advice given in the class.
- (2) Students should develop the Master's thesis/the Research paper by discussing and reviewing other students' work.
- (3) Students are expected to refine their research subject.

The standard time required for preparatory study and review for this course are 2 hours each.

【Grading Criteria /Policy】

Presentation (40%), Contribution(30%), Participation (30%)

Students are required to take more than 60% score in total to pass.

LIN500G1 - 101 (言語学 / Linguistics 500)

多言語相関論 I A

栗飯原 文子

サブタイトル：旧植民地地域の文学・文化

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

主にアジア・アフリカ・ラテンアメリカの（出身の作家による）さまざまな文学作品を精読・分析することで、文学作品が時代、社会、世界の状況にどのように応えているのかを考え、地域と言語を横断した世界文学への視座を身につける。また適宜テキストにあわせて研究論文や批評の抜粋を読み、分析の手がかりにする。

【到達目標】

さまざまな言語で書かれた短篇・中篇小説（主に日本語訳）を精読し、歴史的・社会的文脈と関連づけて読み解く力を養うと同時に、各作品の主題、手法、表現などに注目しながら、文学テキストの分析・批評の方法を身につける。英語で書かれた作品はなるべく原書で読み、英語の読解力を伸ばすことも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

指名された担当者が問題提起を含む報告をおこない、全体で討論する。その際、報告者はレジュメを作成して、担当箇所をまとめ、議論のポイントを整理しておくこと。発表担当の有無によらず、受講者全員が文献を共有し、問題意識をもって授業に臨むようにする。「授業計画」の内容はあくまで予定であり、受講者の理解や関心にもとづいて、適宜変更する可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方について説明。以下、各回にとりあげる作家の名を記す。
第2回	韓国①チョ・ナムジュ	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第3回	韓国②パク・ミンギユ	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第4回	韓国③ハン・ガン	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第5回	沖縄①日取真俊	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第6回	沖縄②大城立裕	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第7回	沖縄③崎山多美	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第8回	アフリカ①ベティーナ・ガッパ	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第9回	アフリカ②アマ・アタ・アイドゥ	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第10回	アフリカ③グギ・ワ・ジ	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第11回	アフリカ④センベヌ・ウスマン	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第12回	カリブ①ジャメイカ・キンケイド	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第13回	カリブ②エドウィージ・ダンティカ	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第14回	春学期のまとめ	春学期で学んだことのまとめをおこなう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業で扱う文献以外にも、その他の参考文献を積極的に読んでいくこと。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

授業時に指示する。

【参考書】

授業時に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表（60%）、授業への貢献（40%）を総合して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

・さまざまな関心をもつ学生に対応できる授業にしたい。
・受講生の自主的な学習、授業への積極的な参加をうながせるよう工夫をおこないたい。

【担当教員の専門分野等】

アフリカ文学、アフリカ地域研究

<https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/34/0003319/profile.html>**【Outline (in English)】**

[Course outline] This course aims at an in-depth comparative study of texts and authors from the regions including Asia, Africa, Middle East, Latin America and the Caribbean. [Learning objectives] Students will be expected to develop skills of critical reading of literary texts with attention to their historical and social contexts. [Learning activities outside of classroom] Before each session, students will be expected to have read the assigned materials. The required study time is at least four hours for each class session. [Grading policy] Final grade will be decided based on the following: presentation 60% and in-class contribution 40%.

LIN500G1 - 102 (言語学 / Linguistics 500)

多言語相関論 I B

栗飯原 文子

サブタイトル：旧植民地地域の文学・文化

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

主にアジア・アフリカ・ラテンアメリカの（出身の作家による）さまざまな文学作品を精読・分析することで、文学作品が時代、社会、世界の状況にどのように応えているのかを考え、地域と言語を横断した世界文学への視座を身につける。また適宜テキストにあわせて研究論文や批評の抜粋を読み、分析の手がかりにする。

【到達目標】

さまざまな言語で書かれた短篇・中篇小説（主に日本語訳）を精読し、歴史的・社会的文脈と関連づけて読み解く力を養うと同時に、各作品の主題、手法、表現などに注目しながら、文学テキストの分析・批評の方法を身につける。英語で書かれた作品はなるべく原書で読み、英語の読解力を伸ばすことも目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

指名された担当者が問題提起を含む報告をおこない、全体で討論する。その際、報告者はレジュメを作成して、担当箇所をまとめ、議論のポイントを整理しておくこと。発表担当の有無によらず、受講者全員が文献を共有し、問題意識をもって授業に臨むようにする。「授業計画」の内容はあくまで予定であり、受講者の理解や関心にもとづいて、適宜変更する可能性がある。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の進め方について説明。以下、各回にとりあげる作家の名を記す。
第2回	パレスチナ①ガッサーン・カナファーニー「太陽の男たち」	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第3回	パレスチナ②ガッサーン・カナファーニー「悲しいオレンジの実る土地」	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第4回	パレスチナ③ガッサーン・カナファーニー「ハイファに戻って」	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第5回	ラテンアメリカ①ガブリエル・ガルシア＝マルケス	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第6回	ラテンアメリカ②カルロス・フエンテス	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第7回	ラテンアメリカ③イザベル・アジェンデ	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第8回	アフリカ①ベッシー・ヘッド	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第9回	アフリカ②チママンダ・ンゴズィ・アディーチェ	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第10回	アフリカ③ナディン・ゴーデイマー	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第11回	南アジア①クリシャン・チャンドル	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第12回	南アジア②モハッシュェタ・デビ	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第13回	南アジア③アニター・デサイ	事前に提示された問いを中心に担当者が発表をおこない、全員で討論。
第14回	秋学期のまとめ	秋学期で学んだことのまとめをおこなう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業で扱う文献以外にも、その他の参考文献を積極的に読んでいくこと。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

授業時に指示する。

【参考書】

授業時に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表（60%）、授業への貢献（40%）を総合して評価する。

【学生の意見等からの気づき】

- ・さまざまな関心をもつ学生に対応できる授業にしたい。
- ・受講生の自主的な学習、授業への積極的な参加をうながせるよう工夫をおこないたい。

【担当教員の専門分野等】

アフリカ文学、アフリカ地域研究

<https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/34/0003319/profile.html>

【Outline (in English)】

[Course outline] This course aims at an in-depth comparative study of texts and authors from the regions including Asia, Africa, Middle East, Latin America and the Caribbean. [Learning objectives] Students will be expected to develop skills of critical reading of literary texts with attention to their historical and social contexts. [Learning activities outside of classroom] Before each session, students will be expected to have read the assigned materials. The required study time is at least four hours for each class session. [Grading policy] Final grade will be decided based on the following: presentation 60% and in-class contribution 40%.

LIN500G1 - 103 (言語学 / Linguistics 500)

多言語相関論Ⅱ A

大野 ロベルト

サブタイトル：パロディと文化

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

パロディという概念を軸に、主に20世紀の文学理論を逍遙したうえで、言語・文化・時代・メディアを横断して、様々な作品の分析と比較を行う。日本文化の伝統を出発点とするが、到達点を決定するのは参加者ひとりひとりの興味関心である。

【到達目標】

文学理論の知識を深め、それを応用して様々な言語や文化に立脚するテキストを分析し、論理的に言語化することができるようになる。必要に応じて古い文献や外国語の文献にも手を伸ばすことで読解力が向上し、「知的行動力」が身につく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

対面授業として実施する。大学院の授業においては、対話を伴わないものはあり得ない。担当教員は必要に応じて講義を行うが、基本的にはファシリテーターの立場にとどまる。受講者は積極的に議論に参加すること。とくに発表の担当者には進行の中心的な役割が期待される。フィードバックは授業内に随時行う。最後に期末レポートを提出してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の進め方について説明する。
2	パロディとは何か	パロディの基本について講義の後、ディスカッション。
3	パロディと日本文化	日本の伝統文化におけるパロディについて講義の後、ディスカッション。
4	理論編 1	ソシュールをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
5	理論編 2	レヴィ＝ストロースをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
6	理論編 3	バルトをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
7	理論編 4	ジュネットをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
8	理論編 5	デリダをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
9	実践編 1	小説とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
10	実践編 2	映画とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
11	実践編 3	舞台とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
12	実践編 4	音楽とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
13	実践編 5	サブカルチャーとパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
14	まとめ	今学期の内容をふりかえる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回のテーマとなるテキストについては事前に丁寧に読み込み、時代背景なども調べておくこと。発表担当でない場合でも、議論に参加するために予習を怠らないこと。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

使用しない。資料は必要に応じて教員が配布する。

【参考書】

リンダ・ハッチオン『パロディの理論』未来社、1993

【成績評価の方法と基準】

発表と議論への貢献50%、レポート50%
成績評価は100点満点とし、60点以上が合格となる。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本文学

<研究テーマ>

古典文学およびその受容と翻訳の研究、日本文学に通底する詩学の研究、文学と権力の関係性をめぐる研究

<主要研究業績>

『吉田健一に就て』（共著）国書刊行会、2023

『Butoh 入門』（共編）文学通信、2021

『紀貫之 文学と文化の底流を求めて』東京堂出版、2019

【Outline (in English)】

This course provides the participants with opportunities to familiarize themselves with the concept of parody: arguably one of the great tools to analyze and compare different cultures built on various languages.

While the point of embarkation is set on traditional arts of Japan, the destination is up to each participant. Students are encouraged to provide topics they can honestly relate to, including various genres of so-called subculture.

The students are expected to spend a total of 4 hours in reviewing and preparing for each class meeting.

The grading criteria is as follows: 50% presentation and participation in discussions, 50% final paper. Students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

LIN500G1 - 104 (言語学 / Linguistics 500)

多言語相関論Ⅱ B

大野 ロベルト

サブタイトル：パロディと文化

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

パロディという概念を軸に、主に20世紀の文学理論を逍遙したうえで、言語・文化・時代・メディアを横断して、様々な作品の分析と比較を行う。日本文化の伝統を出発点とするが、到達点を決定するのは参加者ひとりひとりの興味関心である。

【到達目標】

文学理論の知識を深め、それを応用して様々な言語や文化に立脚するテキストを分析し、論理的に言語化することができるようになる。必要に応じて古い文献や外国語の文献にも手を伸ばすことで読解力が向上し、「知的行動力」が身につく。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

対面授業として実施する。大学院の授業においては、対話を伴わないものはあり得ない。担当教員は必要に応じて講義を行うが、基本的にはファシリテーターの立場にとどまる。受講者は積極的に議論に参加すること。とくに発表の担当者には進行の中心的な役割が期待される。フィードバックは授業内に随時行う。最後に期末レポートを提出してもらう。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の進め方について説明する。
2	パロディとは何か	パロディの基本について講義の後、ディスカッション。
3	パロディと日本文化	日本の伝統文化におけるパロディについて講義の後、ディスカッション。
4	理論編 1	エーコをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
5	理論編 2	パフチンをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
6	理論編 3	バンヴェニストをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
7	理論編 4	サイドをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
8	理論編 5	フーコーをとりあげる。担当者による発表とディスカッション。
9	実践編 1	政治とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
10	実践編 2	教育とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
11	実践編 3	経済とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
12	実践編 4	司法とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
13	実践編 5	科学とパロディ。各人の関心に基づいた発表とディスカッション。
14	まとめ	今学期の内容をふりかえる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

各回のテーマとなるテキストについては事前に丁寧に読み込み、時代背景なども調べておくこと。発表担当でない場合でも、議論に参加するために予習を怠らないこと。本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

使用しない。資料は必要に応じて教員が配布する。

【参考書】

リンダ・ハッチオン『パロディの理論』未来社、1993

【成績評価の方法と基準】

発表と議論への貢献50%、レポート50%
成績評価は100点満点とし、60点以上が合格となる。

【学生の意見等からの気づき】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

日本文学

<研究テーマ>

古典文学およびその受容と翻訳の研究、日本文学に通底する詩学の研究、文学と権力の関係性をめぐる研究

<主要研究業績>

『吉田健一に就て』（共著）国書刊行会、2023

『Butoh 入門』（共編）文学通信、2021

『紀貫之 文学と文化の底流を求めて』東京堂出版、2019

【Outline (in English)】

This course provides the participants with opportunities to familiarize themselves with the concept of parody: arguably one of the great tools to analyze and compare different cultures built on various languages.

While the point of embarkation is set on traditional arts of Japan, the destination is up to each participant. Students are encouraged to provide topics they can honestly relate to, including various genres of so-called subculture.

The students are expected to spend a total of 4 hours in reviewing and preparing for each class meeting.

The grading criteria is as follows: 50% presentation and participation in discussions, 50% final paper. Students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

LNG500G1 - 106

多言語相関論Ⅲ B

興石 哲哉

サブタイトル：言語の研究方法を学ぶ

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語・英語や他の言語を比較対照しながら言語研究の仕方を学んでいくことが、本授業のテーマです。国際文化研究科の研究には様々な点で言語との関係が切っても切れないものが多いですが、言語の研究法についてはテクニカルなところがあり、なかなか理解が難しいのが現実です。本授業では、それを克服すべく、基本的な文献を読みながら言語研究の基本である音声研究を学んでいきます。

【到達目標】

- 1) 言語研究の基本的な概念や方法論に習熟すること。
- 2) その概念、方法論を様々な言語に適用させ、より広い一般化の道筋を模索していくこと。
- 3) 外国語（特に英語）で文献を読むのに慣れていくこと。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的にオンラインでの開講となります。各回の授業計画は変更はありませんが、もし変更がある場合には、「学習支援システム」で提示します。本授業の開始日までに具体的なオンライン授業の方法などを、同システムを用いて提示します。

授業は演習形式で行います。授業では学生にどんどん意味を問いかけていき、教材を日本語にしていってもらいます。この際、重要なのは、

- 1) 全員が担当箇所を前もってひと通り読んでおくこと、
- 2) 分からない場合、積極的に質問したり、意見を出し合うこと、

の2点です。課題や授業内容については、「学習支援システム」を用いて、基本的に事後に詳細なコメントを担当者が出しますので、それをさらなる研究等に活かしてください。

最終授業だけでなく、中途でも、折を見て、フィードバックの時間を設けますので、内容についての質問等には随時対処していきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	Introduction	本科目の概略、学習の仕方等についての説明。その上で、教材を読み始める。
2	Organs of Speech	発話に用いられるところの器官について学ぶ。
3	Speech Sounds, Classification of Vowels	言語音、母音の分類について学ぶ。
4	Classification of Vowels	母音の分類について学び、様々な言語の母音を概観する。
5	Further Classification of Vowels	母音の分類についてさらに見る。
6	Classification of Consonants	子音の分類について学ぶ。
7	Classification of Consonants	子音の発音について、様々な言語からの例を見ながら具体的に学ぶ。
8	Classification of Consonants	子音の発音について、様々な言語からの例を見ながら具体的に学ぶ。
9	Classification of Consonants, Further Analysis of Consonants	子音の発音について見た後、副次的調音について学ぶ。
10	Combination of Sounds	音の連続について学ぶ。
11	Syllables	言語の音声記述で重要な概念である音節という概念について学ぶ。
12	Quantity, Accent	音長、アクセントについてその概略を学ぶ。
13	Phonemes	言語の研究で非常に重要な概念である音素について、学ぶ。
14	Phonemes	言語の研究で非常に重要な概念である音素について、引き続き学ぶ。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回、必ず内容について質問しますので、必ず読んでみてください。さらに関与する概念で新しいものについては、先にご自身で調べておくと、非常に理解が深まります。

まず、文献を読むべく、英語に習熟することが非常に重要です。常に英語力の向上に努めてください。発表に関しては、発表の担当者は、担当箇所をきちんと読んで、発表の準備を怠りなくすること。他の受講者も、ひと通りその箇所を読み、自分なりの意見を持つようにすること、の2点が大切です。

大学設置基準に鑑みた場合、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、あくまで標準としてご理解ください。

【テキスト（教科書）】

Takebayashi, Shigeru (1976). *A Primer of Phonetics*. Tokyo: Iwasaki Linguistic Circle.[入手困難なため、授業支援システム等により配布します。]

【参考書】

- 以下に、辞書と年鑑・地図を挙げておきます。
- ・高橋作太郎（編集）、『リーダーズ英和辞典』第三版。東京：研究社。学習者用辞書ではなく、一般用の辞書で、英語を読むには必須です。
- ・Janssen, S. (ed.) (2019). *The World Almanac and Book of Facts 2020*. New York: The World Almanac Books.
- ・Philip's Maps (2019). *Philip's Modern School Atlas*. (99th edition.) London: Philip's.

以上の2冊は、英語の文献を読むときとても役に立ちます。

【成績評価の方法と基準】

授業での発表（50%）、討論への参加（50%）。欠席は基本的に認めません。この評価法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

アンケート非実施につき、特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

資料配布・課題提出等のために学習支援システム等を利用しますので、パソコンなどの情報端末を用意することが望ましいです。

【その他の重要事項】

言語研究の基礎として、音声に関する研究のアプローチを知っておくことは非常に重要です。今回のテキストは、とても基礎的なテキストですので、初歩から言語学・音声学の考え方が分かるような構成になっています。授業では、教材の内容を理解するだけではなく、その後の理論的な流れやより詳細な情報を皆さんが得られるように、一緒に議論しながら解説を加えていきます。言語の研究の基礎固めをしたい方、構造主義を基本から理解したい方には、特にオススメの内容になっています。言語に興味のある他専攻の方の履修も歓迎します。なお、進め方などについては、履修者の状況を見ながら変更をしていくことがあります。

【担当教員の専門分野等】

< 専門領域 > 言語学、英語学（形態論、統語論、音声学）、英語史など。
< 研究テーマ > 英語形態論（共時、通時）と多の領域との関わり、英語辞書の研究など。
< 主要研究業績 >

- Collateral Adjectives and Related Issues. (2011, Bern: Peter Lang)
- Two types of adjectives and the history of English word formation, 『歴史言語学』(2013, 日本歴史言語学会会誌) pp. 23-38.
- 『コンパスローズ英和辞典』。(2018, 赤須薫（編）、東京：研究社。文法解説を執筆。)

【カリキュラム上の位置づけ】

言語・文化に関して、比較・対照するというのを軸に学んでいく2単位の科目です。言語の研究法の基本を学んでいきます。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

The objective of this course is to provide you with the basic understanding of how you can conduct contrastive studies between Japanese, English, and other languages. Language is indeed a key for understanding various topics in our Graduate School. There are, however, many difficult technicalities in the research field of linguistics, to the extent that they become really high hurdles. So, this course hopefully works as an easy introduction to that research field. In this semester, we are going to do this by reading a textbook on phonetics, which constitutes the foundation of linguistic studies.

【到達目標（Learning Objectives）】

Three-fold:

1. to familiarise yourself with basic concepts and methodology of language studies,
2. to pursue generalisations through applying them,
3. to get accustomed to reading literature in foreign language(s).

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

You should read in advance and be ready for being asked various questions, or being asked for giving comments. According to the MEX regulation, the course of this type expects you to spend 4 hours for preparation and reviewing.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

- Basically, no absence allowed. Active participation in class sessions 50%, presentations 50%.

Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

CUA500G1 - 107 (文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 500)

多文化相関論 I A

LETIZIA GUARINI

サブタイトル：ジェンダー理論から現代文化を読み解く

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、稲原美苗、川崎唯史、中澤瞳、宮原優（編）『フェミニスト現象学 経験が響きあう場所へ』（ナカニシヤ出版、2023年）を読んで、ジェンダー理論やクィア理論の視点から文化を考察する力を養う。また具体的な文学作品や映像作品を取り上げ、クィアの視座から文化事象を分析する方法を身につける。

【到達目標】

- 1) ジェンダー理論やクィア理論についての基礎的な知識を身につける。
- 2) クィアの視座から文学・映像作品を読みとくことができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

稲原美苗、川崎唯史、中澤瞳、宮原優（編）『フェミニスト現象学 経験が響きあう場所へ』（ナカニシヤ出版、2023年）を読む。毎回、1名の発表者が、担当する章の内容をまとめ、論点整理やディスカッションのための問題提起を行う（発表時間は20分程度）。また、文学作品や映像作品を取り上げ、グループでディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	受講者の自己紹介。授業計画について説明を行う。発表の順番を決める。
第2回	『フェミニスト現象学 経験が響きあう場所へ』第1章	第1章「『女の子みたいに投げる』をもう一度考える—「女らしさ」のフェミニスト現象学」についてディスカッションを行う。
第3回	『フェミニスト現象学 経験が響きあう場所へ』第2章	第2章「『男らしさ』を「脱ぎ捨てる」のではなく—「男らしさ」のフェミニスト現象学」についてディスカッションを行う。
第4回	『フェミニスト現象学 経験が響きあう場所へ』第3章	第3章「乳児の育児における「母親という役割」—その「大変さ」を考える」についてディスカッションを行う。
第5回	『フェミニスト現象学 経験が響きあう場所へ』第4章	第4章「更年期の経験—心身の「揺らぎ」のフェミニスト現象学」についてディスカッションを行う。
第6回	『フェミニスト現象学 経験が響きあう場所へ』第5章	第5章「バスの現象学—トランスジェンダーと「眼差し」の問題」についてディスカッションを行う。
第7回	『フェミニスト現象学 経験が響きあう場所へ』第6章	第6章「雰囲気としての強制的（異）性愛—アセクシュアルを理解可能にするための現象学」についてディスカッションを行う。
第8回	『フェミニスト現象学 経験が響きあう場所へ』第7章	第7章「セクシュアリティの「ままならなさ」—ベルサーニとレヴィナスのクィアな性交渉論を通じて」についてディスカッションを行う。
第9回	『フェミニスト現象学 経験が響きあう場所へ』第8章	第8章「ステイホーム？ 一家にいないことの意味」についてディスカッションを行う。
第10回	『フェミニスト現象学 経験が響きあう場所へ』第9章	第9章「古いゆくこと、他者との関係—「ずれ」の経験と葛藤」についてディスカッションを行う。
第11回	『フェミニスト現象学 経験が響きあう場所へ』第10章	第10章「女性の経験とドメスティック・バイオレンス—その「みえにくさ」と妻/母役割」についてディスカッションを行う。
第12回	『フェミニスト現象学 経験が響きあう場所へ』第11章	第11章「古いを信じてはいけないのか？ —「女性らしさ」に近づきたい気持ちと離れたい気持ちのあいだで」についてディスカッションを行う。
第13回	『フェミニスト現象学 経験が響きあう場所へ』第12章	第12章「なぜ「私」が傷つくのか—アイデンティティの交差性と差別」についてディスカッションを行う。

第14回 『フェミニスト現象学 経験が響きあう場所へ』第13章

第13章「考慮に入れることはあてにすることである」—コミットメントのフェミニスト現象学」についてディスカッションを行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。課題のテキストを必ず事前に読む。

発表者は、テキストの内容をまとめ、議論を喚起する形で発表できるように準備する。

【テキスト（教科書）】

稲原美苗、川崎唯史、中澤瞳、宮原優（編）『フェミニスト現象学 経験が響きあう場所へ』（ナカニシヤ出版、2023年） 価格 ¥ 3,520

【参考書】

稲原美苗、川崎唯史、中澤瞳、宮原優（編）『フェミニスト現象学入門経験から「普通」を問い直す』（ナカニシヤ出版、2020年）
 菊池夏野、堀江有里、飯野由里子（編）『クィア・スタディーズをひらく 1』 晃洋書房、2019年
 菊池夏野、堀江有里、飯野由里子（編）『クィア・スタディーズをひらく 2』 晃洋書房、2022年
 菊池夏野、堀江有里、飯野由里子（編）『クィア・スタディーズをひらく 3』 晃洋書房、2023年
 森山至貴『LGBTを読みとく：クィア・スタディーズ入門』（ちくま新書、2017年）

【成績評価の方法と基準】

研究発表とグループワーク 60%、学期末レポート 40%で総合的に評価する。学期末レポートでは、クィアの視座から文学・映像作品について分析を行う（1500字程度）。

【学生の意見等からの気づき】

引き続き受講生のニーズに合わせてオンライン授業に変更する。

【学生が準備すべき機器他】

発表やレポートを準備するためのパソコンなど。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近現代文学、ジェンダー理論、表象文化論
 <研究テーマ> 現代日本社会における家族、とりわけ父親や父娘関係の表象について研究している。また、日本現代文学における妊娠・出産・授乳や現代文学とに焦点を当て、「女性の身体」という問題について文化表象の側面から考えている。
 <主要研究業績>

Guarini, Letizia. "Voices against Gender-based Violence in Contemporary Japanese Literature: An Analysis of Two Novels by Kaoruko Himeno and Aoko Matsuda." *Voiced and Voiceless in Asia*, edited by Halina Zawiszová and Martin Lavič ka, Vydavatelství Univerzity Palackého, 2023, pp. 457-486.

Guarini, Letizia. "Shōjo Sexuality in Post-War Japan: Parody and Subversion in Kurahashi Yumiko's Divine Maiden." *Japanese Studies* vol. 42, no. 3, pp. 339-353, DOI: 10.1080/10371397.2022.2134098

グアリーニ・レティツィア「娘は父の支配から逃れられるのか？—一角田光代の『ゆべの神様』と『父のボール』に見る父娘関係」『ジェンダー研究』第23号（公益財団法人東海ジェンダー研究所発）、2021年、55-79頁。

【Outline (in English)】

(Course outline)

In this class, we will discuss "Feminist Phenomenology" (eds. Minae Inahara et al., 2023). Students will learn about gender and queer theory applied to the analysis of culture and representation. They will also analyze specific literary and visual texts.

(Learning Objectives)

By the end of the course, students should be able to do the following:

- 1) Acquire basic knowledge about gender and queer theory.
- 2) Read literary and cultural works from the perspective of gender and queer studies.

(Learning activities outside of the classroom)

Students are required to read the reference material by the next session (one to three hours for every session). They are also expected to be prepared to deliver presentations in class.

(Grading Criteria /Policy)

The final grade will be decided based on the following:

Involvement during discussion and presentation: 60%

Final essay: 40%

CUA500G1 - 108 (文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 500)

多文化相関論 I B

LETIZIA GUARINI

サブタイトル：ジェンダーと身体

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、『ジェンダーと身体：解放への道のり』（川本玲子編、小鳥遊書房、2020年）を読んで、文化における身体構造と表象について考察しながら、ジェンダー・セクシュアリティ研究の観点から文学作品や映像作品を分析する力を養う。

【到達目標】

1. ジェンダー・セクシュアリティ理論の知識を身につける。
2. 幅広くメディアにおける身体の表象を分析する能力を身につける。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

『ジェンダーと身体：解放への道のり』（川本玲子編、2020年）を読む。毎回、発表者が担当する章の内容をまとめ、論点整理やディスカッションのための問題提起を行う（発表時間は20分程度）。また、様々なメディアを分析しながらグループでディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	受講者の自己紹介。授業計画について説明を行う。発表の順番を決める。
第2回	『ジェンダーと身体：解放への道のり』序と第1章	序「ジェンダー化された身体はどこへ向かうのか」、第1章「19世紀ヨーロッパの音楽界における楽器と身体—ビートルズ、クララ・シューマンの音楽活動を中心に」についてディスカッションを行う。
第3回	『ジェンダーと身体：解放への道のり』第2章	第2章「絵画が捉えた女性を取り巻く社会的変化—エドガー・ドガとメアリー・カサットの作例から」についてディスカッションを行う。
第4回	『ジェンダーと身体：解放への道のり』第3章	第3章「[ポスト] 新自由主義的ジェンダー再編—『イン・ハー・シューズ』から『花子とアン』へ」についてディスカッションを行う。
第5回	『ジェンダーと身体：解放への道のり』第4章	第4章「中国都市の「広場舞」の女性たち—公共空間で踊ることの意味」についてディスカッションを行う。
第6回	『ジェンダーと身体：解放への道のり』第5章	第5章「コミュニティ時代の男たち—障害、男性性、クリップ」についてディスカッションを行う。
第7回	『ジェンダーと身体：解放への道のり』第6章	第6章「スポーツと「男性性の保護区」の変容」についてディスカッションを行う。
第8回	『ジェンダーと身体：解放への道のり』第7章	第7章「フォード・マドックス・フォード『パレードの終わり』における男性性と身体」についてディスカッションを行う。
第9回	『ジェンダーと身体：解放への道のり』第8章	第8章「ラストベルトの生—炭鉱と男性性の幻想」についてディスカッションを行う。
第10回	『ジェンダーと身体：解放への道のり』第9章	第8章「女形を通してみる江戸のジェンダー」についてディスカッションを行う。
第11回	『ジェンダーと身体：解放への道のり』第10章	第10章「[共感と視線—ハナ・ギャズビー『ナネット』と未完の物語』についてディスカッションを行う。
第12回	『ジェンダーと身体：解放への道のり』第11章	第11章「ケア労働と代理母出産の「ユートピア」」についてディスカッションを行う。
第13回	個人研究発表	修士論文についての個人研究発表をしてもらいます。
第14回	まとめ	授業全体のまとめを行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。課題のテキストを必ず事前に読む。

発表者は、テキストの内容をまとめ、議論を喚起する形で発表できるように準備する。

【テキスト（教科書）】

川本玲子（編）『ジェンダーと身体：解放への道のり』（小鳥遊書房、2020年）価格 ¥ 2,820

【参考書】

菊池夏野、堀江有里、飯野由里子（編）『クィア・スタディーズをひらく 1』晃洋書房、2019年

菊池夏野、堀江有里、飯野由里子（編）『クィア・スタディーズをひらく 2』晃洋書房、2022年

菊池夏野、堀江有里、飯野由里子（編）『クィア・スタディーズをひらく 3』晃洋書房、2023年

長田杏奈（編）『エトセトラ VOL.3 私の私による私のための身体』（etc.books、2020年）

【成績評価の方法と基準】

研究発表とグループワーク 60%、学期末レポート 40%で総合的に評価する。学期末レポートでは、ジェンダー・セクシュアリティ研究の観点から文学作品や映像作品について論じる（1500字程度）。

【学生の意見等からの気づき】

引き続き受講生の状況に合わせてオンライン授業に変更します。

個人研究を発表し、他の受講生からフィードバックを受けることが重要だと気づきました。

【学生が準備すべき機器他】

発表やレポートを準備するためのパソコンなど。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 日本近現代文学、ジェンダー理論、表象文化論

<研究テーマ> 現代日本社会における家族、とりわけ父親や父親関係の表象について研究している。また、日本現代文学における妊娠・出産・授乳や現代文学とに焦点を当て、「女性の身体」という問題について文化表象の側面から考えている。

<主要研究業績>

Guarini, Letizia. "Voices against Gender-based Violence in Contemporary Japanese Literature: An Analysis of Two Novels by Kaoruko Himeno and Aoko Matsuda." *Voiced and Voiceless in Asia*, edited by Halina Zawiszová and Martin Lavič ka, Vydavatelství Univerzity Palackého, 2023, pp. 457-486.

Guarini, Letizia. "Shōjo Sexuality in Post-War Japan: Parody and Subversion in Kurahashi Yumiko's Divine Maiden." *Japanese Studies* vol. 42, no. 3, pp. 339-353, DOI: 10.1080/10371397.2022.2134098

グアリーニ・レティツィア「娘は父の支配から逃れられるのか？—角田光代の『ゆうべの神様』と『父のボール』に見る父親関係』『ジェンダー研究』第23号（公益財団法人東海ジェンダー研究所発）、2021年、55-79頁。

【Outline (in English)】

(Course outline)

In this course, we will discuss "Gender and the Body: The Road Toward Liberation" (edited by Kawamoto Reiko, 2020).

This course is designed to enhance students' understanding of the construction and representation of bodies. Students will learn to analyze literary and cultural texts from a gender/sexuality perspective. (Learning objectives)

By the end of the course, students should be able to do the following:

- 1) Understand concepts in gender and sexuality theory.
- 2) Analyze representations of the body in a wide range of media.

(Learning activities outside of the classroom)

Students are required to read the reference material by the next session (one to three hours for every session). They are also expected to be prepared to deliver presentations in class.

(Grading Criteria / Policy)

The final grade will be decided based on the following:

Involvement during discussion and presentation: 60%

Final essay: 40%

CUA500G1 - 109 (文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 500)

多文化相関論Ⅱ A

小川 敦

サブタイトル：多言語社会を考える

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

多言語社会や移民社会における言語と教育や言語と格差についての文献を読み、考え、議論します。
ここでいう「多言語社会」とは、シンガポールやカナダのような複数の公用語が存在する国や社会だけを指すものではありません。母語（母方言）と標準語を使う場合、話し言葉と書き言葉が異なる場合、外国語として様々な言語を学ぶ場合も広く「多言語」として考え、広い視野で考えるようにしたいと思います。

【到達目標】

- ・複数の言語が用いられる社会にもさまざまな形があることを理解する。
- ・多言語社会における社会のありよう、とくに言葉と教育、社会の格差のありようについて理解し、自らの研究の糧とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業で扱う文献の候補を初回授業に提示します。受講生の希望によっては社会言語学の基本書を読むこともあります。
受講生は必ずレジュメを作って発表していただきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業で扱う資料を選定し、担当者を決めます
第2回	授業テーマに関する文献講読-1	文献について発表し、議論を行います
第3回	授業テーマに関する文献講読-2	文献について発表し、議論を行います
第4回	授業テーマに関する文献講読-3	文献について発表し、議論を行います
第5回	授業テーマに関する文献講読-4	文献について発表し、議論を行います
第6回	授業テーマに関する文献講読-5	文献について発表し、議論を行います
第7回	授業テーマに関する文献講読-6	文献について発表し、議論を行います
第8回	授業テーマに関する文献講読-7	文献について発表し、議論を行います
第9回	授業テーマに関する文献講読-8	文献について発表し、議論を行います
第10回	授業テーマに関する文献講読-9	文献について発表し、議論を行います
第11回	授業テーマに関する文献講読-10	文献について発表し、議論を行います
第12回	授業テーマに関する文献講読-11	文献について発表し、議論を行います
第13回	授業テーマに関する文献講読-12	文献について発表し、議論を行います
第14回	授業のまとめ	授業のまとめを行います

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表者は担当する章や論文のレジュメを準備します。充実した議論にするため、他の受講生は次回扱われる章や論文をよく読んで自分なりのディスカッションポイントを考えてきてください。
本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に教科書は指定しません。授業で選んだものについて、PDFまたは紙で配布します。

【参考書】

授業初回に提示します。授業で読む文献をいくつかの候補から選びます。

【成績評価の方法と基準】

最終レポート50%、授業への積極的な参加50%とします。

【学生の意見等からの気づき】

学生の希望や意見に常に耳を傾け、授業の改善につとめます。

【学生が準備すべき機器他】

PCやタブレット端末があると便利です。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
社会言語学、言語政策（主にドイツ語圏）
<研究テーマ>
多言語社会研究、移民社会の言語教育政策、ルクセンブルク研究
<主要研究業績>
小川敦（2022）「ルクセンブルク語振興戦略」とその成立背景に関する一考察」『エネルギー』47号、29-50頁
小川敦（2021）「多言語社会ルクセンブルクにおける言語イデオロギーの「対抗」」柿原武史・仲潔・布尾勝一郎・山下仁（編著）『対抗する言語 日常生活に潜む言語の危うさを暴く』（三元社）37-66頁
大澤麻里子・小川敦・境一三「イタリア・南チロルにおけるCLIL - ドイツ語系学校への導入を巡って-」『言語政策』16号、29-52頁

【Outline (in English)】

【Course outline】

The issues of language and education and language and inequality in multilingual and migrant societies will be the subject of discussion and debate.

【Learning Objectives】

Students will understand that there are various forms of societies in which more than one language is used.
Students will develop an understanding of the different forms of multilingual societies, particularly in relation to language, education and social inequalities.

【Learning activities outside of classroom】

Before/after each class meeting, students will be expected to spend 2 hours to understand the course content.

【Grading Criteria /Policy】

Final report 50%
Active participation 50%

CUA500G1 - 110 (文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 500)

多文化相関論Ⅱ B

小川 敦

サブタイトル：言語の政策を考える

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献を読みながら、多言語社会や移民社会における言語と教育、格差、権利、言語政策について考え、議論します。

ここでいう「多言語社会」とは、シンガポールやカナダのような複数の公用語が存在する国や社会だけを指すものではありません。母語（母方言）と標準語を使う場合、話し言葉と書き言葉が異なる場合、外国語として様々な言語を学ぶ場合も広く「多言語」として考え、広い視野で考えるようにしたいと思います。

【到達目標】

- ・複数の言語が用いられる社会にもさまざまな形があることを理解する。
- ・言語に関する政策を体系的に理解する。
- ・多言語社会における社会のありよう、とくに言葉と教育、社会の格差のありようについて理解し、自らの研究の糧とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業で扱う文献の候補を初回授業に提示します。テーマはあまり変わりませんが、春学期からの連続で受講することも考慮して、春学期とは別の文献を扱います。

受講生は必ずレジュメを作って発表していただきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業で扱う資料を選定し、担当者を決めます
第2回	授業テーマに関する文献講読-1	文献について発表し、議論を行います
第3回	授業テーマに関する文献講読-2	文献について発表し、議論を行います
第4回	授業テーマに関する文献講読-3	文献について発表し、議論を行います
第5回	授業テーマに関する文献講読-4	文献について発表し、議論を行います
第6回	授業テーマに関する文献講読-5	文献について発表し、議論を行います
第7回	授業テーマに関する文献講読-6	文献について発表し、議論を行います
第8回	授業テーマに関する文献講読-7	文献について発表し、議論を行います
第9回	授業テーマに関する文献講読-8	文献について発表し、議論を行います
第10回	授業テーマに関する文献講読-9	文献について発表し、議論を行います
第11回	授業テーマに関する文献講読-10	文献について発表し、議論を行います
第12回	授業テーマに関する文献講読-11	文献について発表し、議論を行います
第13回	授業テーマに関する文献講読-12	文献について発表し、議論を行います
第14回	授業のまとめ	授業のまとめを行います

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

発表者は担当する章や論文のレジュメを準備します。充実した議論にするため、他の受講生は次回扱われる章や論文をよく読んで自分なりのディスカッションポイントを考えてきてください。
本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特に教科書は指定しません。授業で選んだものについて、PDFまたは紙で配布します。

【参考書】

授業初回に提示します。授業で読む文献をいくつかの候補から選びます。

【成績評価の方法と基準】

最終レポート50%、授業への積極的な参加50%とします。

【学生の意見等からの気づき】

学生の希望や意見に常に耳を傾け、授業の改善につとめます。

【学生が準備すべき機器他】

PCやタブレット端末があると便利です。

春学期とは別の文献を扱います。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

社会言語学、言語政策（主にドイツ語圏）

<研究テーマ>

多言語社会研究、移民社会の言語教育政策、ルクセンブルク研究

<主要研究業績>

小川敦（2022）「ルクセンブルク語振興戦略」とその成立背景に関する一考察」『エネルギー』47号、29-50頁

小川敦（2021）「多言語社会ルクセンブルクにおける言語イデオロギーの「対抗」」柿原武史・仲潔・布尾勝一郎・山下仁（編著）『対抗する言語 日常生活に潜む言語の危うさを暴く』（三才社）37-66頁
大澤麻里子・小川敦・境一三「イタリア・南チロルにおけるCLIL - ドイツ語系学校への導入を巡って-」『言語政策』16号、29-52頁

【Outline (in English)】**【Course outline】**

The issues of language and education and language and inequality in multilingual and migrant societies will be the subject of discussion and debate.

【Learning Objectives】

-Students will understand that there are various forms of societies in which more than one language is used.

-Students will develop a systematic understanding of language-related policies.

-Students will develop an understanding of the different forms of multilingual societies, particularly in relation to language, education and social inequalities.

【Learning activities outside of classroom】

Before/after each class meeting, students will be expected to spend 2 hours to understand the course content.

【Grading Criteria /Policy】

Final report 50%

Active participation 50%

HIS500G1 - 111 (史学/History 500)

多文化相関論Ⅲ

佐々木 一恵

サブタイトル：歴史学の諸アプローチ

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、歴史学における方法論的展開の概要を理解することを目指します。また、歴史学の方法論に基づき研究論文を執筆していけるようになることを目的とします。

今年度は「エゴ・ドキュメントと歴史学」をテーマに、親密圏に注目しながら個人の日記・手紙・回想録について議論していきます。

【到達目標】

1. 歴史学におけるこれまでの方法論的特徴とその展開について理解できるようになる。
2. 歴史学の方法論に基づき一次史料を用いて研究論文を書いていけるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の前半は、発表者が文献に関する説明をレジュメに沿って行うと共に、教員が必要に応じて補足説明を行う。授業の後半では、文献をベースにディスカッションを行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	イントロダクション	授業概要の説明
2回	方法論としてのエゴ・ドキュメント	【テキスト】 ◎「エゴ・ドキュメントと歴史学: オーラル・ヒストリーとの対話に向けて」
3回	親密圏について	【テキスト】 『公共性』 第四章「親密圏／公共圏」
4回	手紙・日記・回想録の分析①	【テキスト】 ◎『スターリニズムの経験』序章 ・生きられたスターリニズムへ ・本書の視角－親密性
5回	手紙・日記・回想録の分析②	【テキスト】 ◎『スターリニズムの経験』第一章 ・建設と抑圧の時代を生きる－1930年代の若者の日記
6回	手紙・日記・回想録の分析③	【テキスト】 ◎『スターリニズムの経験』第二章 ・試練に立つ家族－大テロル下の権力への手紙／家族への手紙
7回	手紙・日記・回想録の分析④	【テキスト】 ◎『スターリニズムの経験』第三章 ・書きつながれる友情の世界－共同日記にみる親密圏と公共圏

8回	手紙・日記・回想録の分析⑤	【テキスト】 ◎『スターリニズムの経験』第四章 ・自己と体制の晩年を生きて－ソヴィエト市民の「自分史」
9回	エゴ・ドキュメント史料分析演習①	【テキスト】 ◎『1930年代の只中で一名も無きフランス人たちの言葉』 ・国際連盟、希望と不安 ・本来危険なドイツ ・イギリス人、先祖代々の宿敵
10回	エゴ・ドキュメント史料分析演習②	【テキスト】 ◎『ドイツ国防軍の兵士たちの100通の手紙』から抜粋
11回	エゴ・ドキュメント史料分析演習③	【テキスト】 ◎『バグダッド・バーニングーイラク女性の占領下日記』 ・2003 August ・2004 April
12回	歴史における個人と社会	【テキスト】 ◎『歴史とは何か』第二章 ・社会と個人
13回	エゴ・ドキュメントに関する座談会	史料としてのエゴ・ドキュメントについて議論する。
14回	総括	今学期のまとめ

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・文献を読み、自分が関心を持った概念や内容について、意見をまとめてGoogle Classroomに授業が始まる1時間前までにアップロードしてください。
- ・文献の発表者はレジュメをパワー・ポイントで作成してください。
- ・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

- ◎長谷川貴彦「エゴ・ドキュメントと歴史学: オーラル・ヒストリーとの対話に向けて」『Cosmopolis』12巻、2018年。
- ◎齋藤純一『公共性』（岩波書店、2000年）。
- ◎松井康浩『スターリニズムの経験－市民の手紙・日記・回想録から』（岩波書店、2014年）。
- ◎アラン・コルバン『1930年代の只中で一名も無きフランス人たちの言葉』（藤原書店、2023年）。
- ◎マリー・ムーティエ（森内薫訳）『ドイツ国防軍の兵士たちの100通の手紙』（河出書房新社、2016年）。
- ◎リバーバンド（リバーバンド・プロジェクト訳）『バグダッド・バーニングーイラク女性の占領下日記』（アートン、2004年）。
- ◎E. H. カー（近藤和彦訳）『歴史とは何か』（岩波書店、2022年）。

【参考書】

- Penny Summerfield, *Histories of the Self: Personal Narratives and Historical Practice* (Taylor & Francis, 2018).

【成績評価の方法と基準】

授業への貢献度・参加度・提出物（30点）、発表（70点）で、60点以上が合格となります。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【学生が準備すべき機器他】

この授業ではGoogle Classroomを使用します。初回の授業の後に、Google Classroomへの登録をお願いします。

【担当教員の専門分野等】

- <専門領域>
アメリカ合衆国史 思想史 ジェンダー
- <研究テーマ>
・アメリカ革新主義思想の宗教・ジェンダー・セクシュアリティからの再考
・20世紀転換期アメリカにおける個人主義・リベラリズム・資本主義に抗する信仰運動としての米国聖公会のアンソロ・カトリシズム
<主要研究業績>
○『「神に奉獻した生」とプロテスタントの女性主体－19世紀後半のアメリカにおける聖マリア修女会の実践から－』『異文化』24号、2023年。

- 「善き生の回復を求めて—ラルフ・アダムズ・クラムの教会建築論に見る革新主義期アメリカに抗するアングロ・カトリシズムの想像力(イマジェリー)」『年報アメリカ研究』第56号、2022年。
- 「プロテスタント主義の倫理と革新主義期アメリカの精神—アングロ・カトリシズムの視点から見る生政治—」『異文化』23号、2022年。
- 「聖十字架修女会の会員とセツルメント運動 —生と活動の様式としてのアングロ・カトリシズム」『ジェンダー史学』16号、2020年。
- 「『第三者』性のポリティクス—19世紀末ニューヨークの聖公会員の社会改革運動と公共領域の再編」『アメリカ史研究』42号、2019年。
- 「ジェンダーからみるグローバル・ヒストリー—女子教育とジャンヌ=ダルクの『普遍化』から」、上智大学アメリカ・カナダ研究所、イベロアメリカ研究所、ヨーロッパ研究所共編『グローバル・ヒストリー—ナショナルを超えて』上智大学出版社、2018年。
- Redemption and Revolution: American and Chinese New Women in the Early Twentieth Century (Ithaca, NY: Cornell University Press, 2016).
- “Excludable Aliens vs. One National People: The U.S. Chinese Exclusion Policy and the Racialization of Chinese in the United States and China,” The Japanese Journal of American Studies (no.23, 2012).

【Outline (in English)】

The course introduces basic historiographical issues in the discipline of history. Students are expected to develop the ability to apply historical methods of inquiry to the analysis of their Master's theses/Research papers.

By the end of the course, students are expected to be able to: 1) understand the methodological developments in the discipline of modern history and 2) write research papers based on historical methodology using primary sources.

Students will be expected to read assigned materials and upload one-page summary of the assigned text and the points of interest to Google Classroom before class begins. Presenters of assigned materials should prepare presentations in PowerPoint format.

The final grade is determined by presentations (70%) and assignments (30%).

ART500G1 - 112 (芸術学 / Art studies 500)

多文化芸術論 I

佐藤 千登勢

サブタイトル：映画を読む

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、芸術テキストを審美的快楽の体験の場としてのみならず、社会批判の装置として捉え直し、その表現、表象の語る多義性と重層性について考え、議論します。ロシア（ソ連）、チェコ（チェコスロバキア）、ポーランドの文学作品や映画を用いながら、それぞれの国々の社会、経済、文化、歴史、国家間の勢力均衡を解説する作業を通して、多義的記号体系を分析・洞察する力を養います。

【到達目標】

映画作品を中心に、芸術言語が担う審美的機能と社会批判の機能という一見相反する多義的な表現の読解を重ねることで、これを自身の見解や思考の組み立て方に役立てて、論理的に議論やプレゼンテーションを展開する力を獲得することが目標となります。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

旧社会主義国家で創造された芸術テキストは、その国の文化や社会構造、イデオロギー、歴史的背景、国家間の関係を濃厚に映し出す、いわば、体制と人間社会の縮図モデルです。しかし、多義的で重層的な言語（映画言語、音楽言語を含む）により、それは、多様な解釈を許容するとともに、作者の真の意図やメッセージを解説すべき錯綜した迷宮のような作品となっていることも少なくありません。私たちは、手法や表象、形式といった審美的観点に着目すると同時に、《抑圧》《イデオロギーによる民族統合》《民族差別》《冷戦》《ソ連邦崩壊と離散》《ナショナリズム》といった社会的・歴史的キーワードを基に、二重構造の芸術テキストを分析・批評していきます。授業でなされた議論や自身の見解をA4一枚程度にまとめたリアクションペーパーを毎回、提出してもらいます。リアクションペーパーにはコメントを加えて教場もしくは学習支援システムを通して返却します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	芸術の機能について -- シクロフスキーの《異化》の発見から日常批判へ（1）	ロシア・フォルマリズム宣言としても名高いシクロフスキーの『手法としての芸術』を基に、「異化-自動化」「日常-非日常」「手法-素材」等の二項対立の芸術上の、また日常における意義を考える。
第2回	芸術の機能について -- シクロフスキーの《異化》の発見から日常批判へ（2）	ロシア・フォルマリズムの主導者シクロフスキーが提唱した「異化」の概念について具体例を確認しつつ、理解を深める。
第3回	煽動と挑発-- モンタージュ派：エイゼンシュテイン	エイゼンシュテイン『ストライキ』、『戦艦ポチョムキン』、『十月』の煽動的なモンタージュについて概説。
第4回	煽動と挑発-- モンタージュ派：ジガ・ヴェルトフ	都市化と複製技術の発達を背景としたヴェルトフの手法としてのモンタージュについて考察。

第5回	プロパガンダー-- ブドフキンの映画言語『アジアの嵐』	ブドフキン『アジアの嵐』における多様なモンタージュを分析して審美的側面を確認しながら、同時にこの作品が呈示する多民族併合や社会主義革命の正当化という多層的テーマを読む。
第6回	プロパガンダー-- トゥーリンの映画言語『トゥルクシブ』	プロパガンダの煽動性の記号や表象を現前化させずに、宗教的煽動とも言える超越的力の存在と崇高さの創出、サブリミナル的手法によるプロパガンダの力を分析していく。
第7回	面従腹背の二重構造-- エイゼンシュテイン『イワン雷帝』	エイゼンシュテインの世界的影響力を配下におくためにスターリンが制作依頼した『イワン雷帝』。この作品にはスターリンを批判・揶揄する記号や表象、表現が構造化されている。作品をめぐってのスターリンとエイゼンシュテインとの闘争という背景も交えつつ、概説。
第8回	面従腹背の二重構造-- アンジェイ・ワイダの映画言語（1）	ポーランドがソ連の衛星国であった時代、当局の批判やソ連軍の糾弾は不可能であった。そこで、ワイダがポーランド国民に向けたメッセージの二重構造とはいかなるものだったか、映画テキストにおける表象や象徴の解釈の多様性、ならびに共通のコードについて考える。『灰とダイヤモンド』、『地下水道』を扱う。
第9回	検閲からの解放の果て-- アンジェイ・ワイダの映画言語（2）	東欧革命、ソ連邦崩壊の後、歴史は、再評価、書き換え、名誉回復を迫られ、表現に検閲は消滅した。その時、「カティンの森事件」をワイダはどう描いたかを検証する。
第10回	審美的《イソップ言語》-- タルコフスキー『鏡』	幼年時代の回想的要素とドキュメンタリー映像が印象的な『鏡』。だが、幼年期の断片的回想にはスターリン時代の粛清のエピソードが多様な様式で重ねられている。象徴性や映画言語の二重性に着目しつつ、『父性の喪失』についても考えていく。
第11回	抵抗と挑発-- ヴェラ・ヒティロヴァの映画言語	旧チェコスロバキアの統制から自由になろうとする国民の意志を、二人の自由闊達な少女たちを通してスタイリッシュに描出するセンス、そして映画言語の二重性、台詞と映像の不一致や台詞の重みについて考察。
第12回	寓話的諷刺と不条理-- シャフナザーロフ『ゼロ・シティ』	ソ連社会を幾重にもパロディ化した不条理作品の珠玉『ゼロ・シティ』を基に、終末期のソ連の表象、シャフナザーロフの映画言語を考察する、また、父親（国家）とは何ものか？ について考える。
第13回	寓話的諷刺不条理-- アブラーゼ『懺悔』	ソ連で社会現象となった映画『懺悔』。スターリンとヒトラーを融合させたような支配者、彼に両親を粛清された少女。支配者の一族のその後の償いの物語は、史実とシュールな感覚やユーモアを交えて表現される。その寓話的表象に着目しつつ、史実、記憶、不条理について考察していく。

- 第14回 国家と個人— パー ソ連崩壊後のロシア国民のメン
ヴェル・チュフライ タリティを、《父親》に裏切られ
『パパって何?』 た「義理の息子」の回想に重ね
合わせた寓話的手法とその重み
について検討。《父殺し》の伝統
についても考察。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

レジュメの内容や視聴した映像資料に対する自身の見解等をA4一枚程度にまとめたリアクションペーパーを次週毎に毎回提出する（学習支援システムを利用）。リアクションペーパー作成に要する時間は1時間程度。

【テキスト（教科書）】

教科書は使用しません。教員の作成した資料を、教場もしくは学習支援システムを通して配付します。

【参考書】

参考書は使用しませんが、参考文献は、随時、レジュメに掲載します。

【成績評価の方法と基準】

平常点（50%）、リアクションペーパー（50%）として総合的に判断します。本授業の到達目標の60%以上を達成した学生を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

とくにありませんでした。

【学生が準備すべき機器他】

学習支援システムを通して資料配付、課題提示を行うことがありますので、ネットの通信環境を整えておいてください。

【担当教員の専門分野等】

20世紀ロシア文学。ロシア・フォルマリズムを中心とした芸術理論。ソ連およびロシアの映画。

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/23/0002283/profile.html>

【Outline (in English)】

● Course outline

We consider artistic texts not only as a place for experiencing aesthetic pleasures but also as a device of social criticism, and discuss the polysemy and multiplicity of their expressions and representations.

● Learning Objectives

The aim is to acquire the ability to logically develop discussions and presentations by repeatedly watching movie works and using them to formulate one's own views and thoughts.

● Learning activities outside of classroom

After each class meeting, you will be expected to submit a reaction paper that summarizes your own views on the video materials you watched by the next week. It takes about 1 hour to create the reaction paper.

● Grading Criteria/ Policy

Final grade will be calculated according to the following process: Usual performance score(50%) and short reports(50%). To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

ART500G1 - 113 (芸術学 / Art studies 500)

多文化芸術論 II

廣松 勲

サブタイトル：フランコフォニー文学と社会

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

複数文化に広がる社会文化的現象を分析するために、この授業では「カナダ・ケベック州」と「カリブ海域諸島のフランス海外県」という、2つの「フランス語圏（フランコフォニー）」に注目する。いずれの地域もアメリカ大陸の一部であり、「英語圏（アングロフォニー）」とも密接に関わる地域でもある。これらの地域の芸術は、作品の形式に集中した「内在分析」だけではとらえ切れない豊饒な問題系を抱えている。そのため、文学・映画テキストに「社会学的なテキスト分析」を施すことで、テキストとコンテキストとの繋がりを、各地域の作品をもとに分析する。

このような具体的な作品分析を行うため、事前に各地域の社会文化的・言語学的状況を紹介することになる。

【到達目標】

この授業では、複数の言語・文化が併存する地域において生産される芸術作品（主に文学と映画）を分析対象として、いかに社会文化的現象が芸術作品に書き込まれるのかを検討する。

とりわけ、英語文化とフランス語文化が併存する「カナダ・ケベック州」、そしてフランス語文化とクレオール語文化が併存する「カリブ海域諸島」を分析対象にしつつ、学生には文学・映画テキストの「社会学的なテキスト分析」の方法を身に付けてもらうことを目指す。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

日本語による講義を行う。受講者は関心のあるテーマまたは作品について調査・分析を行い、それを基にした期末レポートを提出してもらう。

なお、期末レポートについては、フランスまたはフランス語圏に少しでも関連するならば、自らの研究テーマに即した発表を行うこともできる（比較分析など）。

さらに、毎回の授業においてコメントシートを提出してもらうことで、学生の理解度・考えなどを把握しておきたい。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション：フランス語圏とは何か？	「フランコフォニー」や「アングロフォニー」の歴史・地理
第2回	カリブ海域諸島のフランス語圏①	カリブ海域諸島の社会文化的・言語学的状況
第3回	カリブ海域諸島のフランス語圏②	エメ・セゼールの長編詩『帰郷ノート』
第4回	カリブ海域諸島のフランス語圏③	エドゥアル・グリッサンの小説『レザルド川』
第5回	カリブ海域諸島のフランス語圏④	パトリック・シャモワゾーの小説『素晴らしきソリボ』
第6回	カリブ海域諸島のフランス語圏⑤	カリブ海域諸島の思想
第7回	カリブ海域諸島のフランス語圏⑥	カリブ海域諸島の映画：『マルチニクの少年』
第8回	カナダ・ケベック州のフランス語圏①	カナダ・ケベック州の社会文化的・言語学的状況
第9回	カナダ・ケベック州のフランス語圏②	ジャック・ゴドブーの小説『やあ、ガラルノー！』
第10回	カナダ・ケベック州のフランス語圏③	エミール・オリヴィエの小説『パッサージュ』（邦訳なし）
第11回	カナダ・ケベック州のフランス語圏④	ダニー・ラフェリエール的小説『吾輩は日本作家である』
第12回	カナダ・ケベック州のフランス語圏⑤	カナダ・ケベック州の思想
第13回	カリブ海域諸島からケベック州へ	カリブ海域とケベック州とのつながり：セゼールのドキュメンタリーを介して
第14回	総括	社会と芸術とのつながり方

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・本講義で扱う文学作品については、一作を除いて、ほぼ全て邦訳が存在する。受講生には、できるだけ翻訳文献にも触れてほしい。

・授業で扱うアメリカ大陸のフランス語圏については、それぞれ自分自身でも社会状況などを事前に調べておいて欲しい。

・本授業の準備学習・復習時間は、合計4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

・毎回資料を配布します。

【参考書】

・平野千香子著『フランス植民地主義の歴史』人文書院、2002年。

・鳥羽美鈴著『多様性のなかのフランス語』関西学院大学出版会、2012年。

・秋田茂著『イギリス帝国の歴史』中公新書、2012年。

・井野瀬久美恵著『興亡の世界史 大英帝国という経験』講談社学術文庫、2017年。

【成績評価の方法と基準】

・平常点と期末レポートに基づき、総合的に評価する。

①平常点（コメントシートなど）：30%

②期末レポート：70%

【学生の意見等からの気づき】

・講義科目ではあるが、できるだけ学生が自らの考え・反応などを講義中に述べられるような雰囲気づくりに努めたい。

・内容について、学生の関心に合わせて調整する必要があるため、学生とよく相談したい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>フランコフォニー文学

<研究テーマ> 脱植民地化以後のメランコリー、トランスカルチャー等

<主要研究業績> "Mélancolie postcoloniale : relecture de la mémoire collective et du lieu d'appartenance identitaire chez Patrick Chamoiseau et Émile Ollivier" (モントリオール大学提出博士論文)

【Outline (in English)】

This course introduces the foundations of literature of French speaking world (especially in the Americas) to students taking this course. They can learn also the methodology of literary research while reading literary text and social context at the same time.

The goals of this course are to understand and explain the socio-cultural situation of francophone literature.

Before and after each class meeting students will be expected to spend four hours reading the relevant documents.

Your overall grade in the class will be decided based on the followings: in-class contributions (discussion, reaction paper, etc): 30%, term-end report: 70%.

POL500G1 - 114 (政治学/Politics 500)

異文化社会論 I A

今泉 裕美子

サブタイトル：地域と国際関係：植民地社会からのアプローチ

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

植民地社会を、異なる文化をもつ人及びその集団同士の関係、移動によって形成される「地域」として捉え、それら「地域」が国際関係をいかに構成し、変化させているのかを学ぶ。

過去の植民地社会のみならず、現代も植民地的な状況におかれている社会、植民地支配が宗主国と植民地に生み出した移民社会、旧植民地宗主国に新たな形で表れている植民地主義も対象とする。

本年度対象とするのは日本統治下にあった旧南洋群島、特にマーシャル諸島に焦点をおく。旧南洋群島は、第二次世界大戦時まで日本の委任統治下に置かれたが、それは日本が第一次世界大戦時に参戦した1914年、これらの島々を占領したことが契機となる。そして今年はこの占領から110周年目を迎える。また、戦後日本は、1954年の「ビキニ事件」によって再度、この島々に関心を持つようになったが、今年はその70周年目ともなる。

本授業では、第二次世界大戦前の日本の旧南洋群島の植民地化と、戦後のマーシャル諸島での核実験、および現在これらの島々が抱える問題を、“Nuclear Colonialism”をテーマとして関連づけて考える。

【到達目標】

1. 植民地社会を人および人の集団の移動、運動、暮らし、経験などから考察し、これに必要な基本的な概念、理論、思想について理解できる。
2. 植民地支配体制と植民地社会の相互の連関から国際関係の特徴を把握し、植民地支配が過去にもたらした／形を変えて今なお再生産される問題を、植民地支配を受けた／受けている人びとの取り組みから理解できる。
3. 一見、自身の研究課題と異なるテーマであっても、自らの関心や研究課題とのつながりを「発見」することを通じて、広領域学としての国際関係学(International Studies)、および地域研究の方法を理解し、自身の研究に応用できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

1. 毎回報告者を決め、割り当てられたテキストあるいは資料に関する報告、報告者以外は、質問やコメントを準備し、ディスカッションを行うことを基本とする。テーマによっては講義を行う。
2. 本授業に関連する国内外の情勢、受講生の理解度、関心に応じて授業計画を一部変更することがある。
3. 対面で行うことを原則とするが、オンラインで実施する回がある可能性がある【【その他の注意事項】を確認して下さい】。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の進め方、受講生の関心を共有。資料 (a) (b) を手がかりに、“Nuclear Colonialism”に関する太平洋島嶼の基礎情報、問題の所在、女性が活動の中心になること、など。
2	Nuclear Colonialism 1	第二次世界大戦後初の米国によるマーシャル諸島での核実験 Operation Crossroads(1946) について。
3	History and Identity	マーシャル諸島共和国の歴史教科書 (c) を手がかりにマーシャル諸島の人びとの歴史に対する考え方、記録、継承について。
4	Nuclear Colonialism 2	米国によるマーシャル諸島での Operation Castle における水爆 Bravo(1954) について。
5	Nuclear Colonialism 3	(c) のマーシャル諸島での核実験、ミサイル基地化について。
6	Nuclear Colonialism 4	「ビキニ事件／第五福竜丸事件」から水爆 Bravo と日本との関わりについて。
7	Nuclear Colonialism 5	(c) のマーシャル諸島の信託統治時代について。
8	中間のまとめ	植民地化の歴史を学ぶうえでの課題の整理。
9	History of Colnization of Marshall Islands 1	(c) のマーシャル諸島の自然、文化、社会、ドイツによる統治まで。

10	History of Colnization of Marshall Islands 2	(c) のドイツ統治時代。
11	History of Colnization of Marshall Islands 3	(c) の日本統治時代と第二次世界大戦期。
12	Decolonization of Nuclear Pacific 1	太平洋の軍事化、気候温暖化、開発問題からみた“Nuclear Colonialism”と太平洋島嶼の人びとの取り組み。
13	Decolonization of Nuclear Pacific 2	第12回授業の受講生の関心に基づくトピックス。
14	まとめ	本授業の内容を総括する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

英語文献は分量が少ない資料であり、日本語の参考文献を随時紹介する。

(a) From the Constitution of the Federated States of Micronesia, 1975, Evelyn Flores, and Emelhter Kihleng eds., *Indigenous Literatures from Micronesia*, Honolulu: University of Hawai'i Press, 2019.

(b) The Indigenous Caucus of the Nuclear Connections Across Oceania Conference” O tepoti Declaration,” December 1, 2022.

(c) Julianne M. Walsh with Hilda Heine, Carmen Milne Bigler, and Mark Stege, *Etto nan Raan Kein: A Marshall Islands History*, Honolulu: Bess Press, 2012.

【参考書】

・「植民地」、「帝国主義」、「新植民地主義」梅村忠夫監修『新訂増補 世界民族問題事典』平凡社、2002年。

・前田哲男監修、グローバルヒバクシャ研究会編著『隠されたヒバクシャ』凱風社、2005年。

・Dan Lin & Kathy Jetnl-Kijiner, "Anointed," 2019. (https://www.youtube.com/watch?v=_isgBtJfPzU)

・キャシー・ジェットニル=キジナー、一谷智子(訳)『開かれたかごーマーシャル諸島の浜辺から』みすず書房、2023年。

その他、随時、提示する。

【成績評価の方法と基準】

授業での討論、参加度など30%、報告30%、レポートなどの提出物40%。以上の成績評価をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【学生が準備すべき機器他】

・オンラインライブで授業を行う回を設ける可能性があるため、パソコンやタブレットなどの通信機器、安定的な接続、通信容量に制限がない環境を各自で準備する。

【その他の重要事項】

・第1回目授業に参加する受講生（第2回以後も受講するか決めるための参加も可能）は、学習支援システム Hoppii に仮登録し、授業情報やお知らせを必ず確認して下さい。

・連絡や報告レジュメは学習支援システムの掲示板にて行うため、投稿通知の連絡が入るよう設定すること。

・やむを得ない事情で欠席する場合は事前に連絡すること。事前に連絡出来ないタイミングでやむを得ない事情が生じて欠席した場合は、事後に速やかに連絡すること。

【担当教員の専門分野等】

国際文化研究科教員紹介 (https://www.hosei.ac.jp/gs/kokusaibunka/kyoin/IMAIZUMI_Yumiko/?auth=9abbb458a78210eb174f4bdd385bcf54)、法政大学学術研究データベース (<https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001794/profile.html>) を参照。

・およそ30年にわたって行ってきた日本国内、ミクロネシアでの聞き取りを踏まえ、沖縄県史、市史などの編さん、執筆に関わってきた。また米国議会図書館の Nan'yo Collection や琉球大学付属図書館矢内原忠雄文庫など複数の機関で、旧南洋群島関係の史料の発掘、整理、公開に関わった。「大文字の歴史」と「小文字の歴史」の関係を、史資料の発掘、分析と同時に、地域住民の経験をどう記録し、歴史として次世代に継承するか、そのための聞き取りの方法、地域外の研究者として地域にいかに関わるのか、から取り組み続けている。この経験に基づく「地域研究」の方法を紹介し、受講生とともに考えてゆきたい。

【Outline (in English)】

【Course outline】

This course will introduce students to understand colonial society consisting of diverse cultural backgrounds under colonial system of international relations. As we focus on Pacific Islands, especially Micronesia, students will seek to understand this region through themes include global process of colonization and decolonization, nationalism and identity, militarization as neocolonialism reflecting the complex nature of contemporary global issues. Students will be also familiar with International Studies and Regional Studies.

【Learning Objectives】

Students will be able to:

- ① Understand “region” as an actor to develop and change international relations.
- ② Analyze the issues of colonial societies in the evolution of international relations with understanding of relevant concepts, theories, and thought.

③ Critically analyze information and documents pertaining to Okinawa, setting them in historical context and in interdisciplinary perspective.

【Methods】

① Students are expected to read assigned readings and related material to be able to engage in active discussion prior to the class. Presenter should upload resume or Power Point of summary and discussion topics of assigned reading via Hoppii until 24-hour before the class. Other students should prepare for comments and questions.

② Students are expected to discuss the topics based on students' research field and subject.

③ Each student should submit presentation feedback or essay via Hoppii when they are required.

④ Schedule is subject to change depending on present situation both at home and abroad related Okinawa or students' interests and understanding.

【Learning activities outside of classroom】

Based on the **【Methods】**, the standard time required for preparatory study and review for this course are 2 hours each.

【Grading Criteria /Policy】

Participation and contribution:30%; Presentation :30 %; Essay and feedback:40%

Students are required to take more than 60% score in total to pass.

POL500G1 - 115 (政治学 / Politics 500)

異文化社会論 I B

今泉 裕美子

サブタイトル：国際関係学 (International Studies)：植民地社会研究から発展したアプローチを学ぶ

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

国際〇〇研究/論/学とは、専門分化した学問が、世界の複雑な事象を分析することを通じて発展してきた。なかでも、国際関係に関する研究の発展過程では、対象を国内から国外へと変化させたことに留まらず、その時々国際関係をこれを構成する行為体をどう捉え、その相互の関係をいかに特徴づけるかを分析し、また国内と国外の事象の相互連関も対象としてきた。

日本の高等教育機関が「国際関係論」を掲げた教学組織を設け、本格的に取り組み始めたのは、第二次世界大戦後の東京大学においてであった。国際政治学との一体的性格を強めるアメリカの **International Relations (IR)** にはほぼ対応しつつも、広領域学として構成されたことや地域研究を附随させた点にオリジナリティがみられた。そしてこのオリジナリティをいかした国際関係研究は、日本の高等教育の各教学組織で、より内実を深め、発展していく。

本授業では、敗戦後日本の高等教育機関が、国際関係研究を取り入れるうでの問題意識や方法、特に社会や文化をも対象とし、歴史的な視点を重視するようになったことに着目する。そこで、広領域学として成立した国際関係学を、その系譜のひとつである植民地社会(正確には植民及び植民政策)研究からの発展を確認したうえで、学としての方法論を考察し、現在の国際 (あるいはグローバル) 〇〇研究/論/学への理解につなげる。

【到達目標】

- ①国際関係研究の進展のなかで、国際関係学の特徴を理解できる。
- ②関連する基本的な概念、理論、思想を理解できる。
- ③国際関係学の方法論、特に「関係性」をめぐる視点や方法、学際的アプローチのなかでの専門分野の追究、を自分の研究テーマや専門分野での取り組みにひきつけて理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

- ①毎回報告者を決め、文献や資料についてレジュメもしくはパワーポイントを作成し、授業開始4時間まえまでに学習支援システムの指定された掲示板にアップロードする。報告者は議論するトピックを選び、非報告者も質問やコメントを準備する。
- ②自分の研究テーマや専門分野に引き付けて考え、議論する。
- ③プレゼンテーションに対するフィードバックやレポートを文書にて提出することを求めることがある。提出は学習支援システムを通じて指示された方法で提出する。
- ④授業テーマに関連する国内外の情勢、受講生の理解度、関心に応じて授業計画を一部変更することがある。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業の目的と内容の説明、受講生の関心を共有する。
2	国際関係学とは何か	テキスト(a)を中心に学ぶ。
3	植民及び植民政策研究、地域研究から「国際関係論」へ：矢内原忠雄	テキスト(c)(d)を中心に学ぶ。
4	出発点としての「国際関係論」：川田侃	テキスト(e)を中心に学ぶ。

5	もう一つの出発点としての「国際関係論」：斉藤孝	テキスト(f)を中心に学ぶ。
6	「広義の国際関係論」：社会・文化への広がり歴史への視点	テキスト(a)(g)を中心に学ぶ。
7	中間のまとめ	ここまでの授業の内容を整理し、後半の授業につなげる。
8	国際関係学の方法論	テキスト(b)を中心に学ぶ。
9	国際関係のなかで専門分野を問い直す ①-政治・経済	テキスト(a)(b)を中心に学ぶ。
10	国際関係のなかで専門分野を問い直す ②-社会・文化	テキスト(a)(b)を中心に学ぶ。
11	「学際的国際関係論」?	テキスト(h)を中心に学ぶ。
12	国際関係学と地域研究	テキスト(b)(i)を中心に、国際関係の行為体としての「地域」、地域研究の視点と方法を学ぶ。
13	現代世界を国際関係学の方法論から分析する	テキスト(b)を中心に議論する。
14	まとめ	本授業の内容を総括する。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト (教科書)】

- (a)百瀬宏『国際関係学』東京大学出版会、1993年。
- (b)百瀬宏『国際関係学原論』岩波書店、2003年。
- (c)木畑洋一「植民政策論・国際関係論」鴨下重彦他編『矢内原忠雄』東京大学出版会、2011年。
- (d)今泉裕美子「矢内原忠雄の国際関係研究と植民政策研究—講義ノトを読む」『国際関係学研究』23、1996年。
- (e)川田侃『国際関係概論』東京大学出版会、1958年。
- (f)斉藤孝『国際関係論入門』(新版)有斐閣、1981年。
- (g)南塚信吾他編『国際関係論基礎研究』福村出版、1976年。
- (h)岩田一政『国際関係研究入門(増補版)』東京大学出版会、2003年。
- (i)大島美穂他編『「国際化」する地域研究』文化書房博文社、2009年。

【参考書】

- 武者小路公秀他編『国際学-理論と展望』東京大学出版会、1976年。
 衛藤藩吉他編『国際関係論』東京大学出版会、1982年。
 フレッド・ハリデイ(菊井禮次訳)『国際関係論再考』ミネルヴァ書房、1997年。
 Bruce Cumings, "Boundary displacement: Area Studies and International Studies during and after the cold war," *Bulletin of Concerned Asian Scholars*, 29:1(1997):E-publication <https://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/14672715.1997.10409695>
 島根國土編『国際文化学への招待』新評論、1999年。
 平野健一郎『国際文化論』東京大学出版会、2000年。
 進藤榮一『現代国際関係学』有斐閣、2001年。
 『地域研究 (特集：地域研究方法論)』vol.12, No.2, 2012年。
 酒井啓子編『グローバル関係学とは何か』岩波書店、2020年。
 鈴木基史他編『国際関係研究の方法』東京大学出版会、2021年。
 【事典など】
 松原正毅他編『世界民族問題事典 (新訂増補版)』平凡社、2002年。
 川田侃他編『国際政治経済事典 (改訂版)』東京書籍、2003年。

【成績評価の方法と基準】

【授業の進め方と方法】に基づき以下の配分で評価する。
 授業への参加度・貢献度30%、報告30%、レポートなどの提出物40%。

【学生の意見等からの気づき】

受講生から、「国際〇〇」はわかりづらい学問、なんとなく「国際」と捉えてきたが、自身の関心ある具体的なテーマに引きつけながら学ぶことで、「国際〇〇」学/研究の方法論を知り、また受講生の専門分野やテーマの明確化にもなったとの意見を受け、本年度もそのような内容になるよう心掛けたい。

【学生が準備すべき機器他】

・ZOOMでのオンラインライブ授業に必要な通信機器を準備する。

・動画や画像を配信する場合があるため、安定的な接続、通信容量に制限がない環境で受講する。

【その他の重要事項】

- ・第1回目授業に参加する受講生（第2回以後も受講するか決めるための参加も可能）は、学習支援システム **Hoppii** に仮登録し、授業情報やお知らせを必ず確認して下さい。
- ・連絡や報告レジュメは学習支援システムの掲示板にて行うため、投稿通知の連絡が入るよう設定すること。
- ・やむを得ない事情で欠席する場合は事前に連絡すること。事前に連絡出来ないタイミングでやむを得ない事情が生じて欠席した場合は、事後に速やかに連絡すること。
- ・社会情勢の変化、これに伴う大学の方針によって授業形態が変化する場合は通知する。

【担当教員の専門分野等】

国際文化研究科教員紹介 (https://www.hosei.ac.jp/gs/kokusaibunka/kyoin/IMAIZUMI_Yumiko/?auth=9abbb458a78210eb174f4bdd385bcf54)、法政大学学術研究データベース (<https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001794/profile.html>) を参照。

【Outline (in English)】

The aim of this course is to review the Japanese features of International Studies in institutionalization in Japanese Universities after WWII and to understand of its academic discipline. After WWII, Tokyo University inaugurated “kokusai kankei ron” as a system of education and research of international relations introducing Anglo-American International Relations (IR) with a kind of acculturation. “Kokusai kankei ron” came to prevail in postwar Japan and have its specific feature in the method. This class explore the development of the International Studies originated from colonial studies in the variety of approaches. It will lead to understanding of transformation of traditional disciplines into “International so and so.”

【Learning Objectives】

Students will be able to:

- ① Comprehend the Japanese features of International Studies in institutionalization in Japanese Universities after WWII and its academic discipline.
- ② Understand key concepts, theory, and thought of International Studies.
- ③ Comprehend International Studies based on students' research field and topics.

【Methods】

- ① Students are expected to read assigned readings and related material to be able to engage in active discussion prior to the class. Presenter should upload resume or Power Point of summary and discussion topics of assigned reading via Hoppii until 4-hour before the class. Other students should prepare for comments and questions.
- ② Students are expected to discuss the topics based on students' research field and subject.
- ③ Each student should submit presentation feedback or essay via Hoppii when they are required.
- ④ Schedule is subject to change depending on present situation both at home and abroad related the objects of the class or students' interests and understanding.

【Learning activities outside of classroom】

Based on the [Methods] , the standard time required for preparatory study and review for this course are 2 hours each.

【Grading Criteria /Policy】

Participation and contribution:30%; Presentation :30 %; Essay and feedback : 40%

Students are required to take more than 60% score in total to pass.

PSY500G1 - 116 (心理学 / Psychology 500)

異文化社会論Ⅱ A

浅川 希洋志

サブタイトル：文化はどのように人の心を形成するのか

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際社会で生きるとき、私たちは様々な文化的背景を持つ人々との相互理解を通して責任のある判断と行動を期待される。ところが、異文化間理解ということを考えるとき、私たちは異文化に見られる行動様式や思想を理解することが国際社会における他者理解のすべてであると考えられる傾向にあるように思われる。では、心の働きは文化と関係のない普遍的なものなのだろうか。

本授業では、文化心理学や心理人類学に関わる文献（特に、河合隼雄著『日本文化のゆくえ』、東洋著『日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて』、恒吉僚子著『人間形成の日米比較：かくれたカリキュラム』、斎藤環著『ひきこもり文化論』等）を読み解きながら、心の働きと文化の関連性について学んでいく。

【到達目標】

心の働きと文化の関連性、特に家庭でのしつけや学校教育が子どもたちに何を期待し、そのような期待と文化の間にどのような関連があり、そのような期待を内在化した教育システムの中で、子どもたちがどのような心の働きを身につけていくのか、を理解する。また、私たちが普段普遍的と考えている人間観、発達観、家族観、そしてそれらと深い関わりを持つ心理的機能（心の働き）がいかに特殊な文化に根ざしたものであるかを理解する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式（文献の輪読）で行う。受講者による報告、討論を中心に進めるため、受講者の関心、授業の展開などによって授業計画の一部変更もあり得る。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業の概要を説明し、報告順を決定する。
2	河合隼雄『日本文化のゆくえ』第1章「[私]さがし」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
3	河合隼雄『日本文化のゆくえ』第7章「異文化体験の軌跡」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
4	東洋『日本人のしつけと教育』第1章「意欲の構造」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
5	東洋『日本人のしつけと教育』第2章「役割社会と受容的勤勉性」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
6	東洋『日本人のしつけと教育』第3章「内在モデルとしての『いい子』」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
7	東洋『日本人のしつけと教育』第4章「『気持ち』への関心」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
8	東洋『日本人のしつけと教育』第5章「しみ込み型のしつけと教育」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
9	東洋『日本人のしつけと教育』第6章「道徳意識と道徳判断」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
10	恒吉僚子『人間形成の日米比較』第1章「リサの疑問」、第2章「かくれたカリキュラム」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
11	恒吉僚子『人間形成の日米比較』第3章「集団の中の個人」、第4章「小さな選民たち」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。

- 12 恒吉僚子『人間形成の日米比較』第5章「キング先生の戦い」、第6章「内なるアメリカ、内なる日本」を読む
- 13 『ひきこもり文化論』第4章「『甘え文化』と『ひきこもり』—比較文化的考察」を読む
- 14 授業の総括 授業のまとめを行なう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告者は担当箇所のレジュメを作り、議論をリードできるよう準備しておく。その他の受講生も授業日の文献を熟読し、討論に参加できるよう準備しておく。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

- ①河合隼雄著『日本文化のゆくえ』（岩波書店、2000年）
- ②東洋著『日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて』（東京大学出版会、1994年）
- ③恒吉僚子著『人間形成の日米比較：かくれたカリキュラム』（中公新書、1992年）
- ④斎藤環著『ひきこもり文化論』（ちくま学芸文庫、2016年）
- *テキストはできる限りPDF化し、授業支援システムにアップする。

【参考書】

必要に応じて指示する。

【成績評価の方法と基準】

「評価基準」：（1）授業で扱う文献の予習に裏付けられた討論（討論への参加）と（2）報告担当日の十分な下調べに基づくレジュメ作成と発表（担当日の発表）により、下記の配分で評価する。

【配分（%）】：討論への参加（50%）+ 担当日の発表（50%）

【学生の意見等からの気づき】

受講生が自身の研究を進展させる上で、本授業で扱う内容がどのような視点をそれに与え得るのかを考えさせながら授業を展開していくことで、本授業が受講生にとって、より身近なものになるのではないかと考えている。

【担当教員の専門分野等】

＜専門領域＞ ポジティブ心理学、文化心理学

＜研究テーマ＞（1）フロー経験と心理的ウェルビーイングの関連性について、（2）文化と心理機能の関連性について、（3）フロー経験と生理指標の関連性について。

＜主要研究業績＞

『フロー理論の展開』世界思想社（2003年）、「フロー経験の諸側面」鳥井哲志編『ポジティブ心理学：21世紀の心理学の可能性』ナカニシヤ出版（2006年）、「Flow experience, culture, and well-being: How do autotelic Japanese college students feel, behave, and think in their daily lives?」Journal of Happiness Studies（2010年）、「フロー理論にもとづく「学びひたる」授業の創造」学文社（2011年）、「楽しさと最適発達の現象学—フロー理論」鹿毛雅治編『モチベーションを学ぶ12の理論』金剛出版（2012年）、「クリエイティビティ」チクセントミハイ著 浅川希洋志監訳 世界思想社（2016年）、「Universal and cultural dimensions of optimal experiences.」Japanese Psychological Research（2016年）、「持続的な幸福（マーティン・セリグマン）—ポジティブ心理学と感情」『臨床心理学』（第20巻第3号）金剛出版（2020年）、「心理学者ミハイ・チクセントミハイが残したものの『心と社会』（第53巻第2号）日本精神衛生会（2022）。

【Outline (in English)】

(1) Course Outline

In this seminar, students will explore issues related to culture and psychological functioning by reading more like anecdotal books and articles, and discuss how culture shapes psychological processes of people. Each student's own experiences they have had in different cultures will be welcomed to deepen class discussions.

(2) Learning Objectives

One of the main objectives of this seminar is to understand how educational practices in a culture are intended to bring up children as culturally desired and also expected adults through the educational process of the culture.

(3) Learning Activities Outside of Classroom

Students will be expected to spend 4 hours to understand the course content (2 hours each for before/after class meeting). Besides, students will be expected to spend their daily lives having course topics in the back of their mind.

(4) Grading Criteria/Policy

Final grade will be decided based on following:

In-class contribution (50%), Class-presentation (50%).

PSY500G1 - 117 (心理学 / Psychology 500)

異文化社会論 II B

浅川 希洋志

サブタイトル：文化はどのように人の心を形成するのか

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

異文化社会論 II A では文化の違いから生じる教育システムの違いやそれによって培われる心のあり方に関する文献を読み、心の働きと文化の関連について考察していくが、本授業ではそのような「文化と心」にまつわる事象を文化心理学の枠組み、つまり文化心理学における理論として捉えなおすことを主たる目的とする。授業では、北山忍著『自己と感情：文化心理学による問いかけ』、リチャード・E・ニスベット著『木を見る西洋人森を見る東洋人：思考の違いはいかにして生まれるか』等をテキストとして用い、掘り下げた議論の必要なトピックスに関しては適宜、英語論文を含めた原著にあたっていく。また、授業全般を通して、異文化社会における適応とはどういうことなのかを考えていく。

【到達目標】

心の働きと文化の関連性を文化心理学の枠組みの中で捉えることができる。特に、Markus & Kitayama が提唱した文化的自己観のモデルに注目し、人々の持つ文化的自己観が彼らの認知、感情、モチベーションなどどのように関連しているのかが理解できること。また、授業で扱ったトピックスを通して、異文化社会における適応とはどういうことなのかを理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

授業はゼミ形式 (文献の輪読) で行う。受講者による報告、討論を中心に進めるため、受講者の関心、授業の展開などによって授業計画の一部変更もあり得る。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	オリエンテーション	授業の概要を説明し、報告順を決定する。
2	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第1章「古代ギリシャ人と中国人は世界をどう捉えたか」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
3	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第2章「思考の違いが生まれた社会的背景」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
4	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第3章「西洋的な自己と東洋的な自己」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
5	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第4章「目に映る世界のかたち」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
6	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第5章「原因推測の研究から得られた証拠」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
7	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第6章「世界は名詞の集まりか、動詞の集まりか」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
8	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第7章「東洋人が論理を重視してこなかった理由」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
9	ニスベット『木を見る西洋人森を見る東洋人』第8章「思考の本質が世界共通でないとしたら」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。

10	北山忍『自己と感情：文化心理学による問いかけ』第2章「自己」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
11	北山忍『自己と感情：文化心理学による問いかけ』第3章「感情」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
12	北山忍『自己と感情：文化心理学による問いかけ』第4章「欧米における自己高揚と日本における自己批判」を読む	学生報告にもとづき、クラス討論を行う。
13	ディスカッション	授業で扱った文化心理学的知見が、受講者の修士論文のテーマを発展させる上で、何らかの新しい視点を与え得るものだったかどうかを討論する。授業のまとめを行なう。
14	授業の総括	

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

報告者は担当箇所のレジュメを作り、議論をリードできるよう準備しておく。その他の受講生も授業日の文献を熟読し、討論に参加できるよう準備しておく。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト (教科書)】

- ①北山忍著『自己と感情：文化心理学による問いかけ』(共立出版、1998年)
②リチャード・E・ニスベット著『木を見る西洋人森を見る東洋人：思考の違いはいかにして生まれるか』(ダイヤモンド社、2004年)
*テキストはできる限りPDF化し、授業支援システムにアップする。

【参考書】

必要に応じて指示する。

【成績評価の方法と基準】

「評価基準」：(1) 授業で扱う文献の予習に裏付けられた討論 (討論への参加) と (2) 報告担当日の十分な下調べに基づくレジュメ作成と発表 (担当日の発表) により、下記の配分で評価する。
「配分 (%)」：討論への参加 (50%) + 担当日の発表 (50%)

【学生の意見等からの気づき】

受講生が自身の研究を発展させる上で、本授業で扱う内容がどのような視点をそれと与え得るのかを考えさせながら授業を展開していくことで、本授業が受講生にとって、より身近なものになるのではないかと考えている。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> ポジティブ心理学、文化心理学
<研究テーマ> (1) フロー経験と心理的ウェルビーイングの関連性について、(2) 文化と心理機能の関連性について、(3) フロー経験と生理指標の関連性について。

<主要研究業績>

『フロー理論の展開』世界思想社 (2003年)、「フロー経験の諸側面」鳥井哲志編『ポジティブ心理学：21世紀の心理学の可能性』ナカニシヤ出版 (2006年)、「Flow experience, culture, and well-being: How do autotelic Japanese college students feel, behave, and think in their daily lives?」*Journal of Happiness Studies* (2010年)、「フロー理論にもとづく「学びひたる」授業の創造」*学文社* (2011年)、「楽しさと最適発達現象学—フロー理論」鹿毛雅治編『モチベーションを学ぶ12の理論』金剛出版 (2012年)、「クリエイティビティ」*チクセントミハイ著 浅川希洋志監訳 世界思想社* (2016年)、「Universal and cultural dimensions of optimal experiences.」*Japanese Psychological Research* (2016年)、「持続的な幸福 (マートン・セリグマン) —ポジティブ心理学と感情」『臨床心理学』(第20巻第3号) 金剛出版 (2020年)、「心理学者ミハイ・チクセントミハイが残したモノ」『心と社会』(第53巻第2号) 日本精神衛生会 (2022)。

【Outline (in English)】

(1) Course Outline

This seminar will read theory-oriented books and articles in cultural psychology and try to understand relevant issues with a theoretical framework of cultural psychology. Main topics of this seminar will be on how cultural settings shape people's emotion, cognition, motivation, and relationships. In addition, what adjustment and psychological well-being mean to people who reside in culturally different societies from their own as well as in multicultural societies will be argued throughout the course.

(2) Learning Objectives

By the end of the course, students are expected to understand (a) how cultural settings shape people's emotion, cognition, motivation, and relationships, and (b) what adjustment and psychological well-being mean to people who reside in culturally different societies from their own as well as in multicultural societies.

(3) Learning Activities Outside of Classroom

Students will be expected to spend 4 hours to understand the course content (2 hours each for before/after class meeting). Besides, students will be expected to spend their daily lives having course topics in the back of their mind.

(4) Grading Criteria/Policy

Final grade will be decided based on following:

In-class contribution (50%), Class-presentation (50%).

CUA500G1 - 203 (文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 500)

マイノリティ社会論A

張 勝蘭

サブタイトル：日本とイギリスにおける中国系移民の教育とアイデンティティ

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、日本とイギリスにおける中国系移民集団の変遷を辿りながら、トランスカルチュラルイズム概念に基づく移民研究について考察し、ホスト社会での共生の可能性と課題を検討する。

【到達目標】

中国系移民を事例に、マイノリティとしてそのコミュニティと文化の変遷、特に定着後のアイデンティティの形成と変容に関する知見を獲得し、多文化共生について深く考えることを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

グローバル化した移民現象は、個人が主体となって国境を越えて移動するという特徴を持つ。移民たちはホスト社会でどのように定着し、社会全体にどのような影響をもたらしているのか。本授業では、四大移民の一つである中国系移民（華僑）について、日本とイギリスにおける移住プロセス、コミュニティの形成、ホスト社会との関係、アイデンティティの変容を取り上げる。特に第二世代以降の教育に焦点を当て、それによる言語やアイデンティティの継承と変容を考察する。具体的には選定したテキストを講読し、議論を行う形で授業を進めていく。課題へのフィードバックはHoppiiの掲示板で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業のアウトラインと進め方について説明する、受講者の自己紹介（研究テーマ、この授業を選んだ理由など）、教材の配布（分担を決める）
第2回	講義1	移民研究、エスニシティ、トランスカルチュラルイズムについて講義する。
第3回	講義2	日本への移住過程について説明してから関連映像を視聴し、討論を行う。
第4回	講読と討論1-1	中華学校における歴史の変遷に関する文献を講読し、多文化教育について議論を行う。
第5回	講読と討論1-2	日本の華僑社会と中華学校教育の変容に関する文献を講読し、議論を行う。
第6回	講読と討論1-3	中華民国系の東京中華学校と横浜中華学院に関する文献を講読し、議論を行う。
第7回	講読と討論1-4	中華人民共和国系の横浜山手中華学校、神戸中華同文学校に関する文献を講読し、議論を行う。
第8回	関連映像鑑賞と討論	神戸、横浜、東京の中華学校の関連映像を視聴し、日本の華僑学校について議論を行う。

第9回	講義3	前半を振り返り、文化境界とアイデンティティについて講義する。
第10回	講読と討論2-1	イギリスへの移住過程、学校教育の展開について文献を読み、討論する。
第11回	講読と討論2-2	コミュニティ、家庭、補習校などの側面から教育の現状を論じる文献を講読し、議論を行う。
第12回	講読と討論2-3	第二世代の立場から彼らのアイデンティティの形成を考察する文献を講読し、議論を行う。
第13回	講読と討論2-4	教育とアイデンティティの形成にフォーカスした文献を読み、討論する。
第14回	まとめと考察	日本とイギリスにおける中国系移民の文化とアイデンティティの変遷を比較し、全体を振り返る。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業ではテキストの講読と討論を行うが、受講者は分担部分を事前に読み込み、レジュメを作成する。具体的な文献リストなどは初回の授業で説明する。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テーマごとにテキストを配布する。

【参考書】

白璐、柳本雄次「日本の中華学校における歴史の変遷からみた多文化教育の展開とその要因：横浜山手中華学校を中心に」『東京福祉大学・大学院紀要』10(1・2) p.121-131、2020年
 陳天璽「長崎から横浜へ・横浜中華街の変貌：広東系老華僑から福建系新華僑へ（特集 華僑華人：グローバルとローカルのダイナミズム）」『多文化社会研究』4 p.193-216、2018年
 陳天璽「虹のメタファー」から多文化共生を再考する：移動する華人やチャイナタウンを事例として（特集 東アジアにおける人の移動と多文化共生）」『21世紀東アジア社会学』(7) p.50-61、2015年
 石川朝子「日本の華僑社会と中華学校教育の変容：華僑教育から華文教育へ」『帝京大学宇都宮キャンパス研究年報 人文編』(21) p.23-50、2015年
 S.カーズルズ/M. J. ミラー（関根正美・関根薫監訳）『国際民の時代〔第4版〕』名古屋大学出版会、2011年（1993年）
 張建国「東京中華学校の現状から日本の教育の明日を考える」（特集 華人とは誰か：教育とアイデンティティ）日本華僑華人学会編『華僑華人研究』((8)p.49-54、2011年
 潘民生「横浜山手中華学校の過去、現在、未来」『華僑華人研究』((8)p.55-61、2011年
 李慈満「百年の華僑学校の見証」『華僑華人研究』((8)p.62-70、2011年
 陳來幸「神戸中華同文学校にみる多文化共生とアイデンティティ」『華僑華人研究』((8)p.71-74、2011年
 杉村美紀「変容する中華学校と国際化時代の人材育成」『華僑華人研究』((8)p.75-77、2011年
 山本須美子『文化境界とアイデンティティ—ロンドンの中国系第二世代』九州大学出版会、2002年
 裘曉蘭『多文化社会と華僑・華人教育 - 多文化教育に向けての再構築と課題』青山ライフ出版、2012年
 朱慧玲『華僑社会の変貌とその将来』日本僑報社、1999年
 江淵一公編『トランスカルチュラルイズムの研究』明石書店、1998年
 また授業時に適宜紹介する。

【成績評価の方法と基準】

発表と討論への参加度：70%、期末レポート：30%。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

発言しやすい雰囲気づくりに努めたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 地域研究（中国南部の少数民族地域）、文化人類学、歴史学

<研究テーマ>中国少数民族の歴史・社会・文化、アイデンティティの変遷、少数民族社会と漢族（華人）社会との関係、苗（ミャオ・Hmong）族研究

<主要研究業績>

「改装」政令にみる苗族服飾の変遷と苗族アイデンティティ—清朝期及び民国期の貴州省を中心に—『21世紀アジア学研究』第20号（国士舘大学21世紀アジア学会）2021年

「土司統治の変遷から見る高坡苗族の伝統文化—中曹長官司長官謝氏を中心に」工藤元男教授退休記念論集編集委員会編『中国古代の法・政・俗』汲古書院、2019年

「貴州高坡苗族「敲牛祭祖」について—高坡郷一帯を中心に」『WASEDA RILAS JOURNAL』NO.6、（早稲田大学総合人文科学研究センター）2018年、など。

【Outline (in English)】

【Course Outline】

This course deals with education and ethnic identity of Chinese migrant in Japan and the United Kingdom.

【Learning Objectives】

At the end of the course, students are expected to (1) obtain basic knowledge about the relationship between education and ethnic identity of Chinese migrant in Japan and the United Kingdom, (2) enhance the basic concept of transculturalism.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, participants will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text and prepared a resume. Your required study time is two hours for each class meeting. Your study time will be two hours.

【Grading Criteria/Policy】

Final grade will be calculated according to the following process: in-class contribution (70 %) and term-end report (30 %).

CUA500G1 - 204 (文化人類学・民俗学 / Cultural anthropology 500)

マイノリティ社会論B

張 勝蘭

サブタイトル：北アメリカの先住民・難民と中国の少数民族

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

北アメリカと中国の事例を通して、国民国家の構築と先住民、少数民族、難民の問題について検討し、エスニック・マイノリティの文化とそのアイデンティティの変遷に関する理解を深めていく。

【到達目標】

現代世界における先住民・少数民族及び難民問題に関する知見を広げ、異文化理解・多文化共生について多角的な視点から考察する姿勢を養うことを目標とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

17世紀以降のヨーロッパにおいて国民国家が誕生し、世界中に広がっていくなか、絶対数や政治力・軍事力の上で支配的な民族が、自民族を中心とした国家を作り上げたケースが多くあった。マイノリティの位置にある少数民族、先住民族そして難民たちにとって、国家の中でマジョリティとどのような距離をとるべきか、差別や偏見にさらされながら、如何に自らの伝統文化とアイデンティティを維持するか、が深刻な問題である。本授業は、北米（アメリカ、カナダ）の先住民、難民及び中国の少数民族を事例に、マイノリティの伝統文化とアイデンティティの維持・変遷及びその課題について考察する。課題へのフィードバックはHoppiiの掲示板で行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業のアウトラインと進め方について説明する、受講者の自己紹介（研究テーマ、この授業を選んだ理由など）、教材の配布（分担を決める）
第2回	講義1	民族・エスニック集団・エスニシティについて講義する。
第3回	講義2	北アメリカの先住民・難民（Hmong）と中国の少数民族の現状と課題について概観する。
第4回	政治・経済に関する講読と討論①	アメリカのモン難民を取り上げ、モン族出身の女性議員の誕生など関連文献を講読し、議論を行う。
第5回	政治・経済に関する講読と討論②	中国のオロチョン族の定住と社会変容に関する文献を講読し、議論を行う。
第6回	文化に関する講読と討論①	アメリカのプエブロ族の文化継承戦略に関する文献を講読し、議論を行う。
第7回	文化に関する講読と討論②	台湾のプユマ族の伝統文化とエスニック・アイデンティティに関する文献を講読し、議論を行う。
第8回	言語教育に関する講読と討論①	カナダの先住民デネーの教育に関する文献を講読し、議論を行う。

第9回	言語教育に関する講読と討論②	中国の少数民族（チベット族・モンゴル族・イ族）の三言語教育の現状に関する文献を講読し、議論を行う。
第10回	観光化と先住民に関する講読と討論①	観光開発と先住民について、世界の事例をいくつか読み、討論する。
第11回	観光化と先住民に関する講読と討論②	中国の西南地域におけるエスニック・ツーリズムに関する文献を講読し、議論を行う。
第12回	精神世界に関する講読と討論①	アメリカの先住民ナバホの伝統的な生活様式などを通して、その精神世界を読み解き、議論を行う。
第13回	精神世界に関する講読と討論②	中国の少数民族ミャオ族の祖先祭祀一鼓社節に関する文献を講読し、討論する。
第14回	まとめと議論	北アメリカの先住民・難民と中国の少数民族における伝統文化とアイデンティティを比較し、全体を振り返り、議論を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業ではテキストの講読と討論を行うが、受講者は分担部分を事前に読み込み、レジュメを作成する。具体的な文献リストなどは初回の授業で説明する。本授業の準備・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

テーマごとにテキストを配布する

【参考書】

新保敦子・阿古智子『勃興する「民」』（『超大国・中国のゆくえ』（5）（天児憲編『超大国・中国のゆくえ』（全5巻）東京大学出版会、2016年）吉川太恵子『ディアスポラの民—時空を超える絆』めこん、2013年）鈴木正崇『ミャオ族の歴史と文化の動態—中国南部山地民の想像力の変容』風響社、2012年）
綾部恒雄編『世界の先住民：ファースト・ピープルズの現在 10失われる文化・失われるアイデンティティ』明石書店、2007年
富田虎男、スチュアートヘンリー編『世界の先住民：ファースト・ピープルズの現在 07北米』明石書店、2005年
末成道男、曾士才編『世界の先住民：ファースト・ピープルズの現在 01東アジア』明石書店、2005年
綾部恒雄『現代世界とエスニシティ』弘文堂、1993年
綾部恒雄編『アメリカの民族：ルツボからサラダボウルへ』弘文堂、1992年

【成績評価の方法と基準】

発表と討論への参加度：70%、期末レポート：30%。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

発言しやすい雰囲気づくりに努めたい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>地域研究（中国南部の少数民族地域）、文化人類学、歴史学
<研究テーマ>中国少数民族の歴史・社会・文化、アイデンティティの変遷、少数民族社会と漢族（華人）社会との関係、苗（ミャオ・Hmong）族研究
<主要研究業績>
「[改装] 政令にみる苗族服飾の変遷と苗族アイデンティティ—清朝期及び民国期の貴州省を中心に—」『21世紀アジア学』第20号（国士舘大学21世紀アジア学会）2021年
「土司統治の変遷から見る高坡苗族の伝統文化—中曹長官司長官謝氏を中心に—」工藤元男教授退休記念論集編集委員会編『中国古代の法・政・俗』汲古書院、2019年
「貴州高坡苗族「敲牛祭祖」について—高坡郷一帯を中心に—」『WASEDA RILAS JOURNAL』NO.6、(早稲田大学総合人文科学研究センター) 2018年、など。

【Outline (in English)】
(Course Outline)

This course deals with the basic concepts of nation-state and ethnic minority. It also deals with the relationship between culture and identity of ethnic groups, indigenous people, refugees in the United States, Canada, Mainland China and Taiwan.

(Learning Objectives)

At the end of the course, students are expected to (1)obtain basic knowledge about ethnic groups, indigenous people, refugees of North America and China, (2) enhance the concept of cross-cultural understanding and multicultural coexistence.

(Learning activities outside of classroom)

Before each class meeting, participants will be expected to have read the relevant chapter(s) from the text and prepared a resume . Your required study time is two hours for each class meeting. Your study time will be two hours.

(Grading Criteria/Policy)

Final grade will be calculated according to the following process: in-class contribution (70 %) and term-end report (30 %).

GDR500G1-205 (ジェンダー/Gender 500)

ジェンダー論

佐々木 一恵

サブタイトル：ジェンダー史の展開

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ジェンダーの視点から歴史を捉えていきます。これまでのジェンダー史の取り組みや成果をたどるとともに、方法論としてのジェンダー史学について考察していきます。そこから、国際文化学におけるジェンダー史の研究論文を書いていけるようになることを目指します。今年度はジョージ・L・モッセの名著『ナショナリズムとセクシュアリティ―市民道徳とナチズム』を読んでいきます。そこから近代国民国家とセクシュアリティ・マスキュリティ・ナショナリズムの関係性について議論していきます。

【到達目標】

1. ジェンダー史の視点や方法論について基礎的な理解ができるようになること。
2. ジェンダー史の視点や方法論を、自分自身の研究に応用できるようになること。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

授業の前半では、文献の概要を発表者がレジュメに沿って説明します。適宜、教員が保特説明を行います。授業の後半では、各自がGoogle Classroomにアップロードしたコメントをベースにディスカッションを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の概要に関する説明 *できれば、メアリー・ルイーザ・ロバーツ「モッセ著作集版(2020年)解説」(375-389頁)に目を通してきてください。
第2回	・ナショナリズムと市民的価値観（リスベクタビリティ）	【テキスト】 モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ』第一章 ・ジェンダーと国民国家 ・ドイツとイギリス
第3回	・男らしさと同性愛①	【テキスト】 モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ』第二章 ・宗教的規範から医学的診断へ
第4回	・男らしさと同性愛②	【テキスト】 モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ』第二章 ・新しい性科学 ・同性愛者・ユダヤ人・デカダン派
第5回	・身体の再発見	【テキスト】 モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ』第三章 ・裸体主義・生活改良・青年運動 ・預言者としての詩人―ゲオルグ・サークル ・イギリス個人主義とドイツ共同体主義

第6回	・友情とナショナリズム	【テキスト】 モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ』第四章 ・市民的価値観としての友情 ・友情崇拝から国民崇拝へ ・イギリス紳士の場合
第7回	・女性とナショナリズム①	【テキスト】 モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ』第五章 ・国民的女性シンボル―マリアンヌ・ゲルマーニア・ブリタニア ・少女戦士と両性具有
第8回	・女性とナショナリズム②	【テキスト】 モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ』第五章 ・レズビアンと男性同性愛者 ・デカダン派とレズビアン ・母性主義フェミニズム
第9回	・戦争とセクシュアリティ	【テキスト】 モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ』第六章 ・戦争と青年と美しさ
第10回	・人種とセクシュアリティ	【テキスト】 モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ』第七章 ・人種主義と都市文化 ・反セム主義と同性愛 ・死のイメージ ・アウトサイダーの運命
第11回	・ファシズムとセクシュアリティ①	【テキスト】 モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ』第八章 ・突撃隊と男性同盟 ・親衛隊と男性国家
第12回	・ファシズムとセクシュアリティ②	【テキスト】 モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ』第八章 ・第三帝国とイタリア・フランスのファシズム ・女性の身体性
第13回	・万人の道徳―ナショナリズムとセクシュアリティ	【テキスト】 モッセ『ナショナリズムとセクシュアリティ』結論
第14回	総括	今学期のまとめの議論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・文献を読み、自分が関心を持った概念や内容について、意見をまとめてGoogle Classroomに授業が始まる1時間前までにアップロードしてください。
- ・文献の発表者はレジュメを作成してください。
- ・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

○ジョージ・L・モッセ（佐藤卓己・佐藤八寿子訳）『ナショナリズムとセクシュアリティ―市民道徳とナチズム』（筑摩書房、2023年）ちくま文芸文庫。（*各自、購入するようにしてください。定価1,600円+税）

何がリスベクタブルな振舞か。ナチズムへと至る国民主義の高揚の中で、性的領域も正常/異常に分けられていく。セクシュアリティ研究の先駆的著作。

===

18世紀の宗教復興とフランス革命を経て、西洋では「礼にかなった」作法を重んじる市民的価値観が浸透していった。リスベクタブルか否か？ その問いかけはセクシュアリティをも正常/異常に区分し、国民主義と結びついて社会の管理・統制を強化した。逸脱行為と見なされた同性愛や売春は社会秩序を乱すものとされ、自制する「男らしさ」と、性欲を排した男同士の友情が市民道徳の基盤となっていく――。宗教、医学、芸術、性別分業、人種主義などの諸要素が絡まり合って作用し、市民的価値観と国民主義が手を取り合ってナチズムへ至る道が鮮やかに描き出される。文庫化にあたって、心理学者メアリー・ルイーザ・ロバーツによる新たな解説を付した。

===

「正常な性意識」が、ナチズムを支えた——
セクシュアリティ研究と歴史学を結んだ先駆的名著

===

【目次】

第1章 序論 国民主義と市民的価値観
第2章 男らしさと同性愛
第3章 身体の再発見
第4章 友情と国民主義（ナショナリズム）
第5章 どんな女性？
第6章 戦争と青年と美しさ
第7章 血と性——アウトサイダーの役割
第8章 ファシズムとセクシュアリティ
第9章 結論——万人の道徳
モッセ著作集版解説（メアリー・ルイーズ・ロバーツ）
一九九六年の訳者あとがき（佐藤八寿子）
訳者解題（佐藤八寿子）
原註
人名索引

【参考書】

授業の中で紹介していきます。

【成績評価の方法と基準】

- ・授業への貢献度・参加度（30%）
- ・授業内での文献発表（70%）

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

アメリカ合衆国史 思想史 ジェンダー

<研究テーマ>

・アメリカ革新主義思想の宗教・ジェンダー・セクシュアリティからの再考

・20世紀転換期アメリカにおける個人主義・リベラリズム・資本主義に抗する信仰運動としての米国聖公会のアンソロ・カトリシズム
<主要研究業績>

○「『神に奉献した生』とプロテスタントの女性主体—19世紀後半のアメリカにおける聖マリア修女会の実践から—」『異文化』24号、2023年。

○「善き生の回復を求めて—ラルフ・アダムズ・クラムの教会建築論に見る革新主義期アメリカに抗するアンソロ・カトリシズムの想像力(イマジネリー)」『年報アメリカ研究』第56号、2022年。

○「プロテスタンティズムの倫理と革新主義期アメリカの精神—アンソロ・カトリシズムの視点から見る生政治—」『異文化』23号、2022年。

○「聖十字架修女会の会員とセツルメント運動——生と活動の様式としてのアンソロ・カトリシズム」『ジェンダー史学』16号、2020年。

○「『第三者』性のポリテクス—19世紀末ニューヨークの聖公会員の社会改革運動と公共領域の再編—」『アメリカ史研究』42号、2019年。

○「ジェンダーからみるグローバル・ヒストリー—女子教育とジャンヌ=ダルクの『普遍化』から」、上智大学アメリカ・カナダ研究所、イペロアメリカ研究所、ヨーロッパ研究所共編『グローバル・ヒストリー—ナショナルを超えて』上智大学出版社、2018年。

○Redemption and Revolution: American and Chinese New Women in the Early Twentieth Century (Ithaca, NY: Cornell University Press, 2016).

○“Excludable Aliens vs. One National People: The U.S. Chinese Exclusion Policy and the Racialization of Chinese in the United States and China,” The Japanese Journal of American Studies (no.23, 2012).

【Outline (in English)】

The course introduces an overview of the standpoints and methodologies of gender history so that students can develop the ability to examine issues of gender cross-culturally and inter-rationally.

By the end of the course, students are expected to be able to: 1) acquire a basic understanding of the perspectives and methodologies of gender history and 2) use the perspectives and methodologies of gender history to their own research.

Students will be expected to read assigned materials and upload one-page summary of the assigned text and the points of to Google Classroom before class begins. Presenters of assigned materials should prepare presentations in PowerPoint format. The final grade will be decided by contribution to class discussion (30%) and presentation (70%).

ARSa500G1 - 206 (地域研究 (ヨーロッパ) / Area studies(Europe) 500)

多言語社会論 A

大中 一彌

サブタイトル：青の政治学 I ～現代ヨーロッパの基礎研究～

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

・この科目「多言語社会論 A」では、色彩と文化のつながりについて考えます。

・とりあげる事例は、主にヨーロッパ史のさまざまな局面で《青》という色彩がもつ意義です。

・本研究科の特色である、学際的なアプローチにもとづき、この事例に近づいていきます。

・なお、この科目「多言語社会論 A」には、作品を鑑賞する時間帯も含まれています。

・2023年度には、授業時間内に、都内の美術館を見学しました。

・ヨーロッパ地域の文化に詳しくない人も、研究のうえでの刺激やヒントを得られるよう心がけています。

・この授業を紹介する動画(約6秒)をご覧ください <https://youtube.com/shorts/8jK2B1pRnI0>

【到達目標】

コースの終わりまでに、参加者の皆さんは次のことができるようになるでしょう：

1) 色彩の認識を、ただ自然の特徴を映し出す視覚の問題としてだけ考えるのではなく、「青」のように、色を分類して表現する言葉をもった文化や社会に由来する現象として考えることができる。

2) 文章や画像、映像など、人間が創り出す表現を検討する際に、単に表現を感覚的に捉えるだけでなく、そうした表現に影響をおよぼす物質的な条件について想像をめぐらせることができる。

3) ヨーロッパ地域における「青」のような、ひとつの文化要素についても、検討する時代や、社会階級が異なれば、ひとつの要素がもつ意味合いに、さまざまな違いやニュアンス、価値の逆転などが生じるという前提に立って、研究を発想することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

(ア) この科目は基本的に「対面」です。

(イ) 体調不良などの理由により、リアルタイム・オンラインやオンデマンド(録画)の形で授業に参加する場合、柔軟に対応します。

(ウ) 学生の皆さんの都合や関心によりますが、美術展などを学外で見学する可能性があります。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】あり / Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	はじめまして！	シラバスの説明や自己紹介、美術館見学に興味があるかどうか、など
2	色を言葉でどう表現するか	鳥々が連なる青いエーゲ海は絶景というほかない。しかし、西洋文明の源流に位置づけられ、古代ギリシアを代表するとされる、詩人ホメロスがエーゲ海を描くとき、「青」という言葉は使われならしい。目の前に青い海が思いっきり広がっていたはずなのに…なぜ？

3	色彩語によるスペクトルの分割	人間は経験を言葉で表現する。色彩の分類は言語や文化ごとに異なるのか、それとも言語や文化の垣根を超えて、色彩にかんする人類共通の分類がありうるのか？
4	光の波長と、ヒトが知覚する色は(ある程度)対応する。	ニュートンはプリズムを使った分光実験により、スペクトルを赤、橙(だいたい)、黄、緑、青、藍(あい)、堇(すみれ)の7色に分けた。だがなぜ7色？
5	陰翳(いんえい)のなかでほのかに浮かび上がる色彩	ゲーテが色彩論の冒頭で扱うのは、薄明りのなかで残像として立ち現れる、想像的・空想的な色彩だ。暗い北方のドイツから見た、アルプスの彼方の鮮やかな色彩？
6	ブルーは寒色ではないのか	映画化もされたジュリー・マロのバンド・デシネ『ブルーは熱い色』。ゲーテの色彩論では青は寒色に分類されるが、『青の歴史』を書いた歴史家パストゥローは逆のゲーテ解釈を示す。思春期の女性の同性に対する愛を繊細に描くマロの作品内容と関係は？
7	古代から中世にかけての青	古代エジプト人は人類初の合成顔料となるエジプト青を開発。ケルト人やゲルマン人は身体を青く染めたとされる。ローマ人は？
8	青く染めることの政治経済学	諸説あるが、ケルト人やゲルマン人が身体を青く染めるのに使ったのは、ホソバタイセイといわれる。タイセイ産業は中世～近世、フランス南西部に繁栄をもたらし、インド藍(インディゴ)の普及により壊滅。イギリス植民地においてインディゴ産業が発展する。
9	色は光なのか？ — 青と信仰 —	シャルトルの青に代表され、中世に花開いたステンドグラス芸術。だが人間の技巧が作り出す多彩な色は、ほんとうの神の光なのか？ 「黒いマリア」信仰や、2019年の火災以降のノートルダム寺院をめぐる現状にも触れる。
10	王権と青	12世紀末以降、カペー王家は「青地に金色のユリの花の散らし模様」の紋章を使うようになった。王冠や王笏、戴冠式の衣装、ルイ14世が購入したブルー・ダイヤモンドについても触れる。
11	中間ふりかえり	作品鑑賞
12	色彩と社会的排除①	中世ヨーロッパにおける芸人、娼婦、ユダヤ人の服装と多色嫌悪 [クロモフォビア]
13	色彩と社会的排除②	中世ヨーロッパのキリスト教社会において罪は暗い色をしていたのか
14	まとめ	第13回までの内容がこなせなかった場合には予備日

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

日本語やその他の言語の習熟度が異なる多様な学生が、このセミナーに参加します。そのため、一律の時間の長さは定めません。しかし、大学設置基準によれば、2単位の講義及び演習の準備・復習時間は1回につき4時間以上とされています。

【テキスト(教科書)】

教科書を購入する必要はありません。

【参考書】

下記【その他の重要事項】にあるリンク先をご覧ください。

【成績評価の方法と基準】

1. 授業への毎週の参加（平常点）50%
2. 授業中における発言や、掲示板等への書き込み 50%
3. 【希望者のみ】この授業に関連する作品の鑑賞や話題提供など（※）
（※）項目3.は、100%の枠外で5～20%程度の加点をします。

【学生の意見等からの気づき】

- ・ヨーロッパ地域のさまざまな文化をめぐる学びは、必要そうではあるけれど、わかりづらそうで敬遠したくなるという方もいるようです。
- ・この多言語社会論Aは、「青」という、多くの人を知る色を軸とした組み立てとすることにより参加のハードルを下げ、そうした方が、必要な学びにアクセスできる場となることを目指しています。
- ・致所有中国留学生：☑我☑用日☑了解欧洲文化（谷歌翻☑）

【学生が準備すべき機器他】

スマートフォンやタブレット、ノートパソコンのような情報端末が必要です。なお、市販されている映像作品の公衆送信は行いません。

【その他の重要事項】

- ・わからないことは、気兼ねなく、お問合せください。
- ・留学や進学、就職などの相談もOKです。
- ・問い合わせ先や、取り上げる作品、参考文献についての詳しいことは、次のリンク先をご覧ください。 <https://bit.ly/48nMmNt>

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 政治学、政治思想
<研究テーマ> 言語や文化のはざまにいる人たちや、そうした人たちがどのように主体になっていくのかについて関心があります。
<主要研究業績> 法政大学学術研究データベースをご覧ください。 <https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/20/0001982/profile.html>

【Outline (in English)】

[Course Outline]

This seminar is an introduction to the multiple facets of French culture, history, and society. Open to students with little or no previous instruction in French, this seminar will enable students to attain a basic understanding of Mainland France and its terroirs.

[Learning Objectives]

- 1) By taking this course, students, including those who have not necessarily studied modern Europe in a specialized way, will acquire the knowledge necessary to conduct independent research at the graduate level.
- 2) Textbook readings will provide students with a basic knowledge of French history and culture.
- 3) Students will watch video clips in class to help them relate historical knowledge from the textbook readings to contemporary political, social, and cultural topics in Europe.

[Learning activities outside of classroom]

- (a) Read the textbook assigned each session.
- (b) Post a link and a text for your topic in the classroom on the designated LMS (Learning Support System - Hoppii or Google Classroom) before each session.
- (c) The study time required for preparation and review for this course will be the time required to do (a) and (b) above. Since this course is taken by students with different levels of proficiency in Japanese and other languages, a uniform length of time will not be indicated. However, according to the Standards for the Establishment of Universities, the preparation and review time for a two-credit lecture or seminar should be at least four hours per session.

[Grading Criteria/Policy]

1. Class participation 50%
 2. Remarks and questions in class 50%
 3. [For those who wish to do so] Presentation of a topic involving preparation outside of class (*)
 4. Contribution to class management (*)
- (*) Items 3. and 4. will be added as an extra 10% outside of the total of items 1. and 2. for each topic or contribution.

ARSA500G1 - 207 (地域研究 (ヨーロッパ) / Area studies(Europe) 500)

多言語社会論B

大中 一彌

サブタイトル：青の政治学Ⅱ ～現代ヨーロッパの基礎研究～

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

・この科目「多言語社会論B」では、色彩と文化のつながりについて考えます。

・とりあげる事例は、主にヨーロッパ史のさまざまな局面で《青》という色彩がもつ意義です。

・本研究科の特色である、学際的なアプローチにもとづき、この事例に近づいていきます。

・なお、この科目「多言語社会論B」には、作品を鑑賞する時間帯も含まれています。

・2023年度には、「多言語社会論A」の授業時間内に、都内の美術館を見学しました。

・ヨーロッパ地域の文化に詳しくない人も、研究のうえでの刺激やヒントを得られるよう心がけています。

・この授業を紹介する動画(約6秒)をご覧ください <https://youtube.com/shorts/8jK2B1pRnI0>

【到達目標】

コースの終わりまでに、参加者の皆さんは次のことができるようになるでしょう：

- 1) 色彩の認識を、ただ自然の特徴を映し出す視覚の問題としてだけ考えるのではなく、「青」のように、色を分類して表現する言葉をもった文化や社会に由来する現象として考えることができる。
- 2) 文章や画像、映像など、人間が創り出す表現を検討する際に、単に表現を感覚的に捉えるだけでなく、そうした表現に影響をおよぼす物質的な条件について想像をめぐらせることができる。
- 3) ヨーロッパ地域における「青」のような、ひとつの文化要素についても、検討する時代や、社会階級が異なれば、ひとつの要素がもつ意味合いに、さまざまな違いやニュアンス、価値の逆転などが生じるという前提に立って、研究を発想することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

(ア) この科目は基本的に「対面」です。ただし、参加者の皆さんの個別の事情や状況により、Zoomを使った参加を積極的に認めています。

(イ) 毎回、教員から授業内容の説明があり、これに対し、学生から質問や意見を出す時間帯があります。

(ウ) 【希望者のみ】ひとりひとりの参加者が今関心をもっていることについて、話題提供した場合、加点をいたします。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	はじめまして！	シラバスの説明や自己紹介、美術館見学に興味があるかどうか、など
第2回	サマルカンドの青	ドームを建築する文化を中央アジアとヨーロッパは共有しています。ウズベキスタン、なかでもサマルカンドは、寺院や廟にあざやかな青をもちいた装飾が多いことで世界的に有名です。

第3回	ヴェネツィア：商人貴族たちがまとう黒服とアラブ・イスラム世界	14世紀まで、最高級の布は黒ではなく、赤、青、紫の染料で染められていた。しかし、高品質の黒染料が登場し、色彩に富む衣服は貴族のみに限る法律(奢侈禁止法)が施行されたことで、イタリアの裕福な銀行家たちは、重要性の証として黒い服を着るようになった。
第4回	「満ちたりし時」と豪華さの嫌悪	16世紀初頭、ローマにおける盛期ルネサンスと、北方ヨーロッパにおける宗教改革が相次いで発生します。色彩への見方に、これらの出来事はどうかかわるのでしょうか。
第5回	17世紀：カメラ・オブスカラとラピス・ラズリ	小説や映画でとりあげられて有名な画家フェルメール。しかし残された作品は謎めいており、さまざまな解釈をすることができます。
第6回	18世紀：プルシアン・ブルーと江戸時代の日本	葛飾北斎《富嶽三十六景》中の《神奈川沖浪裏》をとりあげます。太平洋の波に翻弄される船と、遠景にどっしりと安定した富士山。青が印象的な絵ですが、この青は「日本の浮世絵に独特の神秘的な青」なのでしょうか？
第7回	中間ふりかえり①	作品鑑賞
第8回	ドイツ・ロマン派の夢と青	カスパー・ダーヴィト・フリードリヒの風景画と後ろ姿の人物たち
第9回	共和派の青とヴァンデの旗	「ゴッヴァン、よく心得ておきたまえ。相手がたとえ女でも、マリ・アントワネットという名前のときは、女ともたたかわねばならぬのだ。相手がたとえ老人でも、法王ピウス六世という名前のときは、老人に対して、またたとえ子供でも、ルウィ・カベ [=フランス国王] という名前のときには、子供に対して戦いをいとまねばならぬのだ」
第10回	マネの青	ヴィクトル・ユゴー『九十三年』 画家エドゥアール・マネの作品は、発表当時は世論の批判を浴びたが、今日では西洋美術史の一時代を作った画家として知られています。マネに特徴的な青には、ジャポネズリとして知られる日本趣味が活かされています。
第11回	グローバル化する青①	ファスティアン／フューテースとデニム。綿(コットン)の大量生産と大量消費への批判
第12回	中間ふりかえり②	作品鑑賞
第13回	グローバル化する青②	両大戦間期：欧米における黒からマリン・ブルーへの移行(制服、背広、スポーツウェアなど)
第14回	まとめ：青は「まとも」色？	EUの旗。シラバス第13回までの内容がこなせなかった場合には予備日

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

日本語やその他の言語の習熟度が異なる多様な学生が、このセミナーに参加します。そのため、一律の時間の長さは定めません。しかし、大学設置基準によれば、2単位の講義及び演習の準備・復習時間は1回につき4時間以上とされています。

【テキスト (教科書)】

教科書を購入する必要はありません。

【参考書】

下記【その他の重要事項】にあるリンク先をご覧ください。

【成績評価の方法と基準】

1. 授業への毎週の参加（平常点）50%
2. 授業中における発言や、掲示板等への書き込み 50%
3. 【希望者のみ】この授業に関連する作品の鑑賞や話題提供など（※）
（※）項目3.は、100%の枠外で5～20%程度の加点をします。

【学生の意見等からの気づき】

- ・ヨーロッパ地域のさまざまな文化をめぐる学びは、必要そうではあるけれど、わかりづらそうで敬遠したくなるという方もいるようです。
- ・この多言語社会論Bは、「青」という、多くの人を知る色を軸とした組み立てとすることにより参加のハードルを下げ、そうした方が、必要な学びにアクセスできる場となることを目指しています。
- ・致所有中国留学生：☑我☑用日☑了解欧洲文化（谷歌翻☑）

【学生が準備すべき機器他】

スマートフォンやタブレット、ノートパソコンのような情報端末が必要です。なお、市販されている映像作品の公衆送信は行いません。

【その他の重要事項】

- ・わからないことは、気兼ねなく、お問合せください。
- ・留学や進学、就職などの相談もOKです。
- ・問い合わせ先や、取り上げる予定の映像作品、参考書については、次のリンク先をご覧ください。<https://bit.ly/3UKUAvL>

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> 政治学、政治思想
<研究テーマ> 言語や文化のはざまにいる人たちや、そうした人たちがどのように主体になっていくのかについて関心があります。
<主要研究業績> 法政大学学術研究データベースをご覧ください。<https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/20/0001982/profile.html>

【Outline (in English)】

[Course Outline]

This seminar is an introduction to the multiple facets of French culture, history, and society. Open to students with little or no previous instruction in French, this seminar will enable students to attain a basic understanding of Mainland France and its terroirs.

[Learning Objectives]

- 1) By taking this course, students, including those who have not necessarily studied modern Europe in a specialized way, will acquire the knowledge necessary to conduct independent research at the graduate level.
- 2) Textbook readings will provide students with a basic knowledge of French history and culture.
- 3) Students will watch video clips in class to help them relate historical knowledge from the textbook readings to contemporary political, social, and cultural topics in Europe.

[Learning activities outside of classroom]

- (a) Read the textbook assigned each session.
- (b) Post a link and a text for your topic in the classroom on the designated LMS (Learning Support System - Hoppii or Google Classroom) before each session.
- (c) The study time required for preparation and review for this course will be the time required to do (a) and (b) above. Since this course is taken by students with different levels of proficiency in Japanese and other languages, a uniform length of time will not be indicated. However, according to the Standards for the Establishment of Universities, the preparation and review time for a two-credit lecture or seminar should be at least four hours per session.

[Grading Criteria/Policy]

1. Class participation 50%
 2. Remarks and questions in class 50%
 3. [For those who wish to do so] Presentation of a topic involving preparation outside of class (*)
 4. Contribution to class management (*)
- (*) Items 3. and 4. will be added as an extra 10% outside of the total of items 1. and 2. for each topic or contribution.

SOS500G1 - 208 (その他の社会科学 / Social science 500)

多民族共生論 I A

松本 悟

サブタイトル：東南アジア・日本の開発と民族

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

この授業は「開発と民族」をテーマとし、民族概念、東南アジアの開発と民族、日本の民族問題という3つのモジュールで議論を行う。それを通して、民族という視点から開発や国家を捉えられるようにする。

【到達目標】

(1) 民族、人種、少数民族、部族、先住民族をめぐる議論を理解し説明できる。
(2) 言語、健康、教育、インフラ整備など、開発課題と民族の関係を批判的に理解し、東南アジアや日本の事例を使って論理的に自らの見解を述べることができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

■基本方針：入国できない留学生や基礎疾患を持つ学生に配慮しつつ、対面で行う。

■進め方：

(1) 履修者全員が事前課題文献(20頁程度を想定)を熟読し、①「この文献から重要だと考えた点」を3つ程度とそう考えた理由、②そこから導いた論点(履修者同士で議論したい点)を発表する。
(2) (1)を共有した上で、履修者の間でその日議論したい点を絞り(全ての論点でもよい)議論する。
(3) 必要に応じて教員が補足授業を行う。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の狙いを説明し、履修者の関心を聞き取る。それにしがって授業内容を変更・確定する。また、文献の読み方や論点の意味について解説する。
2	概念①民族理論の展開と課題	1980年代の社会学の文献を通して民族という概念について考える。
3	概念②少数民族を考える座標	東南アジアの少数民族に関する文献をもとに、少数民族を考える視点について考える。
4	概念③民族・国家・言語	19世紀以降のヨーロッパでの議論を通じて、民族と言語を繋げることの背景と問題について考える。
5	概念④先住民族の登場	開発学で先住民族が着目されるようになった歴史的背景を理解し、この概念との付き合い方を考える。
6	総合討論 I	第2回～第5回の学びをもとに、「開発と民族」を考える上で留意すべきことを議論する。
7	東南アジアの開発と民族①タイ	タイの山地民をめぐる論争を通して開発と民族について考える。
8	東南アジアの開発と民族②ラオス	北ラオスの焼き畑民の調査を通して開発と民族について考える。
9	東南アジアの開発と民族③メコンデルタ	民族が混在するメコンデルタのベトナム戦争の記憶を通して開発と民族について考える。
10	東南アジアの開発と民族④	ミャンマーを追われるロヒンギャの歴史を通して開発と民族について考える。
11	日本の民族問題①単一民族国家論	なぜ、いつから日本が単一民族国家と言われるようになったのかを通して、国と民族の関係を考える。
12	日本の民族問題②アイヌ民族の健康問題	健康の社会的決定要因からアイヌ民族差別について考える。
13	日本の民族問題③自ら語ること	とかく調査対象とされやすいアイヌ民族が自ら記録することの意味について考える。
14	総合討論 II	総合討論 I 及びその後の授業を踏まえた論点を抽出し議論する。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

・課題文献は時間をかけて読み、内容を十分理解したうえで事前課題に取り組むこと。
・毎回の授業で学んだことを短く学習支援システムに投稿すること。

・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト(教科書)】

課題文献(英語、日本語)は学習支援システムを通じて配布。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

(1) 事前課題・発表60%(文献の正しい理解、説得力のある論点の抽出)
(2) 平常40%(授業での積極的な発言20%、授業後課題20%)

【学生の意見等からの気づき】

Jamboardのようなブレインストーミング用のアプリを使用することで、授業中の議論をスムーズにファシリテートできる。また、留学生にとっては、議論の経過を可視化することで、内容を理解しながら議論に参加できる。

【学生が準備すべき機器他】

Jamboard等を使うため、対面に参加する際も、大学のネットワークに接続可能なパソコンを持参すること。

【その他の重要事項】

・少数民族が多く暮らす東南アジアの開発現場に長く関わっている教員が、自らの経験をもとに課題文献や発表者へのコメントを行う。
・履修者の人数や語学力、研究テーマによって課題文献は柔軟に対応する。また履修者の研究に関する発表や議論を柔軟に組み入れる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際開発研究

<研究テーマ>影響評価、国際組織、開発援助、NGO、メコン地域の開発と環境

<主要研究業績>

『国際協力と想像力』(主編者、日本評論社、2021年)

『調査と権力』(単著、東大出版会、2014年)

『NGOと世界銀行』(主編者、ミネルヴァ書房、2012年)

『人々の資源論』(分担執筆、明石書店、2008年9月)

『シリーズ国際開発 生活と開発』(分担執筆、日本評論社、2005年9月)

※詳しい研究業績は以下を参照のこと。

<https://kenkyu-web.hosei.ac.jp/Profiles/29/0002838/detail.html?lang=ja&achievement=choshoh>

【Outline (in English)】

【Course outline】

The theme of this course is "development and ethnic groups" focusing on the concepts, the ethnic groups in development in Southeast Asia and the history of the ethnicity issues in Japan. The course aims to discuss and analyze development from the perspectives of ethnic groups.

【Learning Objectives】

By the end of the course, students should be able to do the followings:

- 1) Understanding and explaining the controversy over the concept of ethnic group, race, ethnic minorities, tribe and the indigenous people.
- 2) Express her/his opinion critically on the social/historical/interactive relations between development issues and ethnic groups.
- 3) Applying the cases of development in Southeast Asia and in Japan for 1) and 2) above.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students will be expected to have read the assigned literature. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria / Policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following

- 1) Extent of understanding about the assigned literature including the presentation based on your reading: 60%
- 2) Short reports on your own research: 20%
- 3) In class contribution: 20%

SOS500G1 - 209 (その他の社会科学 / Social science 500)

多民族共生論 I B

松本 悟

サブタイトル：先住民族と国際規範—国際文化からのまなざし—

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業は「先住民族と国際規範」をテーマとし、国際連合や国際開発機関、民間銀行の国際協会などの宣言や政策が形成された過程やその実効性を批判的に読み解きながら、先住民族など多民族が共生できる国際社会に向けた規範のあり方を考える。

【到達目標】

- (1) 先住民族の権利を守る国際規範の形成史を説明できる。
- (2) 実際の規範がどのように実務に適用されているかを批判的に分析できる。
- (3) 当該分野の専門的な文献を読んで要点を理解できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

■基本方針：入国できない留学生や基礎疾患を持つ学生に配慮しつつ、対面で行う。

■進め方：

- (1) 履修者全員が事前課題文献（20頁程度を想定）を熟読し、①「この文献から重要だと考えた点」を3つ程度とそう考えた理由、②そこから導いた論点（履修者同士で議論したい点）を発表する。
- (2) (1)を共有した上で、履修者の間でその日議論したい点を絞り（全ての論点でもよい）議論する。
- (3) 必要に応じて教員が補足授業を行う。
- (4) 学期の後半に、それぞれが課題文献を提示し、1回分の授業を担当する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	授業の狙い、課題文献を説明し履修者の関心を引き取る。それにしがつて授業内容を変更・確定する。発表の担当者を決める。また、文献の読み方や論点の意味について解説する。
2	先住民（族）について	多民族共生論IAの復習を兼ねて先住民（族）という概念について考える。
3	国際開発金融機関の政策変化	国際開発金融機関の過去と現在の先住民（族）配慮政策を比較して何が変わり、何が変わらなかったかを考える。
4	先住民（族）と開発政策	国際開発金融機関が融資したプロジェクトで影響を受ける先住民（族）にどのように配慮政策（国際機関）を伝えるべきかを考える。
5	日本の開発援助と先住民	日本の開発援助機関の先住民（族）配慮政策についてその歴史と妥当性を国際開発金融機関と比較して議論する。
6	学生による発表①	履修者による研究発表と議論。
7	先住民族の権利に関する国連宣言	2007年の画期的な宣言の意義とそこに至るプロセスから国際規範形成の難しさを考える。
8	自由で事前に十分な情報が提供された合意（FPIC）	先住民（族）と開発を考える上で重要なFPICの概念の成り立ちと葛藤から主体的な関与について考える。
9	企業の海外進出を支援する輸出信用機関の政策	企業を支援する公的金融機関の環境社会配慮政策を世界銀行やODAと比較して考える。
10	学生による発表②	履修者による研究発表と議論。
11	プロジェクトを通して考える①カンボジア	実際の開発協力プロジェクトにここまでの学びを適用して考える。1回目はカンボジア北東部の事業。
12	プロジェクトを通して考える②フィリピン	2回目は先住民族に関わる2つのタイプのNGO（プロジェクト、アドボカシー）の事業から市民社会の影響について考える。
13	プロジェクトを通して考える③ダム開発	中国などの新興ドナーの先住民（族）配慮について、世界銀行と比較して考える。

14 総合討論

ここまでの授業を横断的に捉えなおし、先住民族の権利を守るための国際規範について考える際の重要な視点について議論する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ・事前課題文献は時間をかけて読み、課題に取り組むこと。
- ・毎回の授業で学んだことを短く学習支援システムに投稿すること。
- ・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

課題文献（英語、日本語）は学習支援システムを通じて配布。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

- (1) 事前課題・発表60%（文献の正しい理解、説得力のある論点の抽出）
- (2) 平常20%（授業後課題）
- (3) 授業運営20%（課題文献の提示、授業のファシリテーション）

【学生の意見等からの気づき】

Jamboardのようなブレインストーミング用のアプリを使用することで、授業中の議論をスムーズにファシリテートできる。また、留学生にとっては、議論の経過を可視化することで、内容を理解しながら議論に参加できる。

【学生が準備すべき機器他】

Jamboardを使うため、対面に参加する際も、大学のネットワークに接続可能なパソコンを持参すること。

【その他の重要事項】

- ・国際金融機関の先住民政策を含むセーフガード政策の改善を働きかける活動にNGO職員として関わっていた教員が、その経験を発表へのコメントや補足講義に活かす。
- ・履修者の人数や語学力、研究テーマによって課題文献は柔軟に対応する。また履修者の研究に関する発表や議論を柔軟に組み入れる。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際開発研究
<研究テーマ>影響評価、国際機構論、国際協力学
<主要研究業績>

- 『国際協力と想像力』（編著、日本評論社、2021年）
- 『調査と権力』（単著、東京大学出版会、2014年）
- 『NGOから見た世界銀行』（編著、ミネルヴァ書房、2013年）
- 『映画で学ぶ国際関係II』（共著、法律文化社、2013年）
- 『人々の資源論』（共著、明石書店、2008年9月）
- 『シリーズ国際開発 生活と開発』（共著、日本評論社、2005年9月）

【Outline (in English)】

【Course Outline】

The theme of this course is indigenous people and international norms. It will enable students to critically understand the historical development and the application for the projects of international norms to protect indigenous peoples' rights in relation to not only international development cooperation but also international finance or foreign investment.

【Learning Objectives】

By the end of the course, students should be able to do the followings:

- 1) Explaining how the International Laws or Norms to protect the rights of the indigenous people have been developed.
- 2) Analyzing critically how the International Laws or Norms to protect the rights of the indigenous people have been applied for actual cases.
- 3) Explaining the summary of the relevant academic literatures to international laws/norms and the rights of indigenous people.

【Learning Activities】

Before each class meeting, students will be expected to have read the assigned literature. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria / Policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following

- 1) Extent of understanding about the assigned literature including the presentation based on your reading: 60%
- 2) Facilitating one class: 20%
- 3) Reaction papers after each class: 20%

HIS500G1 - 210 (史学/History 500)

多民族共生論Ⅱ A

高柳 俊男

サブタイトル：人物でたどる日本近現代史

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「多民族共生論Ⅱ」は、春学期と秋学期で学ぶ内容を変えている。春学期のⅡAでは、朝鮮やアジアと関係の深い日本人個人に関する伝記的著作を読んで、アジアをめぐる近現代日本の思想や社会運動の潮流を振り返っている（秋学期のⅡBは、在日朝鮮人をめぐる日本の多民族共生について考察）。ⅡAではこれまで、鶴見俊輔・和田春樹・石田雄・富山妙子・岡部伊都子・日高六郎・松本昌次・上田正昭・茨木のり子などを扱ってきた。今年度は、数年前に他界した井出孫六への追悼も込めて、「無産者新聞」のポスターなどで知られる美術家 柳瀬正夢（1900～45年；本名は正六）を取り上げたい。①柳瀬正夢という個人の歩んだ道や、その中で身につけた思想・ものの見方を知る
②柳瀬正夢や彼と関わりのあった他の人物を通して、近現代日本の社会・思想・文化などの潮流をたどる
③とくに、アジアとの関わりの中で、どのような社会運動・思想潮流があったかに着目する
④特定の個人に関する伝記的著作の中から追究すべき課題を見出し、調査・探求する
⑤これまでの各人の研究や関心に応じて、受講者相互間に有益な討論を成立させる

【到達目標】

上記「授業の概要と目的」にある各項目について、大学院修士課程の学生として求められるレベルに達することを目標とする。
具体的には、歴史の中を生きる個人の伝記的記述を読むことを通して、日本近現代史をアジアとの関わりの中で再検証するための契機をつかめるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

今回のテキストは、柳瀬正夢に関する評伝である。350頁近くあるので、1回につき約40頁のペースで読み進めていく。
レポーターの報告と全員の討論により、ゼミのような形で進める。レポーターは、登場する人物や事件などの事象のうち、大切と思われる点や関心のある点を中心に事実調べをし、授業で議論すべき論点を提出すること。とりわけ、後掲の図録も参照し、関連する画像に直接当たること。また、近年格段に検索が容易になった各種のデータベースを駆使し、当時の新聞・雑誌記事などにも目配りをしながら、時代を実証的に再現するよう努めることが大事である。
受講者数が少ない場合は、負担が極端に多くなることを避け、レポーター無しで進める回も設ける。
毎回、冒頭に前回の振り返りを入れることでフィードバックとする。また、関連する映像を観ながら既習事項を定着させる回も、数回設ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入（その1）	受講者各自の自己紹介、授業計画の解説、参考文献の紹介などのガイダンス
第2回	導入（その2）	年譜や各種新聞記事などを使いながら、柳瀬正夢や著者の井出孫六の伝記的な事項をあらかじめ整理する
第3回	テキスト 第1章・第2章	戦争末期の非業の死と、松山での生い立ち
第4回	テキスト 第3章・第4章	「大陸への玄関口」門司への転居、上京して田端モンマルトルへ
第5回	関連映像の上映①	関連映像の視聴
第6回	テキスト 第5章・第6章	院展への入選、画家としての順調なスタート
第7回	テキスト 第7章・第8章	米騒動、長谷川如是閑との出会い
第8回	テキスト 第9章・第10章	「種時く人」同人、MAVOの活動へ
第9回	関連映像の上映②	関連映像の視聴
第10回	テキスト 第11章・第12章	関東大震災と「無産者新聞」、権の画家
第11回	テキスト 第13章・第14章	「ねじ釘の画家」の所以、投獄と妻の死

第12回	テキスト 第15章・第16章	満蒙視察と戦時体制下へ
第13回	関連映像の上映③	関連映像の視聴
第14回	全体のまとめ	柳瀬正夢のアジアとの関わりをふり返る

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業中に指示する関連文献の講読、関連映像視聴、関連箇所への訪問など。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。通常の授業内では難しいので、夏休みに希望者により、関連するフィールドワークを実施することがあるかもしれない。

【テキスト（教科書）】

井出孫六『ねじ釘の如く：画家・柳瀬正夢の軌跡』（岩波書店、1996年）。すでに絶版だが、Amazonなどでは定価（本体価格2,400円）の半額程度で入手可能。

【参考書】

図書館に展覧会図録として、『柳瀬正夢：1900-1945』（2013年、451頁）を入れてある。そこに盛られた画像を常に参照すること。
そのほか、本書のなかで登場する他の作家・美術家たちの作品に、適宜あたってみること。

【成績評価の方法と基準】

レポーター時の報告30%、普段の授業への貢献度40%、学期末に提出する授業総括報告書30%を目安とし、総合的に判断する。本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

私の授業では教員を含む参加者全員が、最後に自分なりの授業総括報告書を作成し共有化しており、それを次年度の授業改善に活かすよう努めている。近年、留学生の受講も増えてきたが、一般学生も留学生も、ともに意義を感じるような授業を目指したい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>
朝鮮近現代史、とくに在日朝鮮人（広義）の歴史や文化の研究
<研究テーマ>

在日朝鮮人の歴史や文化を、従来の「差別問題」という視角からでは抜け落ちてしまう諸側面も含めて、多面的に描き出し、新しい時代に合わせた等身大の在日像と、日本社会のあるべき姿を考察すること。そのために文献収集や聞き書きを行ない、これまで光が当てられなかったような個人の事例を数多く集めること。

<主要研究業績>

・「渡日初期の尹学準—密航・法政大学・帰国事業」（法政大学国際文化学部『異文化』第5号論文編、2004年）
・「短歌と在日朝鮮人—韓武夫を手がかりとして」（日本社会文学会『社会文学』第26号、2007年）
・「飯田・下伊那研修を意義あるものとするために—国際系学部の事前学習授業の実践から」（『学輪IIDA』機関誌『学輪』第2号、2016年）
*詳細は、「学術データベース」をご参照のこと。

【Outline (in English)】

This class aims to study about the trends of contemporary Japanese thought and social movements over Asia, by reading of a biographical work on Japanese individual closely related to Korea or Asia. In this year, we read the book on Masamu Yanase.

Final grade will be calculated according to the following process. In-class presentation 30%, in-class contribution 40%, and term-end report 30%.

HIS500G1 - 211 (史学 / History 500)

多民族共生論Ⅱ B

高柳 俊男

サブタイトル：朝鮮・在日朝鮮人と日本社会

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本と朝鮮半島との関係史や、在日朝鮮人（総称）が経てきた歴史を明らかにする。その際、政治史や運動史のみならず、生活史・文化史・精神史の解明にも重点を置く。

日朝関係や在日朝鮮人の事例を追うことが、広く国際関係や日本国内の多民族共生全般について考える際、示唆が得られるようにしたい。

なお、一次資料を含めた各種文献に関して、当時と現在の2つの視点から丁寧な読解ができるよう努める。

【到達目標】

上記「授業の概要と目的」にある各項目について、大学院修士課程の学生として求められるレベルに達することを目標とする。

具体的には、在日朝鮮人の経てきた歴史・文化やその日本社会との関わりを、自らの知性と感性により時間的・空間的広がりの中で理解し、受け売りや図式的把握ではなく、自らの言葉で具体的・実証的に語れるようになることを目指す。

また、「研究」という自らの行為を、より客観的・多面的に眺める契機を得るようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

秋学期のこの授業では、日本社会に大きな比重を占める「異民族集団」である在日朝鮮人を素材に、日本における異文化摩擦や多民族共生の姿を具体的に考察している。

2012年度から8年間、戦後、各種の民族団体・政党・社会運動団体ないし日本政府関係機関などが出した朝鮮関係のパンフレット・小冊子を読み解きながら、戦後の朝鮮・在日朝鮮人をめぐる論調や運動の系譜を追う作業を行った。

定年前最後のサブタイトルを経た2021年度からは、私自身が大学生以来、このテーマで執筆してきた各種の文章を取り上げている。研究者としての自己の歩みを祖上に載せるのは、必ずしも受講者に範を垂れる意味ではなく、その試行錯誤や紆余曲折の歩みを示すことで、同じく「研究」に携わる立場である受講生に、何らかの参考や示唆となることを期待するからである。

今年度は、春学期からの継続を視野に入れ、まず新聞に掲載されたポンチ絵から始め、その後に短歌やその他の内容に入る予定である。取り上げるそれぞれの著作は、その時代の社会潮流や研究動向の産物であり、また当然のこととしてその後のことは書いていないので、現在からみたら不十分な箇所もある。受講者は、テキスト内容を正確に読み解くとともに、それらを「当時」と「現在」という2つの文脈の中に置いて、客観的・学術的に分析していく。すなわち、なぜこのような主張がなされたか、「当時」の背景を明らかにすると同時に、「現在」の目から見た認識の問題点や、当該課題のその後の推移、さらには研究史の進展などもフォローしつつ報告するよう努めること。

授業の進め方としては、テキストをレポーターの報告と全員の討論で読んでいく。受講者が少なければレポーター無しの回も設けたい。毎回、冒頭で前回の振り返りを行うことでフィードバックとし、また関連する映像を観ながら既習事項を定着させる回も、数回設ける。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	導入	受講者の自己紹介、授業計画の解説、当面のテキスト配付、など
第2回	日本の新聞におけるポンチ絵①	ハーグ密使事件、義兵闘争
第3回	日本の新聞におけるポンチ絵②	伊藤博文暗殺事件、韓国併合
第4回	映像による学習内容の振り返り①	映像上映とそれをめぐる議論
第5回	日本の新聞におけるポンチ絵③	武断統治、二個師団増設問題
第6回	日本の新聞におけるポンチ絵④	三一独立運動、「不逞鮮人」像
第7回	『朝鮮時論』 解題	在朝日本人の雑誌『朝鮮時論』を読む
第8回	映像による学習内容の振り返り②	映像上映とそれをめぐる議論
第9回	在日朝鮮人と短歌①	韓武夫の作歌活動に関する論文を読む
第10回	在日朝鮮人と短歌②	河義京の作歌活動に関する論文を読む
第11回	帰化者による文学	松本富生の本への解説を読む

第12回	映像による学習内容の振り返り③	映像上映とそれをめぐる議論
第13回	法政二高の11・3事件	法政二高の11・3事件に関する講演会の記録を読む
第14回	まとめ	これまでの全13回の授業をまとめる

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

テキストに登場する文献や授業中に指示する関連文献の講読、関連映像の視聴、関連箇所への訪問など。

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

その都度、紙媒体もしくはpdfで配付する。

【参考書】

『韓国朝鮮を知る事典』（平凡社）、『朝鮮人物事典』（大和書房）、『在日コリアン辞典』（明石書店）などの事典類で、韓国・朝鮮を本格的に研究したい人は購入すること。

【成績評価の方法と基準】

レポーター時の報告35%、普段の授業への貢献度30%、および学期末の授業総括報告書35%を目安に、総合的に判断する。本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

私の授業では教員を含む参加者全員が、最後に自分なりの授業総括報告書を作成し共有化しており、それを次年度の授業改善に活かすよう努めている。

近年、留学生の受講も増えてきたが、一般学生も留学生もともに意義を感じ、自身の研究にも役立つような授業を目指したい。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

朝鮮近現代史、とくに在日朝鮮人（広義）の歴史や文化の研究、日朝関係史

<研究テーマ>

在日朝鮮人の歴史や文化を、従来の「差別問題」という視点からでは抜け落ちてしまう諸側面も含めて、多面的に描き出し、新しい時代に合わせた等身大の在日像と、日本社会のあるべき姿を考察すること。そのために文献収集や聞き書きを行ない、これまで光が当てられなかったような個人の事例を数多く集めること。

<主要研究業績>

・「渡日初期の尹学準—密航・法政大学・帰国事業」（法政大学国際文化学部『異文化』第5号論文集、2004年）

・「短歌と在日朝鮮人—韓武夫を手がかりとして」（日本社会文学会『社会文学』第26号、2007年）

・「飯田・下伊那研修を意義あるものとするために—国際系学部の事前学習授業の実践から」（『学輪IIDA』機関誌『学輪』第2号、2016年）

*詳細は、本学の「学術研究データベース」をご参照のこと。

【Outline (in English)】

This class aims to study about Japanese multicultural coexistence, by reading of my own papers on Japan-Korea relations or Korean minority in Japan.

This year, we plan to begin with satirical cartoon from newspapers, with a view to continuity from the spring semester, followed by tanka poems and other articles.

Final grade will be calculated according to the following process. In-class presentation 35%, in-class contribution 30%, and term-end report 35%.

SOC500G1 - 213 (社会学 / Sociology 500)

国際ジャーナリズム論

神林 毅彦

サブタイトル：複雑化する国際情勢とジャーナリズム

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

国際社会が、戦争、気候危機、移民・難民問題、経済や貿易問題などに直面するなか、国際ジャーナリズムの役割がますます重要視されている。国際ジャーナリズムの現状、影響、問題点、対策等を重点的に議論する。下記が主な内容となる。

1. 複雑化する国際情勢と報道 2. 外交とジャーナリズム 3. 報道にみられる政治的、経済的、社会的影響

【到達目標】

ジャーナリズムの役割、倫理、直面する問題、その対策や国際報道の背景などに理解を深めることができるようになる。また、効果的な情報発信ができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

国内外の問題に関する日本、海外メディアの報道を検証しながら、ジャーナリズムの本来の役割について議論する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

あり / Yes

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	ジャーナリズムの役割 総論
第2回	メディアの特性（Ⅰ）	ジャーナリズムと倫理問題
第3回	メディアの特性（Ⅱ）	ニュースの構造、要素
第4回	メディアの特性（Ⅲ）	国際報道とその背景（1）
第5回	メディアの特性（Ⅳ）	国際報道とその背景（2）
第6回	メディアの特性（Ⅴ）	国際報道とその影響
第7回	国際ジャーナリズム（Ⅰ）	ジャーナリズム、プロパガンダ、PR、フェイクニュース
第8回	国際ジャーナリズム（Ⅱ）	原発事故、原発問題の報道
第9回	国際ジャーナリズム（Ⅲ）	戦争報道
第10回	フィールドワーク	インタビュー、取材等
第11回	国際ジャーナリズム（Ⅳ）	環境問題、気候危機の報道
第12回	国際ジャーナリズム（Ⅴ）	移民、難民問題と報道
第13回	フィールドワーク	インタビュー、取材等
第14回	今後の国際報道	メディアの多様化、SNS、AIの影響

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

国際情勢に関する報道に目を向け、批評を行う。また、報道の方法、問題点などを考える。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

とくになし。担当者が資料等を配布する。

【参考書】

ビル・コヴァッチ、トム・ローゼンスティール「ジャーナリズムの原則」日本経済評論社 2002年（原書 The Elements of Journalism）
The New York Times, The Washington Post, The Christian Science Monitor, The Guardian, BBC, Xinhua News Agency, Yonhap News, NHK、他

【成績評価の方法と基準】

平常点 30%、授業での発表や議論 40%、レポート（内容評価）30%

【学生の意見等からの気づき】

フィールドワークは学生が積極的に参加していた。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>ジャーナリズム論 <研究テーマ> 国際ジャーナリズム論、ジャーナリズム倫理
<主要研究業績>

"For Koreans in Japan, this little-known massacre still carries weight," 2023, The Christian Science Monitor

"In Japan, domestic violence survivors help victims - and abusers," 2023, The Christian Science Monitor

「関東大震災とジェノサイド」「部落解放」2023年9月号、解放出版社

【Outline (in English)】

(Course outline)

The theme of this course is theories of international journalism in the information age. This course provides opportunities for students to critique news coverage in Japanese and foreign media outlets and discuss mainly the impact of social media; journalism and diplomacy; and political, economic and social factors influencing media content.

(Learning Objectives)

At the end of the course, students are expected to do the followings:

A. Have a clear understanding of the principles of journalism.

B. Have a clear understanding of the integral role of international journalism, especially in the face of complex global issues such as conflicts, migration, refugees and climate crisis.

C. Discuss the most pressing issues facing international journalism today.

(Learning activities outside of classroom)

Students will read articles and watch news programs in major Japanese and foreign media regularly about diplomatic and global issues.

(Grading Criteria /Policy)

Grading will be determined by 30% participation, 30% presentations, 40% writing assignments

HIS500G1 - 215 (史学/History 500)

国際文化交流論Ⅱ A

木村 真

サブタイトル：人の移動現象にアプローチするさまざまな方法

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では、さまざまな形態の人の移動が地域社会やさまざまな人間集団に与えた影響を考察します。人の移動は近現代の世界に限られた現象ではありませんが、とくに、19世紀以降の国民国家形成過程、都市化や近代化の過程、世界各地の紛争のなかで見られた出稼ぎ、国外・国内移住、強制的な住民交換、政治的亡命などの移動現象と人々のネットワーク、人々の帰属意識、さらに国家による政策の関係に注目します。それによって、現代社会で生じている多様な、多面的な移動現象の理解を深めることを目的とします。

【到達目標】

- ①国民国家形成過程の人の移動について、多面的な理解を修得すること
- ②住民交換政策の地域社会に与える影響についての知見を得ること
- ③人々の多様な形態の移動にともなう送り出し地域、受け入れ地域の人々の文化的影響に関する知見を得ること
- ④以上のテーマについて、とくに歴史研究や地域研究の方法を学ぶこと

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

近代バルカン、東欧の事例を中心に担当者が講義も行いますが、受講者全員で関連文献、論文を読み、発表をしてもらいます。また、受講者の専門地域もしくは興味を持つ地域の事例について報告発表もしてもらい予定。各授業の内容について質問、意見をリアクションペーパーの形で提出してもらいます。なお、対面式を前提としますが、状況によってオンラインとなるかもしれません。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	授業の進め方について
第2回	近代の東欧、バルカン社会 (1)	東欧、バルカン地域における国民国家形成以前の人の移動
第3回	近代の東欧、バルカン社会 (2)	帝国内の各地、ならびに帝国内外を結ぶさまざまな人の移動
第4回	国民国家形成過程と人の移動 (1)	バルカン地域における国民国家形成のプロセス
第5回	国民国家形成過程と人の移動 (2)	国家形成にともなう人の移動（武装勢力、軍隊、住民移動など）
第6回	国民国家形成過程と人の移動 (3)	国家形成にともなう人の移動（出稼ぎ、季節労働など）
第7回	国民国家形成過程と人の移動 (4)	国家形成にともなう人の移動（さまざまな移民形態）
第8回	国民国家形成過程と人の移動 (5)	国家形成にともなう人の移動（亡命など）
第9回	紛争と人の移動 (1)	紛争にともなう人の移動と国家の対応（住民交換）
第10回	紛争と人の移動 (2)	紛争にともなう人の移動と国家の対応（強制移住）
第11回	紛争と人の移動 (3)	紛争にともなう人の移動と国家の対応（難民）
第12回	移動する人々の帰属意識 (1)	帰属意識の構築
第13回	移動する人々の帰属意識 (2)	重層的な帰属意識
第14回	人の移動をめぐる研究から得られる知見	人の移動をめぐる歴史的な研究アプローチの可能性と限界

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

報告発表に際しては、あらかじめ、関連する文献を読み、レジュメを作成準備することが求められます。また、発表者以外の参加者も、関連する概念、事象などについて調べることを期待されます。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

受講者の関心に即して決めるつもりです。さしあたり、下記の文献を素材とする予定です。テキストはこちらでコピーを準備します。

Ulf Brunnbauer(ed.) Transnational Societies, Transnational Politics. Migration in the (Post-)Yugoslav Region, 19th-20th Century. Munchen, 2009.

【参考書】

授業において指示します。さしあたり、以下のものを挙げます。

ノーマン・M・ナイマーク『民族浄化のヨーロッパ史』刀水書房、2014年
山本明代、バブ・ノルベルト編『移動がつくる東中欧・バルカン史』刀水書房、2017年

【成績評価の方法と基準】

平常点（授業における発表、ならびに議論への参加）（50%）、レポート課題（50%）によって評価します。

【学生の意見等からの気づき】

対面式、オンラインのどちらの場合でも、なるべくコミュニケーションを取り合うよう努力したいと思います。

【担当教員の専門分野等】

〈専門領域〉バルカン近現代史、東欧地域研究

〈研究テーマ〉近現代東欧地域の強制的移動を含む人の移動、移民現象
ブルガリア史、南スラヴ地域を中心に、バルカン近現代史、東欧地域研究を専門としております。現在は授業のテーマでもある南東ヨーロッパ地域の近現代の人の移動を研究しています。また、東欧地域の史学史研究にも関心を持っております。

〈主要研究業績〉

『バルカン史と歴史教育』（共著）2008年 明石書店

『東欧地域研究の現在』（共著）2012年 山川出版社

『移動がつくる東中欧・バルカン史』（共著）2017年 刀水書房

【Outline (in English)】

【Course outline】 This course introduces a historical approach for a diversity of migrations after the 19th century to students taking this course.

【Learning Objectives】 At the end of the course, students are required to obtain knowledge about various patterns of migrations after the 19th century.

【Learning activities outside of classroom】 Before/after each class meeting, students will be expected to spend four hours to understand the course content.

【Grading Criteria/Policy】 Final grade will be decided based on in-class contribution (50%), and term-end report (50%).

ARSk500G1-217 (地域研究(地域間比較) / Area studies(Interregional comparison) 500)

比較宗教文明論

臼杵 陽

サブタイトル：イスラームなどの一神教と日本

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

イスラーム国（IS）は壊滅したものの、宗教・宗派・民族紛争は世界中で続いている。ウクライナ情勢は解決の見通しがついておらず、中東地域では大地震に襲われて先行きが見通せない状況が続いている。今後世界がどんな方向に向かうのか、見えてこない。授業では、日本社会で宗教がどんな意味をもっているのかを出発点として、世界の宗教紛争の現状、とりわけ現代中東の具体的な問題を取り上げながら検討していく。

【到達目標】

受講者がイスラーム世界を含む現代の宗教紛争を考える際に重要な点は、欧米社会に特徴的に見られる宗教を個人の信仰として捉えるのではなく、共同体あるいは社会における機能に注目して考えることである。文明として宗教を捉えるということはわれわれが現代社会における宗教現象を理解するうえでも重要な視点である。宗教文明における衝突はその教義のちがいでというよりも、それぞれの宗教文明がそれぞれの歴史的過程を経て、その現在が形成されてきたということでもある。したがって、宗教文明を比較の視点から捉えるということは、現在の状況を歴史的な観点からプロセスとして読み直す作業でもある。したがって、宗教の名の下でのテロなどをたんに野蛮で時代錯誤的としてみるのではなく、現代における歴史的過程の帰結という観点からも考え直してみようということである。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

出席者数によるが、テキストを決めて演習の形式で進めていくことを原則としたい。必要に応じて、DVDなどの映像資料などを用いながら、「宗教」に関していったい何が問題なのかを含めて考えていくことにしたい。まずは「多神教」といわれる日本社会にとって「宗教」とは何かを考えていき、参加者の関心によってイスラームやユダヤ教などの「一神教」の世界へと話を移していきたい。毎回、授業に関する小レポートを書いて提出してもらおう。授業冒頭で小レポートに対するフィードバックを行い、さらなる議論に活かす。本科目は、国際文化研究科の判断で可能となった場合は対面授業を行う。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	この授業で何を学んでいくのか。
第2回	なぜ日本人は無宗教なのか？ ①日本人の宗教観	近現代に注目して日本人の宗教観がいかなるものなのかについて考える。
第3回	なぜ日本人は無宗教なのか？ ②明治期から太平洋戦争まで	明治期から太平洋戦争までの日本人にとっての「宗教」とは何かを考える。
第4回	なぜ日本人は無宗教なのか？ ③戦後日本	戦後日本の日本人にとっての「宗教」の変容について考える。
第5回	なぜ日本人は無宗教なのか？ ④9・11事件後	9・11事件後の日本人のイスラーム観を考える。

第6回	日本と中東イスラーム世界の関係①明治・大正期	明治・大正期の日本・イスラーム関係史を考える。
第7回	明治・大正期の日本・イスラーム関係史を考える。	戦前昭和期の日本・イスラーム関係史を考える。
第8回	日本と中東イスラーム世界の関係③大川周明の初期イスラーム研究	国家主義者の大川周明の青年期のイスラーム神秘主義研究について考える。
第9回	日本と中東イスラーム世界の関係④大川周明晩年のコーラン研究	国家主義者の大川周明の晩年のコーランの翻訳、その研究について考える。
第10回	日本人のユダヤ人観①戦前期	戦前日本のユダヤ人観と反ユダヤ主義
第11回	日本人のユダヤ人観②戦後期	日本人のユダヤ人観②戦後期
第12回	日本人のユダヤ人観③欧米との相違	キリスト教徒の多い欧米と日本のユダヤ人観観はどのように違うのか？
第13回	キリスト教徒の多い欧米と日本のユダヤ人観観はどのように違うのか？	同じ一神教のイスラーム世界のユダヤ人観はキリスト教世界とどのように違うのか？
第14回	まとめ	総括討論

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

中東イスラーム世界、とりわけイスラーム主義あるいはテロはいつ起こるか分からない。したがって、毎日、新聞、テレビ、インターネットでニュースをチェックする習慣をつけてほしい。また、日々起こる事件の表層だけでなく、その底流に流れる事態の本質をきちんと見極める眼力を養ってほしい。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

阿満利磨『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書、1996年。
鳥齋進『国家神道と日本人』岩波新書、2010年。
臼杵陽『イスラームはなぜ敵とされたのか』青土社、2009年。
臼杵陽『大川周明—イスラームと天皇のはざままで』2010年。

【参考書】

井筒俊彦『イスラーム文化』岩波文庫、1991年。
井筒俊彦『コーランを読む』岩波現代文庫、2013年。
大川周明『回教概論』ちくま学芸文庫、2008年。
大川周明『復興亜細亜の諸問題』中公文庫、2016年。

【成績評価の方法と基準】

授業内における報告および質疑応答など積極的な姿勢をもって参加しているかによって評価する（40%）。期末にはレポートを提出してもらおう（60%）。

【学生の意見等からの気づき】

院生諸君との授業内でのコミュニケーションによって授業のあり方を検討する機会をもつことにしたい。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

なし

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>中東地域研究、宗教・エスニック問題
<研究テーマ>パレスチナ/イスラエル紛争、日本の対中東関係、とりわけ聖地問題
<主要研究業績>『見えざるユダヤ人』（平凡社）『原理主義』（岩波書店）、『大川周明』（青土社）、『イスラエル』（岩波新書）、『イスラームはなぜ敵とされたか』（青土社）、『アラブ革命の衝撃』（青土社）、『世界史の中のパレスチナ問題』（講談社現代新書）、『「中東」の世界史』（作品社）、『「ユダヤ」の世界史』（作品社）など。

【Outline (in English)】

Learning activities outside of classroom

In the Muslim societies or Middle Eastern world, nobody can anticipate what would happen such as terror attacks. Therefore, students attending this class are asked to follow news in newspapers, television or internet so on. Students are also asked to improve their abilities to grab the underlying cause of what are happening every day. Preparation and review are needed for two hours as a standard.

Grading Criteria /Policy

Grading Criteria is to participate actively in reports and questions & answer in class (40%). Semester-end reports are needed to submit (60%).

FRI500G1 - 305 (情報学フロンティア / Frontiers of informatics 500)

多文化情報メディア論 I A

大嶋 良明

サブタイトル：ソーシャルメディアの調査と分析

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代のネット社会をメディアとしての諸特性においてとらえ、文化情報学的なアプローチで分析するなかから、異文化理解に資する視点の開拓を試みる。これまで社会科学的发展の中で構築されたメディア論や人文科学分野での文化理論とも関連させた検討を試みている。とくにインターネット上の言説に着目し、その分析手法やメディアデータとしての特徴や書物との違いについて学ぶ。

【到達目標】

この科目では現代のテキストを最新の手法によって分析できるようになる。現代のネット社会をテキストの計量的・統計的な諸特性においてとらえる。英米文化の理解と異文化理解の観点から、インターネット上の言説や文化表象に関連するメディアに着目し、その主要な分析手法やモデル化について説明できるようになる。また実際のデータに適用して分析することができるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と輪講により行う。
 ・複数レポート制による輪講とパソコンを用いたインターネット上のデータの分析を試みる。
 ・各自が学習内容を相互閲覧可能な形でWebに記録する。
 ・日本語のみならず各国語文化圏のWebテキストに関する各自の話題提供を通じて、視野を拡げ問題意識を深化させる。
 ・教員と履修者全員によるオープンなディスカッションを目指す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション：社会と機械学習	Webから海外社会を観察することと分析の課題を学ぶ。
2	即時性の検出	時系列のテキストからキーワードの出現傾向を検出する方法を学ぶ。
3	単語の出現頻度	形態素解析に基づく単語の出現頻度の分析、Bag of Words(BoW)の構築を学ぶ。
4	共起関係と表現の連鎖	単語の連なり、N-gram、共起関係(コロケーション)の分析方法を学ぶ
5	文書中の単語の重要性和TF-IDF	TF-IDFによる単語の重要性の分析手法を学ぶ。
6	関連性の評価	テキストから関連性の高い文書を見つける手法を学ぶ。
7	潜在的意味論と話題性の抽出	LDA(潜在的ディリクレ分割)法によるトピックモデルと言説空間の分析法を学ぶ
8	感情分析、ネガポジ分析	感情分析とは何かを理解し文章から意見の抽出方法を学ぶ。
9	推薦の仕組み	予測とレコメンド手法、バスケット分析の手法を学ぶ。
10	ジャンルの抽出	テキストのジャンル分類を学ぶ。
11	クラス分類	テキストのクラス分類の方法を学ぶ。
12	特徴抽出	大規模データからの特徴抽出の手法を学ぶ
13	特徴量の圧縮と次元削減	大規模データからの特徴量圧縮の手法を学ぶ
14	学習のまとめ	クラス内ディスカッションをおこない、得られた知識をまとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の授業終了後、受講生はクラス内での発表および討議について各自の発表内容、発言、担当教員のコメント、クラス内での質疑応答などを学内ネット（後述【情報機器】の項を参照のこと）にアップロードしてオンライン記録として情報共有すること。
 予習復習として、テキストおよび毎回の授業で担当教員が指定する文献を熟読し、気づいた論点や疑問点については学内ネットにアップロードし授業内での発言に備えること。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

テキストは指定しない。必要な資料は授業内で配布する。

【参考書】

全体を通じての参考書は特に指定しない。
 必要に応じて提示する。領域的な理解の助けとなる参考書は以下の通り：
 【多言語環境】 三上喜貴ほか、「言語天文台からみた世界の情報格差」、慶應義塾大学出版会(2014)、ISBN: 978-4-7664-2178-1
 【英米言語文化】 Swiss, T., “Unspun,” NYU Press(2001), ISBN: 978-0814797594
 【ネット社会の文化的特性】 川上量生（監修）、「ネットが生んだ文化」、角川学術出版(2014)、ISBN: 978-4-04-653884-0
 【言語分析の手法】
 (1) ボレガラ、岡崎、前原、「ウェブデータの機械学習」、講談社(2016)、ISBN:978-4-06-152918-2
 (2) Richart, W. and Coelho, L.,P.,(著)、齋藤康毅（訳）、「実践 機械学習システム」、オライリー・ジャパン（2014）、ISBN:978-4-87311-698-3

【成績評価の方法と基準】

平常点 25%
 輪講 25%
 課題 20%
 学期末レポート 30%
 を総合的に評価する。
 設定した達成目標を60%以上達成している場合に合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

2018年度より日本語および中文のテキストマイニングに取り組んでいる留学生も含めてテキストの分析への履修学生の関心を喚起したい。また履修者少数の場合にも効率よく学習できるよう常に心がける。2021年度は担当教員が国内研究を取得したので、2022年度以降はこの間の深化を盛り込んだ内容とした。2024年度もその発展的な継続を目指す。
 2023年度はTwitter (X) が研究利用に関する運営方針を制限したことでオンラインでの授業内容の実習が困難であった。この点については課題内容を変更することで対応する。

【学生が準備すべき機器他】

授業においてノートPC、プロジェクタ、インターネット接続環境を使用する。また言語Pythonを用いた機械学習の問題解決に親しんで欲しい。学習成果の記録性を確保し各自の学習内容の相互参照性を高めるため、担当教員と履修者全員が編集するWikiやポートフォリオツール等のCMSを個々の研究科目において使用する。各自の学習内容のポートフォリオ化に十分に活用して欲しい。

【その他の重要事項】

ジャンルキーワード： テキストマイニング、Web、機械学習、データサイエンス、ビッグデータ、インターネット、オンラインデータ

【担当教員の専門分野等】

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001782/profile.html>

【担当教員の業務経験】

担当教員はIT企業での研究所勤務において15年間のデジタル信号処理（特にデジタル音響、統計モデルによる音声認識）、マルチメディア処理（音楽音響、電子透かし）分野の経験がある。

【Outline (in English)】

This course provides with perspectives on the Internet in the context of multi-cultural cyberspace. It also covers well-known research methodology and basic analysis techniques for online text data as well as various types of media data on the Internet.

Grading policy is as follows:

In-class contribution: 25%
 Analysis report on reading assignment: 25%
 Homework: 20%
 Term paper: 30%

Your must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.

The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

FRI500G1 - 306 (情報学フロンティア / Frontiers of informatics 500)

多文化情報メディア論 I B

大嶋 良明

サブタイトル：行動データから知る人間社会と心理

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現代のネット社会をメディアとしての諸特性においてとらえ、文化情報学的なアプローチで分析するなかから、異文化理解に資する視点の開拓を試みる。これまで社会科学的发展の中で構築されたメディア論や人文科学分野での文化理論とも関連させた検討を試みている。とくにインターネット上のユーザの行動の分析から人間社会と心理について何が解明できるのかを学ぶ。

【到達目標】

この科目ではソーシャルメディアを最新の手法によって分析できるようになる。現代のネット社会をテキストの計量的・統計的な諸特性においてとらえる研究事例から、ネット社会に参加するユーザの行動や心理について考察できるようにする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

講義と輪講により行う。
 ・複数レポート制による輪講とパソコンを用いたインターネット上のデータの分析を試みる。
 ・各自が学習内容を相互閲覧可能な形でWebに記録する。
 ・日本語のみならず各国語文化圏のWebテキストに関する各自の話題提供を通じて、視野を拡げ問題意識を深化させる。
 ・教員と履修者全員によるオープンなディスカッションを目指す。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	Webの誕生、発展からソーシャルメディアの出現までを学ぶ。
2	Webとソーシャルメディア	知識源としてのWeb、人文社会科学におけるソーシャルメディア、Webとソーシャルメディアの社会性を学ぶ。
3	ソーシャルメディアの分類	Webとソーシャルメディアの発展形態、サービスからみたソーシャルメディアの分類を学ぶ。
4	集合知とWeb2.0	集合知とは何か、Web2.0の出現とその影響、社会の変容について学ぶ。
5	情報検索	情報検索の仕組み、クローリング、インデクシング、ランキングを学ぶ。
6	情報推薦	情報推薦の仕組み、カスタマイズ、コンテンツフィルタリング、ユーザー協調について学ぶ。
7	ネットワークとしての社会	スモールワールド実験、ネットワークの評価指標、ネットワーク生成のモデルを学ぶ。
8	ソーシャルメディアによる社会分析	実ネットワークの分析と社会イベントの検出について学ぶ。
9	ソーシャルメディアにおけるユーザの心理(1)	コミュニケーション媒体としてのソーシャルメディアの特性と利用目的とユーザー心理との関係を学ぶ。
10	ソーシャルメディアにおけるユーザの心理(2)	ソーシャルメディアがパーソナリティ、対人関係、ユーザー行動に及ぼす影響を学ぶ。
11	Web社会における印象形成	Webと現実世界での印象形成、SNSにおける印象形成について学ぶ。
12	SNSプロフィールからの印象形成	SNSプロフィール、写真画像、身体的魅力の効果などについて学ぶ。
13	ソーシャルメディアの将来	大規模データからの特徴量圧縮の手法を学ぶ
14	まとめ	学習内容を総括するディスカッションをおこない、得られた知識をまとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の授業終了後、受講生はクラス内での発表および討議について各自の発表内容、発言、担当教員のコメント、クラス内での質疑応答などを学内ネット（後述【情報機器】の項を参照のこと）にアップロードしてオンライン記録として情報共有すること。

予習復習として、テキストおよび毎回の授業で担当教員が指定する文献を熟読し、気づいた論点や疑問点については学内ネットにアップロードし授業内での発言に備えること。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

土方 嘉徳 (著)、「ソーシャルメディア論：行動データが解き明かす人間社会と心理」、サイエンス社 (2020)、ISBN-13：978-4781914862

【参考書】

全体を通じての参考書は特に指定しない。

必要に応じて提示する。領域的な理解の助けとなる参考書は以下の通り：

【多言語環境】三上喜真ほか、「言語天文台からみた世界の情報格差」、慶應義塾大学出版会 (2014)、ISBN: 978-4-7664-2178-1

【ネット社会の言語文化】Swiss, T., "Unspun," NYU Press (2001), ISBN: 978-0814797594

【ソーシャルメディアの特性】

土方 嘉徳 (著)、「Webでつながる—ソーシャルメディアと社会/心理分析」、サイエンス社 (2018)、ISBN: 978-4781914367

藤代 裕之 (著)、「ソーシャルメディア論・改訂版 つながりを再設計する」、青弓社 (2019)、ISBN-13: 978-4787234490

【成績評価の方法と基準】

平常点 25%

輪講 25%

課題 20%

学期末レポート 30%

を総合的に評価する。

設定した達成目標を60%以上達成している場合に合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

2018年度より日本語および中文のソーシャルメディア分析に取り組んでいる。留学生も含めてテキストの分析への履修学生の関心を喚起したい。また履修者少数の場合にも効率よく学習できるように常に心がける。2021年度は担当教員が国内研究を取得、2022年度以降にはこの間の深化を盛り込んだ内容とした。最新の研究動向についても理解を深めるために2023年度には内外の研究論文を参考資料としても追加した。2024年度もその発展的な継続を目指す。

【学生が準備すべき機器他】

授業においてノートPC、プロジェクタ、インターネット接続環境を使用する。また言語Pythonを用いた機械学習の問題解決に親しんで欲しい。学習成果の記録性を確保し各自の学習内容の相互参照性を高めるため、担当教員と履修者全員が編集するWikiやポートフォリオツール等のCMSを個々の研究科目において使用する。各自の学習内容のポートフォリオ化に十分に活用して欲しい。

【その他の重要事項】

ジャンルキーワード： SNS、Web、ビッグデータ、インターネット、ネット社会

【担当教員の専門分野等】

<http://kenkyu-web.i.hosei.ac.jp/Profiles/18/0001782/profile.html>

【担当教員の実務経験】

担当教員はIT企業での研究所勤務において15年間のデジタル信号処理（特にデジタル音響、統計モデルによる音声認識）、マルチメディア処理（音楽音響、電子透かし）分野の経験がある。

【Outline (in English)】

This course provides with perspectives on the Internet in the context of multi-cultural cyberspace. It focuses on social media and covers research methods and techniques to analyze user community and behavior as networked entity.

Grading policy is as follows:

In-class contribution: 25%

Analysis report on reading assignment: 25%

Homework: 20%

Term paper: 30%

Your must achieve at least 60% in the overall grade to pass for academic credit.

The average study time outside of class per week would be approximately 4 hours.

FRI500G1 - 307 (情報学フロンティア / Frontiers of informatics 500)

多文化情報メディア論Ⅱ

重定 如彦

サブタイトル：人工知能について学ぶ

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

現在、大きな社会的注目を集めている人工知能について、古典的なチェスなどのゲームを題材とするAIからはじめ、近年注目を浴びている画像を認識するディープラーニングを用いたAIなどを題材とした実習を行いながらその仕組みについて学び、人工知能ができる事、できない事について理解できるようにする。

また、人工知能が社会に与える影響などについて考察する。

【到達目標】

人工知能の基礎を学ぶ。

人工知能が社会に与える影響について自分なりの考察を行えるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

人工知能について、古典的なチェスのようなゲームにおける手法から始め、最近注目を浴びてきているディープラーニングを使った画像認識に至るまで、具体的にその仕組みについて実習を行いながら学習していく。

授業では、あらかじめ与えたテーマについて各自が発表し、その内容についての議論なども行う。

学生の理解度に応じて、実際に動作する、簡単な人工知能のプログラミングの実習などを行うことも考えている。

リアクションペーパーや課題などを課した場合、提出は学習支援システムで行う。また、そのフィードバックは必要に応じて提出後の授業の冒頭で行う予定である。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	人工知能の定義と歴史	授業の導入及び、人工知能の定義や歴史について学ぶ
2回	ゲームの人工知能	○×ゲームやチェスなど、ゲームにおける人工知能の考え方について学ぶ
3回	ゲーム木と探索	ゲームを題材とした人工知能における、古典的な手法であるゲーム木とその探索について学ぶ
4回	$\alpha\beta$ 法と、枝刈り	ゲーム木の探索を効率的に行うための手法の一つである $\alpha\beta$ 法と、ゲーム木の枝刈りについて学ぶ
5回	様々な探索手法	ゲーム木の様々な探索手法について学ぶ
6回	評価関数	状況を数値化するための手法（評価関数）について学ぶ
7回	機械学習とディープラーニング	機械学習の基礎とその種類について学ぶ
8回	ニューラルネットワーク	ディープラーニングの基礎となるニューラルネットワークについて学ぶ
9回	画像の分類	機械学習を用いた画像認識について学ぶ
10回	ディープラーニングによる学習	人工知能がディープラーニングにおいて、どのように学習していくかについて学ぶ
11回	機械学習における様々な手法	機械学習で用いられる様々な手法について学ぶ
12回	人工知能の問題点	人工知能が抱える問題点や、限界などについて学ぶ
13回	社会に与える影響	人工知能が社会に与える影響について議論する
14回	まとめ	授業で学んだことのまとめを行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

前半は教科書を指定しないが、授業で学んだことをしっかりと復習し、授業内で提示する次の授業のテーマについて予習する。

後半は教科書を読んで予習を行い、授業で学んだことをしっかりと復習する。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

「ゼロから作るDeep Learning —Pythonで学ぶディープラーニングの理論と実装」 斎藤 康毅 オライリー・ジャパン

その他、必要に応じて授業内で提示する。

【参考書】

なし。

【成績評価の方法と基準】

「配分」

平常点25%、授業内での発表や議論50%、レポート25%

「評価基準」

発表及びレポートは、読解の正確さ、発表資料またはレポートの適切さ等によって評価する。

【学生の意見等からの気づき】

特にありません。

【学生が準備すべき機器他】

特になし。

【担当教員の専門分野等】

＜専門分野＞情報科学

＜研究テーマ＞ユビキタスコンピューティング、分散OS、ユーザインタフェース＜主要研究業績＞

「デジタルミュージアムのためのキオスク型WWWブラウザ」、電子情報通信学会論文誌, vol.J85-D1, No.3, 2002年3月

「分散ハイパーメディアOS Net-BTRONにおけるハイパーメディアサービス管理機構」、情報処理学会論文誌, 2001年6月

A Distributed Hypermedia Operating System: Net-BTRON, In Proceedings of the 2000 International Conference on Communication Technology, IFIP ICCT2000/WCC2000, vol.2 (Aug.2000)

Yukihiko Shigesada, Shinsuke Kobayashi, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura, "ucR Based Interoperable Spatial Information Model for Realizing Ubiquitous Spatial Infrastructure," 34th Annual IEEE Computer Software and Application Conference (COMPSAC2010), pp.

303 - 310, July

19 - 23, 2010.

【Outline (in English)】

The objectives of this class are to learn about basics of artificial intelligence, and discuss about influence of artificial intelligence on our society.

In the first half of the class, the textbook is not specified, but students are expected to review what they have learned in the class and prepare for the next class topic to be presented in class.

In the second half, students are expected to read the textbook and review what they have learned in class. The standard preparation and review time for this class is 2 hours each.

Distribution.

Ordinary points: 25%, presentations and discussions in class: 50%, reports: 25%.

Evaluation Criteria

Presentations and reports will be evaluated on the basis of accuracy of reading, appropriateness of presentation materials and reports, etc.

LNG500G1 - 308

外国語実践研究 A (英語)

MARK E FIELD

備考 (履修条件等) : 初回授業に出席し、受講許可を得ること

その他属性 :

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. This course will explore the history of tourism and its continued expansion in a constantly globalizing world. Most graduate students in the Faculty of Intercultural Communication have some experience with International Travel and living in a Foreign Country. Study Abroad experiences like those the faculty's undergraduates experience or when foreign students do their graduate studies outside their home countries are sometimes described as Cultural or Educational Tourism.

【到達目標】

The goal of English Application is to give Post-SA students and graduate students a forum to continue to use and enhance their English Communication skills. The theme of this English Application course is to explore how the world continues to become increasingly interconnected due to better communication systems and increasing opportunities for international travel. It will also examine how more people around the world are experiencing interactions with people from different countries and cultures, i.e., directly experiencing Intercultural Communication through tourism.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

When the university's Action Policy (Conduct Guideline) Level is 2, this class will be conducted online in principle. Details will be communicated via the Learning Managing System.

In this course, we will first look at the historical development of tourism and its expanding cultural significance. Later participating students will be asked to investigate potential areas and/or sites where tourism is developing or may be developed in the future. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態 : 対面/face to face

回	テーマ	内容
Week 1	Class Orientation: Student Selection & Class Overview	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session.
Week 2	History of Tourism: World Tourism Day	Brief English lecture on UNWTO. Students take notes, followed by class discussion and question and answer session.
Week 3	History of Tourism: Global Code of Ethics for Tourism	Brief English lecture on UNWTO's Code of Ethics, students take notes, then discuss parts of the code and their practical meaning.
Week 4	History of Tourism: The Development of Mass Tourism	Brief English lecture on the technological and economic changes that made modern mass tourism possible. Students take notes, followed by class discussion, and Q&A session.
Week 5	Expanding Roles of Tourism: Student Presentations	Students make presentations on specific tourist destinations incorporating vocabulary and concepts covered in previous lectures.
Week 6	Tourist Markets: Transportation & Infrastructure	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.

Week 7	Tourist Markets: Accommodations	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 8	Tourist Markets: Attractions & Activities	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 9	Expanding Roles of Tourism: Student Presentations	Students make presentations on specific tourism related topics incorporating vocabulary and concepts covered in previous lectures.
Week 10	New Modes of Tourism: Cruises	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 11	New Modes of Tourism: Thematic Tourism	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 12	Business Constraints: The Economics of Tourism	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 13	Social Considerations: The Environmental and Cultural Impacts of Tourism	Brief English lecture. Students take notes, followed by small group discussions, and Q&A session.
Week 14	Examination/Comments	Examination/Comments

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

Students are expected to prepare weekly homework assignments at home, and review vocabulary and previous lessons at home to enhance their participation in classroom activities and discussions. The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト (教科書)】

The instructor will provide some course material early in the semester, and participating students will generate more course material as the semester progresses.

【参考書】

An English to English Dictionary is recommended. This course will also use some online English News and Study Materials.

【成績評価の方法と基準】

40% Ongoing Evaluation (Participation, Discussions, Homework, etc.)

20% Short Presentations

40% Final Examination/Term Project

Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】

Students have been happy with this course in the past and currently no student survey data is available to support major changes. Course materials are reviewed periodically and updated when necessary to maintain relevance. The instructor always welcomes comments and encourages students to make suggestions to improve the course at anytime.

【学生が準備すべき機器他】

OHC and PC presentations.

【その他の重要事項】

Class attendance is a course requirement. Students are allowed no more than three absences in the semester. The instructor reserves the right to modify this course syllabus whenever necessary.

【Outline (in English)】

English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. This course will explore the history of tourism and its continued expansion in a constantly globalizing world. Most graduate students in the Faculty of Intercultural Communication have some experience with International Travel and living in a Foreign Country. Study Abroad experiences like those the faculty's undergraduates experience or when foreign students do their graduate studies outside their home countries are sometimes described as Cultural or Educational Tourism.

LNG500G1 - 309

外国語実践研究B (英語)

大野 ロベルト

備考 (履修条件等) : 初回授業に出席し、受講許可を得ること

その他属性 :

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. Students will practice English discourse in a variety of communication modes related to the presentation and discussion of both Japanese and foreign cultural topics. Students will speak on selected topics after consultation with the professor. Following each class time presentation, the student presenter will field questions from the other students in a standard Q&A format.

【到達目標】

The goal of this course is to assist students enrolled in Graduate School to acquire a set of language skills necessary to conduct research and present its outcome in English at a suitable level.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

This class will be conducted face-to-face. However, when the university's Action Policy (Conduct Guideline) Level is 2, this class will be conducted online in principle. Details will be communicated via the Learning Managing System. During each class meeting students will give short lectures related to cultural topics followed by classroom practice of various styles of English discourse. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態 : 対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	Class Orientation: Student Selection & Class Overview	Brief English lecture on course content, students' responsibilities, and grading criteria. Students take notes, followed by short class discussion and question and answer session.
第2回	Introduction to How to Make Presentations on Culture in English	Introduction to Specialized Vocabulary, Presentation Methods
第3回	Traditional Culture: Everyday Life	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, Group Discussions, and Written Assignment
第4回	Traditional Culture: Pre-modern cityscapes	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第5回	Traditional Culture: Festivals	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第6回	Traditional Culture: Performing Arts	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第7回	Contemporary Culture: Student Life in Present-day Society	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions, and Written Assignment
第8回	Contemporary Culture: Sports as a Cultural Activity	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第9回	Contemporary Culture: The Arts	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第10回	Contemporary Culture: Language and Present-day Life	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第11回	Comparison of Cultures: Japan and Asia	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions, and Written Assignment

第12回	Comparison of Cultures: Japan and America	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第13回	Comparison of Cultures: Japan and the World	Presentation, Lecture note taking, Questions & Answers, and Group Discussions
第14回	Comments/Conclusion	Comments/Conclusion

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

Read about Japanese culture.

The standard preparation and review time for this class is four hours per week: 2 hours preparation and 2 hours review.

【テキスト (教科書)】

The instructor will provide some reference materials.

【参考書】

An English to English Dictionary is recommended.

【成績評価の方法と基準】

50% Presentation and Class Participation

50% Written Assignments

Based on the grading criteria set by the instructor, students that successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

【学生の意見等からの気づき】

Not Applicable.

【Outline (in English)】

English Application is an integrated 4 skills communication skills course with a focus on an English for Academic Purposes (EAP) or English for Specific Purposes (ESP) content area. Students will practice English discourse in a variety of communication modes related to the presentation and discussion of both Japanese and foreign cultural topics. Students will speak on selected topics after consultation with the professor. Following each class time presentation, the student presenter will field questions from the other students in a standard Q&A format.

LNG500G1 - 308

外国語実践研究A（ドイツ語）

小川 敦

備考（履修条件等）：初回授業に出席し、受講許可を得ること

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

Gymnasium等、ドイツ語圏の中等教育（中学校・高校）で用いられる地理や歴史、公民の教科書を、辞書や文法書を用いながらじっくり読むことでこれまで身に付けたドイツ語力をさらに高めます。

【到達目標】

語彙や文法の複雑なドイツ語テキストにじっくり向き合うことで今後研究にも使えるレベルの高いドイツ語を読めるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

受講者にもよりますが、グループまたは個人で一文ずつ文を音読し、解析しながら読んでいきます。また、学生と教員、学生同士で解釈に違いが出た場合はじっくり議論します。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	イントロダクション	教材や授業の進め方の確認
2	ドイツ語圏の教科書を読む・その1	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。文法の解析に特に力を入れます（1）
3	ドイツ語圏の教科書を読む・その2	第2回に続き、グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。文法の解析に特に力を入れます（2）
4	ドイツ語圏の教科書を読む・その3	第3回に続き、グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。文法の解析に特に力を入れます（3）
5	ドイツ語圏の教科書を読む・その4	第4回に続き、グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。文法の解析に特に力を入れます（4）
6	ドイツ語圏の教科書を読む・その5	第5回に続き、グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。文法の解析に特に力を入れます（5）
7	ドイツ語圏の教科書を読む・その6	第6回に続き、グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。文法の解析に特に力を入れます（6）
8	中間のまとめ、および読解の続き	前半で扱ってきたことのまとめを行います。
9	ドイツ語圏の教科書を読む・その7	グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。文法の解析に加え、語彙や解釈にも力を入れます（1）
10	ドイツ語圏の教科書を読む・その8	第9回に続き、グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。文法の解析に加え、語彙や解釈にも力を入れます（2）
11	ドイツ語圏の教科書を読む・その9	第10回に続き、グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。文法の解析に加え、語彙や解釈にも力を入れます（3）
12	ドイツ語圏の教科書を読む・その10	第11回に続き、グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。文法の解析に加え、語彙や解釈にも力を入れます（4）
13	ドイツ語圏の教科書を読む・その11	第12回に続き、グループまたは個人でテキストを読み、文を解析し理解します。文法の解析に加え、語彙や解釈にも力を入れます（5）
14	授業の最終的なまとめ	学期後半で学んだことを中心に、授業で扱ったまとめを行います。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

毎回の授業の教材や資料は、学習支援システムで配布します。適宜予習してください。

本授業の準備学習・復習時間は各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

特定の教科書は使いません。地理、歴史、政治をテーマとした教材をこちらで用意します。

【参考書】

・1回生で用いたドイツ語文法を扱った教科書
・中島悠爾・朝倉巧・平尾浩三『ドイツ文法総まとめ』白水社、2003年

【成績評価の方法と基準】

授業への積極的な参加40%、中間試験30%、期末試験30%とします。

【学生の意見等からの気づき】

受講者が自ら発言しやすい授業運営とするように努めています。

【学生が準備すべき機器他】

教材は基本的に電子データでの配布となります。授業にはスマートフォンではなくタブレットまたはPCを持参してください。

【その他の重要事項】

授業ではドイツ語の文そのものを文法的に解析する力や多様な語彙力を身につけるようにしてください。

【Outline (in English)】

【Course outline】

Students further develop their German language skills through close reading of geography and history textbooks used in secondary education in German-speaking countries, using dictionaries and grammar books.

【Learning Objectives】

Students learn to read German texts with complex vocabulary and grammar at a high level. Students will also gain an insight into the attitudes of people living in German-speaking countries.

【Learning activities outside of classroom】

Before/after each class meeting, students will be expected to spend 2 hours to understand the course content.

【Grading Criteria /Policy】

Active participation 40%

Midterm examination 30%

Final examination 30%

LNG500G1 - 308

外国語実践研究A（ロシア語）

佐藤 千登勢

備考（履修条件等）：初回授業に出席し、受講許可を得ること

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

これまで培ってきたロシア語の運用能力をさらに伸ばし維持することを第一の目的とします。ロシア語検定試験（ТРКИ）の問題に取り組んだり、ロシア語の動画を視聴したりしながらロシア語圏の文化に触れ、ロシア語の文法力を高めると同時に慣用表現、決まった口語表現を覚え、使えるようにします。

【到達目標】

ロシア語能力検定試験3級程度、またロシア語検定試験（ТРКИ）基礎レベル（A2）から第1レベル（B1）のロシア語運用能力（聴解と文法）を身につけることを目標とします。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

平易なロシア語の動画を視聴したりТРКИの問題を解きながら、文法とリスニングをバランスよく学んでいきます。動画やテキストを通してロシア語圏の文化や慣習を知ることも可能となります。発音や文法のチェックは教場で行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	今後の授業の進め方について。使用教材、視聴覚資料の確認。
第2回	О себе 1	ロシア語で、自己紹介ができるようにする。動画のリスニング。
第3回	О себе 2	ロシア語で、自己紹介ができるようにする。動画のリスニングと作文。
第4回	О себе 3	ロシア語で、自己紹介ができるようにする。動画のリスニングと作文。表現の暗記。
第5回	Мой город. Моя страна. 1	ロシア語で出身地やその特徴を言えるようにする。動画のリスニング。
第6回	Мой город. Моя страна. 2	ロシア語で出身地やその特徴を言えるようにする。動画のリスニングと作文。
第7回	Мой город. Моя страна. 3	ロシア語で出身地やその特徴を言えるようにする。動画のリスニングと作文。表現の暗記。
第8回	Мой город. Моя страна. 4	ロシアの食文化と行事について。日本の食文化と行事について作文。
第9回	Мой город. Моя страна. 5	ロシアの有名人についてリスニング。日本の有名人について作文。表現の暗記。
第10回	Моя профессия 1	ロシア語で学部や専攻、仕事について言えるようにする。動画のリスニング。
第11回	Моя профессия 2	ロシア語で学部や専攻、仕事について言えるようにする。動画のリスニングと作文。

第12回	Моя профессия 3	ロシア語で学部や専攻、仕事について言えるようにする。動画のリスニングと作文。表現の暗記。
第13回	О культуре кафе	ヨーロッパのカフェ文化についてロシア語でリスニング。
第14回	これまでのまとめと試験	これまで培ってきた会話表現を確認する試験の実施と解説。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

授業で視聴した動画内容の習得のために、1回につき1.5時間程度の復習が必要となります。

【テキスト（教科書）】

適宜、教場で配付もしくは学習支援システムを通して配付します。

【参考書】

教場、もしくは学習支援システムを通して紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点80%、小テスト20%とし、総合的に判断します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

本科目の大学院生履修者が昨年度はいなかったため、フィードバックできません。

【Outline (in English)】

● Course outline

The aim of this course is to maintain and improve listening and speaking in Russian. We would like to share the pleasure of learning more about Russian-speaking cultures and customs through the short movies in Russian.

● Learning Objectives

The purpose is to further develop and maintain the Russian language proficiency that has been cultivated so far(A2 to B1 in the CEFR) .

● Learning activities outside of classroom

It takes about 1.5 hours for class review.

● Grading Criteria /Policy

Final grade will be calculated according to the following process: Usual performance score(80 %) and quizzes(20 %). To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

LNG500G1 - 309

外国語実践研究B（ロシア語）

佐藤 千登勢

備考（履修条件等）：初回授業に出席し、受講許可を得ること

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

ソ連・ロシア映画を3編とりあげ、その作品に関する評論をロシア語で読み、これを確認するかたちで映画作品を部分的に鑑賞します。読解力、聴解力を身につけます。読解についてはTPKI第1レベル程度の力をつけることが可能となり、ロシアの日常や慣習、歴史について知識を得ることができるでしょう。

【到達目標】

読解力を向上させ、ロシア語学習に対するモチベーションをいっそう高めるために、ソ連・ロシア映画の作品論をロシア語で読み、これを確認するかたちでロシア映画の珠玉に触れます。そうすることで、TPKI第1レベルの読解力、文法力を身につけると同時に、ロシアの文化や歴史に関する知識を獲得できるでしょう。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

ソ連・ロシア映画の3つの作品に関する資料を講読します。みなさんの予習に基づいて進め、文法事項や文章の構造の説明をおこないます。作品に関する情報を把握した後、これを確認するために実際の映画作品を少しずつ鑑賞します。課題は授業で確認と解説を行うかたちでフィードバックします。ソ連映画『Человек-амфибия』（『両棲人間』）と『Завещание профессора Доуэля』（『ドゥエル教授の首』）はロシア初のSF作家アレクサンドル・ベリャエフ原作で、いま見てもなお、その批判精神に驚かされます。ロシア映画『Салют-7号』は、冷戦末期、ソ連の宇宙ステーション事故をめぐる人間ドラマの珠玉です。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	今後の授業の進め方について。資料配付。
第2回	映画 『Человек-амфибия』について1	『Человек-амфибия』の内容、鑑賞ポイントについて読解。映画の一部を鑑賞。
第3回	映画 『Человек-амфибия』について2	『Человек-амфибия』の内容、鑑賞ポイントについて読解の続き。映画の続きを鑑賞。
第4回	映画 『Человек-амфибия』について3	『Человек-амфибия』の内容、鑑賞ポイントについて読解の続き。映画の続きを鑑賞。
第5回	映画 『Человек-амфибия』について4	『Человек-амфибия』の内容、鑑賞ポイントについて読解。意見交換。映画の続きを鑑賞。
第6回	映画 『Завещание профессора Доуэля』について1	『Завещание профессора Доуэля』の内容、鑑賞ポイントについて読解の続き。意見交換。映画の一部を鑑賞。
第7回	映画 『Завещание профессора Доуэля』について2	『Завещание профессора Доуэля』の内容、鑑賞ポイントについて読解。映画の続きを鑑賞。

第8回	映画 『Завещание профессора Доуэля』について3	『Завещание профессора Доуэля』の内容、鑑賞ポイントについて読解の続き。映画の続きを鑑賞。
第9回	映画 『Завещание профессора Доуэля』について4	『Завещание профессора Доуэля』の内容、鑑賞ポイントについて読解。映画の続きを鑑賞。
第10回	映画 『Салют-7』について1	『Салют-7』の内容、鑑賞ポイントについて読解の続き。映画の一部を鑑賞。
第11回	映画 『Салют-7』について2	『Салют-7』の内容、反響について読解。映画の続きを鑑賞。
第12回	映画 『Салют-7』について3	『Салют-7』の内容、反響について読解。意見交換。映画の続きを鑑賞。
第13回	映画 『Салют-7』について4	『Салют-7』の内容、反響について読解。意見交換。映画の続きを鑑賞。
第14回	テストとまとめ	テストと解説（フィードバック）

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

ロシア映画の作品に関するテキスト読解の予習に、1回につき1.5時間程度が必要となります。

【テキスト（教科書）】

適宜、教場で配付、もしくは学習支援システムを通して配付します。

【参考書】

教場、もしくは学習支援システムを通して紹介します。

【成績評価の方法と基準】

平常点80%、小テスト20%とし、総合的に判断します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

本科目の大学院生履修者が昨年度はいなかったため、フィードバックできません。

【Outline (in English)】

● Course outline

We will pick up some Russian film works, read the text about the film in Russian, and watch some scenes of the film while checking the text. You will acquire reading comprehension and listening comprehension skills. You will be able to gain knowledge about Russian daily life, customs and history.

● Learning Objectives

Students will acquire the level of CEFR B1 of reading comprehension and grammar, as well as knowledge of Russian culture and history.

● Learning activities outside of classroom

It takes about 1.5 hours to prepare for reading comprehension of texts about the Russian movies.

● Grading Criteria /Policy

Final grade will be calculated according to the following process: Usual performance score(80%) and quizzes(20%). To pass, students must earn at least 60 points out of 100.

OTR500G1 - 401 (その他/Others 500)

Thesis Writing A

MAXIM WOOLLERTON

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

This is a writing and presentation course with a focus on enabling students to produce long-form academic writing in English. The aim of this course is to assist students in becoming effective writers who are able to express their critical thinking and organisational skills and present those ideas to others in English.

【到達目標】

The main goals are as follows:

1. Students will develop the skills to conceive and organise ideas for writing;
2. Students will develop the ability to research information to use in long-form pieces of academic writing;
3. Students will work on writing and editing long-form pieces of academic writing;
4. Students will examine ways to present their writing to an audience.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

Students' work will include the following activities:

1. Writing various kinds of academically-oriented material;
2. Asking and answering questions with a partner or in small groups about the material;
3. Listening to audio or watching video clips of presentations;
4. Reading comprehension and analysis of paragraphs, essays and presentation scripts;
5. Researching and evaluating information to use in written work;
6. Peer editing the written work of students
7. Reading and responding to the written ideas of other students in the class;
8. Doing the online homework activities related to the unit;

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回 / Week 1	Orientation	Course introduction and explanation. Getting information on students' backgrounds and needs. Level checking of students' English, Part 1 (Basics of English writing).
第 2 回 / Week 2	Level checking continued	Level checking of students' English, Part 2 (Basics of paragraph and essay writing structure)
第 3 回 / Week 3	Brainstorming, rhetorical modes and organisation	Methods of brainstorming. Topic and focus selection. Understanding and choosing rhetorical modes and organisational patterns. Creating an outline for your writing.

第 4 回 / Week 4	Research principles	Understanding different kinds of support. Checking if supporting information is reliable or not. Deciding how much and what kind of support you need.
第 5 回 / Week 5	Doing research	Finding material to use in your thesis or presentation script. Arranging the information you find to fit your outline.
第 6 回 / Week 6	Surveys	Principles of creating an effective questionnaire. Creating your own questionnaire. Conducting your survey. Evaluating survey results.
第 7 回 / Week 7	Creating reports	Understanding basic report structures. Explaining data and analysing results. Maintaining a consistent style. Writing a report of the survey you conducted previously.
第 8 回 / Week 8	Writing essays	Understanding essays and long form pieces of academic writing. Understanding what to include in the different parts of an essay. Planning an essay. Writing a first draft. Editing, peer editing and rewriting.
第 9 回 / Week 9	Writing reviews	Understanding the purpose of reviews. Selecting criteria for use in a review. Selecting language for criteria. Choosing what to review. Writing a review.
第 10 回 / Week 10	Biographies, histories and narratives	Using the past tenses when writing. Using time-sequence words. Describing personal experiences and historic events. Planning and organizing fictional narratives. Using adjectives and adverbs effectively.
第 11 回 / Week 11	Predicting the future	Using the future tenses when writing. Writing about future plans. Making predictions and expressing probability.
第 12 回 / Week 12	Demonstrations and instructions	Understanding what demonstrations/instructions are used for and why. Understanding the components of a demonstrative or instructional piece of writing. Creating your own demonstrative piece of writing.
第 13 回 / Week 13	Persuasion 1	Understanding persuasive writing. Understanding the components of a persuasive piece of writing. Understanding the relationship between opinions and supporting reasons. Fact checking persuasive writing.
第 14 回 / Week 14	Persuasion 2	Writing your own piece of persuasive writing.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students will be required to do homework, mainly in the form of completion of follow-up exercises in the 'Study Centre' website, research of the topics covered in the class and preparation for the next class. On average, the amount of work outside of class will be approximately 60 minutes per week.

【テキスト（教科書）】

This course will use extracts from two books co-authored by the teacher: (1) The English Course - Writing Book 1 (Second Edition) by Gary Ireland and Max Woollerton. Published by The English Company (2022) ISBN 978-4-9902962-9-2; (2) The English Course - Presentation Book 1 by Gary Ireland and Max Woollerton. Published by The English Company (2021) ISBN 978-4-9902962-8-5. In addition, students will receive handouts from the teacher. [IMPORTANT NOTE: It will not be a requirement to purchase the books, but it is recommended.]

【参考書】

<http://www.theenglishcourse.com/students.html>

【成績評価の方法と基準】

In-Class Performance 100% The evaluation criteria are as follows: The total percentage will be accumulated from student classwork participation scores (35%), homework scores (35%), finished written submissions (30%). There is an absence limit of 3 classes and a lateness limit of 20 minutes. Lateness in excess of 20 minutes is counted as absence. Three times late is counted as one absence. Students who exceed the limit will not pass the course. Absences and lateness will result in a reduction in points from the classwork score.

【学生の意見等からの気づき】

Not applicable.

【学生が準備すべき機器他】

Students need to bring a digital device with the ability to connect to the Internet. A laptop computer or a tablet would be the best kind of device to use.

【その他の重要事項】

In order to prevent the misuse of generative AI and provide equality all writing and speaking activities will be conducted only in class and without the use of AI. For further information about any of the points in this syllabus, please contact the instructor by email at hosei2024@woollerton.com.

【担当教員の専門分野等】

1. Education technology and English Language Teaching (ELT); 2. British social, political and economic history. A list of publications can be found here: <https://researchmap.jp/MaximJpn310887>

OTR500G1 - 402 (その他 / Others 500)

Thesis Writing B

MAXIM WOOLLERTON

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

This is a writing and presentation course with a focus on enabling students to produce long-form academic writing in English. The aim of this course is to assist students in becoming effective writers who are able to express their critical thinking and organisational skills and present those ideas to others in English.

【到達目標】

The main goals are as follows:

1. Students will develop the skills to conceive and organise ideas for writing;
2. Students will develop the ability to research information to use in long-form pieces of academic writing;
3. Students will work on writing and editing long-form pieces of academic writing;
4. Students will examine ways to present their writing to an audience.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

Students' work will include the following activities:

1. Writing various kinds of academically-oriented material;
2. Asking and answering questions with a partner or in small groups about the material;
3. Listening to audio or watching video clips of presentations;
4. Reading comprehension and analysis of paragraphs, essays and presentation scripts;
5. Researching and evaluating information to use in written work;
6. Peer editing the written work of students
7. Reading and responding to the written ideas of other students in the class;
8. Doing the online homework activities related to the unit;

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回/ Week 1	Orientation	Course introduction and explanation. Getting information on students' backgrounds and needs. Level checking of students' English, Part 1 (Basics of English writing).
第 2 回/ Week 2	Level checking continued	Level checking of students' English, Part 2 (Basics of paragraph and essay writing structure)
第 3 回/ Week 3	Brainstorming, rhetorical modes and organisation	Methods of brainstorming. Topic and focus selection. Understanding and choosing rhetorical modes and organisational patterns. Creating an outline for your writing.

第 4 回/ Week 4	Research principles	Understanding different kinds of support. Checking if supporting information is reliable or not. Deciding how much and what kind of support you need.
第 5 回/ Week 5	Doing research	Finding material to use in your thesis or presentation script. Arranging the information you find to fit your outline.
第 6 回/ Week 6	Surveys	Principles of creating an effective questionnaire. Creating your own questionnaire. Conducting your survey. Evaluating survey results.
第 7 回/ Week 7	Creating reports	Understanding basic report structures. Explaining data and analysing results. Maintaining a consistent style. Writing a report of the survey you conducted previously.
第 8 回/ Week 8	Writing essays	Understanding essays and long form pieces of academic writing. Understanding what to include in the different parts of an essay. Planning an essay. Writing a first draft. Editing, peer editing and rewriting.
第 9 回/ Week 9	Writing reviews	Understanding the purpose of reviews. Selecting criteria for use in a review. Selecting language for criteria. Choosing what to review. Writing a review.
第 10 回/ Week 10	Biographies, histories and narratives	Using the past tenses when writing. Using time-sequence words. Describing personal experiences and historic events. Planning and organizing fictional narratives. Using adjectives and adverbs effectively.
第 11 回/ Week 11	Predicting the future	Using the future tenses when writing. Writing about future plans. Making predictions and expressing probability.
第 12 回/ Week 12	Demonstrations and instructions	Understanding what demonstrations/instructions are used for and why. Understanding the components of a demonstrative or instructional piece of writing. Creating your own demonstrative piece of writing.
第 13 回/ Week 13	Persuasion 1	Understanding persuasive writing. Understanding the components of a persuasive piece of writing. Understanding the relationship between opinions and supporting reasons. Fact checking persuasive writing.
第 14 回/ Week 14	Persuasion 2	Writing your own piece of persuasive writing.

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

Students will be required to do homework, mainly in the form of completion of follow-up exercises in the 'Study Centre' website, research of the topics covered in the class and preparation for the next class. On average, the amount of work outside of class will be approximately 60 minutes per week.

【テキスト（教科書）】

This course will use extracts from two books co-authored by the teacher: (1) The English Course - Writing Book 1 (Second Edition) by Gary Ireland and Max Woollerton. Published by The English Company (2022) ISBN 978-4-9902962-9-2; (2) The English Course - Presentation Book 1 by Gary Ireland and Max Woollerton. Published by The English Company (2021) ISBN 978-4-9902962-8-5. In addition, students will receive handouts from the teacher. [IMPORTANT NOTE: It will not be a requirement to purchase the books, but it is recommended.]

【参考書】

<http://www.theenglishcourse.com/students.html>

【成績評価の方法と基準】

In-Class Performance 100% The evaluation criteria are as follows: The total percentage will be accumulated from student classwork participation scores (35%), homework scores (35%), finished written submissions (30%). There is an absence limit of 3 classes and a lateness limit of 20 minutes. Lateness in excess of 20 minutes is counted as absence. Three times late is counted as one absence. Students who exceed the limit will not pass the course. Absences and lateness will result in a reduction in points from the classwork score.

【学生の意見等からの気づき】

Not applicable.

【学生が準備すべき機器他】

Students need to bring a digital device with the ability to connect to the Internet. A laptop computer or a tablet would be the best kind of device to use.

【その他の重要事項】

In order to prevent the misuse of generative AI and provide equality all writing and speaking activities will be conducted only in class and without the use of AI. For further information about any of the points in this syllabus, please contact the instructor by email at hosei2024@woollerton.com.

【担当教員の専門分野等】

1. Education technology and English Language Teaching (ELT); 2. British social, political and economic history. A list of publications can be found here: <https://researchmap.jp/MaximJpn310887>

OTR500G1 - 403 (その他 / Others 500)

Oral Presentation

MARK E FIELD

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

Good communication skills are necessary for anyone wanting to work in an international environment. This course is for students with a strong desire to improve their English language presentation skills. The course will focus on helping students talk about their current research theme in English and acquiring the language skills used in Oral Presentations given in English.

【到達目標】

The goal of the course is to develop students' communications skills and confidence as public speakers. Course content will include listening and vocabulary development, as well as extensive practice in using spoken English as a presentation tool. The main theme of students' presentations will be based on their current research interests.

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

When the university's Action Policy (Conduct Guideline) Level is 2, this class will be conducted online in principle. Details will be communicated via the Learning Managing System.

The instructor's roles will be that of a co-communicator, facilitator, guide and helper. Students will be expected to actively participate in classroom activities, prepare weekly homework assignments, and review and practice at home for in-class presentations. Students will receive feedback and comments on homework assignments and in class activities throughout the term.

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	Class Orientation:	Presentations and Speeches: What is the Difference?
2回	Structure:	The Types of Language Used in an Oral Presentation
3回	Presentation #1:	Presenting Your Background & Research Interests
4回	Learning Strategy:	Assessing Your Skills
5回	Types of Communication:	Thinking About and Using Visual Aids Part I
6回	Presentation #2:	Introducing Geographical Locations
7回	Expanding Discourse:	Exchanging Information
8回	Reflective Communication:	Planning Your Presentation
9回	Presentation #3:	Presenting Books and Research Material
10回	Types of Communication:	Thinking About and Using Visual Aids Part II
11回	Expanding Discourse:	Controlling Your Presentation Environment
12回	Putting It All Together:	Talking About Main Points
13回	Putting It All Together:	Clearing up Confusing Ideas
14回	Final Assessment:	Presentation of Your Research Theme

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

University guidelines suggest preparation and review are around 4 hours a week for a two-credit course and around an hour a week for a one-credit course.

Students are expected to prepare weekly homework assignments at home, and review lessons at home to enhance their participation in classroom activities and discussions. Effective presentations depend on sufficient preparation and practice, so students will need to prepare and practice outside of class before giving their in-class presentations.

本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト (教科書)】

The instructor will provide some reading materials related to Oral Presentation Skills.

【参考書】

Students will be expected to bring in reading materials related to their current research interests.

【成績評価の方法と基準】

30% On-going Evaluation participation, discussions etc.

20% Homework

50% In-class Presentations

** Class attendance is a course requirement.

Students are allowed no more than three absences in the academic semester.

【学生の意見等からの気づき】

Previous students were happy with this course and currently no data is available to support changing it. However, the instructor always welcomes comments and encourages students to make suggestions to improve the course at anytime.

【学生が準備すべき機器他】

We will use some OHC (Over Head Camera) and/or PC (Personal Computer) equipment to Present Visual Aids.

【その他の重要事項】

The Instructor Reserves the Right to change or alter this syllabus as needed.

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>

異文化間コミュニケーション、西洋思想史、経済学、言語学

<研究テーマ>

文化の変化と西洋思想の進化

<主要研究業績>

国際線の代わりとなるスロートラベルは存在するか？

"Is There a 'Slow Travel' Alternative to Intercontinental Flight?" 異文化 13, 117-182, 2012/04

ピネチェト政治後のチリにおける文化的ヒーローの発見 "Discovering a Cultural Hero in Post-Pinochet" 異文化 9, 113-166, 2008/04

Communication, Culture, Diffusion and Education: The Complexity of Intercultural Communication, Learning from the Past and Looking to the Future 法政大学 教養部紀要 111/外国語学 外国文学, 141-166, 2000/02

SOS500G1 - 405 (その他の社会科学 / Social science 500)

国際協力論

松本 悟

サブタイトル：協力とは何かを考える

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

この授業では国際協力を文化の視点から考える。文化とは「体系的な生きるための工夫」(クラックホーン)であり、協力を必要とする背景(貧困、災害、紛争など)及び協力そのものが特定集団に内在する文化によって影響を受けると同時に文化に影響を与えている。いくつかのキーワードを手がかりに文献を丁寧に読み解きながら、国際協力のあり方を考える。

【到達目標】

- (1) 授業で取り上げる概念や術語について理解できる。
- (2) 国際協力を国際文化の視点から論じることができる。
- (3) 当該分野の文献を正しく理解し、分析的な発表ができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

- (1) 履修者全員が事前課題文献(20頁程度を想定)を熟読し、①「この文献から重要だと考えた点」を3つ程度とそう考えた理由、②そこから導いた論点(履修者同士で議論したい点)を発表する。
- (2) (1)を共有した上で、履修者の間でその日議論したい点を絞り(全ての論点でもよい)議論する。
- (3) 必要に応じて教員が補足授業を行う。
- (4) 最後の3回は履修者自身が事前課題文献を提示し、それに基づいて授業を運営する。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業の説明、受講者の関心の共有に基づき、必要に応じて課題文献を変更する
第2回	国際協力と文化	国際協力とは何か、文化とは何か、国際協力を国際文化の視点で捉えるとはどういうことか、考える
第3回	協力は善意か? ①助け る義務	困っている人がいたら助けなければならないのか、倫理学の文献をもとに議論する
第4回	協力は善意か? ②贈与 と交換	協力は何らかの見返りを期待しているから行うのか、贈与論の文献をもとに議論する
第5回	協力は善意か? ③拒否 される支援	善意の協力が拒否される現象をどう考えればいいのか、緊急援助の文献をもとに議論する
第6回	古典が語る協力①分業	手分けをして何かを行うことは社会をどう変えたのか、経済学の文献をもとに議論する
第7回	古典が語る協力②人口	貧しい人を助けるのは当たり前なのか、経済学の文献をもとに議論する
第8回	古典が語る協力③貧困	物質的な豊かさは精神的豊かさに優先するのだろうか、明治時代に書かれた文献をもとに議論する
第9回	協力の言説①ニーズ	Needs(必要)とWants(欲求)は何が違うのか、政治哲学の文献をもとに議論する
第10回	協力の言説②参加	ボトムアップ(人々の参加)型の国際協力は何をもたらしているのか、開発学の文献をもとに議論する
第11回	協力の言説③改善	より良くなることを目指した協力の意味を権力論の文献をもとに議論する
第12回	履修者による授業①	第12回から第14回は履修者が事前課題文献を提示し、それに基づいて授業を運営する。
第13回	履修者による授業②	第12回から第14回は履修者が事前課題文献を提示し、それに基づいて授業を運営する。
第14回	履修者による授業③	第12回から第14回は履修者が事前課題文献を提示し、それに基づいて授業を運営する。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

- ・課題文献は時間をかけて読み、内容を十分理解したうえで事前課題に取り組むこと。
- ・毎回の授業で学んだことを短く学習支援システムに投稿すること。
- ・本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とする。

【テキスト(教科書)】

特になし。

【参考書】

課題文献は最初の授業で示す。

【成績評価の方法と基準】

- (1) 事前課題・発表60%(文献の正しい理解、説得力のある論点の抽出)
- (2) 平常20%(授業後課題)
- (3) 授業運営20%(課題文献の提示、授業のファシリテーション)

【学生の意見等からの気づき】

2023年度に試行的に行った「学生自身が授業科目に沿った課題文献を提示して進めるやり方」は、学生にとって意外な発見があると高評価を受けたので継続する。

【学生が準備すべき機器他】

Hoppiiを利用できるようにしておくこと。

【その他の重要事項】

履修者の関心によって、授業内容や課題文献を変更することがある。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際開発研究

<研究テーマ>影響評価、国際組織、開発援助、NGO

<主要研究業績>

『調査と権力』(単著、東大出版会、2014年)

『NGOと世界銀行』(共編著、ミネルヴァ書房、2012年)

『人々の資源論』(共著、明石書店、2008年9月)

『シリーズ国際開発 生活と開発』(共著、日本評論社、2005年9月)

【Outline (in English)】

【Course outline】

This course aims to enable students to understand and analyze international development cooperation from the aspects of "culture". It includes the background which requires international cultural cooperation, the impacts of international cooperation on culture and the impacts of culture on international cooperation.

【Learning Objectives】

By the end of the course, students should be able to do the following:

- 1) to explain the concept of the technical terms covered at the class
- 2) to discuss international development cooperation from the viewpoints of intercultural communication.
- 3) to read and analyze the relevant literatures critically.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students will be expected to have read the relevant literature assigned, and after the class, students will be expected to have completed the required assignments. Your study time will be more than four hours for a class.

【Grading Criteria / Policy】

Your overall grade in the class will be decided based on the following

- 1) Extent of understanding about the assigned literature including the presentation based on your reading: 60%
- 2) Short reports on your own research: 20%
- 3) In class contribution: 20%

POL500G1 - 406 (政治学 / Politics 500)

国際人権論

藤岡 美恵子

サブタイトル：マイノリティの視点から考える人間の尊厳

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

人権は現代世界で常に重要な問題として扱われてきた。その保障は国際的に普遍的な課題として認識されており、何よりも、社会的に周縁化されてきた人々が自らの人間の尊厳を回復するための重要な手立てとして活用してきたのが人権であった。人権保障制度の発展は、そうした周縁化された立場の人々の尊厳を求める運動を契機に発展してきたと言ってもよい。

しかし近代の国民国家体制とともに生まれた人権思想と制度は、その枠組みの中で排除や搾取の対象となってきた集団（先住民族、マイノリティ、移民）の尊厳を守るためには不十分、もしくは根源的な矛盾をはらむという課題に直面している。それに関係するのが植民地主義の継続である。植民地主義が終焉するどころか、新たな形態で継続しているという認識が広く支持されるようになってきている現在、近代の人権保障の思想と制度が植民地主義の観点から再考されるようになってきている。この課題は、ヘイトスピーチの台頭という重大な挑戦に直面する日本社会にとっても、きわめて重要な課題である。

本授業では、国際人権保障体制の発展を踏まえた上で、それが日本を含め世界のマイノリティや先住民族の人権にどのような影響をもたらしたのかを考察し、現代世界が直面する人権をめぐる危機を人種主義と植民地主義をキーワードに考えていく。とくに現代日本におけるレイシズムと多文化主義に焦点をあてる。

人権がともすれば「思いやり」の問題として考えられがちな日本において、人権が差別され周縁化されてきた集団による公正と尊厳を求める運動を契機に発展してきたことを理解することは、今後の日本社会の在り方を考えて行く上で意義が多い。どうすればあらゆる人々の尊厳を保障することができるのかを、人権を侵害されてきた／いる人々の立場から考える思考態度を身につけ、人権をめぐる生じている国際的な課題について批判的な理解・思考能力を養う。

【到達目標】

国際的な人権保障の体制や考え方がどのように進展してきたかを踏まえた上で、それが国内の人権保障とどのように関係しているかを理解し、20世紀終盤から21世紀にかけての国際秩序の変容の中で、人権の保障という課題がどのような矛盾や問題を抱えているのかを、植民地主義と人種主義というキーワードを使って整理し、説明できるようになる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

基本的に対面授業とするが、新型コロナ感染状況によってはオンライン授業に切り替えることもある。各回の指定テキストの報告発表と討論で進める。期末に小論文形式の試験を行う。初回授業を含め、授業参加の方法、各種お知らせは学習支援システムで通知する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	イントロダクション	授業内容・授業計画の説明。 ●日本における人権に関する認識：ヘイトスピーチ、Black Lives Matter、#MeTooを手がかりに
第2回	国際人権の発展と現在	国際人権の起源と発展の跡をたどり現在の課題を知る。 【テキスト】阿部（2010）「国際法への眼差し——序にかえて」

第3回	変容する世界と国際人権 【テキスト】阿部（2010）第1章「人間」の終焉	冷戦終結と9・11以降、「テロリズム」という記号が動員される中での人権の後退と新たな問題を考える
第4回	人権と「文明化の使命」 【テキスト】阿部（2010）第2章「愚かしき暴力と、国際人権の物語」	植民地主義の観点から国際人権を捉えなおし、現在の「南北問題」との関係を考える
第5回	ヘイトスピーチの被害と人権 【テキスト】朴「京都朝鮮学校襲撃事件」、鄭「ヘイトスピーチ被害の非対称性」	近年問題になっているヘイトスピーチがどのような被害をもたらすのかを理解する。
第6回	ヘイトスピーチへの対応 【テキスト】阿部（2019）「国際人権法によるヘイトスピーチの規制」、中村「ヘイトスピーチの修復的アプローチを考える」	ヘイトスピーチに対して国際人権法がどう規制しているか、またヘイトスピーチを乗り越える一つの方法としての修復的アプローチを考える。
第7回	ナショナリズムとレイシズム 【テキスト】河合「日常実践としてのナショナリズムと人種主義の交錯——東アジア系市民の経験から」	日本においてナショナリズムとレイシズムがどう関係し合っているのかを考える。
第8回	シティズンシップとレイシズム 【テキスト】梁「シティズンシップに潜むレイシズム」	シティズンシップとレイシズムがどのような関係にあるのか、日本の市民権制度・入管制度を取り上げて考える
第9回	植民地主義と先住民族の自決権 【テキスト】上村（2015）「第3章 近代国家日本と「北海道」「沖縄」の植民地化」	日本によるアイヌ・沖縄への植民地支配の歴史と先住民族の自決権を理解する。
第10回	先住民族の権利に関わる世界的動向と日本の先住民族の運動の国際的展開 【テキスト】上村（2018）「声を上げた日本の先住民族」、宮里「差別主義と民族主義の清算」	先住民族の権利を求める世界的な動向が日本の先住民族にどう影響し、日本社会にどのようなインパクトをもたらしているかを考える。
第11回	植民地主義の克服と「多文化共生」論 【テキスト】藤岡「第1章 植民地主義の克服と「多文化共生」論」	北朝鮮パッシングを手がかりに、日本の「多文化共生」論と植民地主義の克服という課題の関係を考える。
第12回	「多文化共生」におけるマジョリティとマイノリティ 【テキスト】高谷「移民・多様性・民主主義——誰による、誰にとっての多文化共生か」、塩原「多文化共生がヘイトを超えるために」	「多文化共生」政策が移民、マイノリティへのレイシズムをなくすことにつながるのかを考える。
第13回	多文化主義と人権の未来 【テキスト】阿部（2010）第4章「要塞の中の多民族共生／多文化主義」	EUを例に多文化主義を標榜する社会における新たな排除の問題を考える。
第14回	まとめ／期末試験講評	授業のまとめと期末試験講評を行う

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

指定テキストを事前に読み、報告者に指定された回は要約を作成し授業当日に発表する。毎回、授業でのディスカッションに備えて準備を行う。本授業の準備時間は各4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

★——指定書 要購入。その他はプリントを配布

- ①★阿部浩己『国際法の暴力を超えて』岩波書店、2010年（「序に変えて」、第1章、第2章、第4章）
- ②阿部浩己「国際人権法によるヘイトスピーチの規制」法学セミナー編集部『別冊法学セミナー ヘイトスピーチに立ち向かう』日本評論社、2019年
- ③上村英明『新・先住民族の「近代史」：植民地主義と新自由主義の起源を問う』平凡社、2015年（第4章「日本と「北海道」「沖縄」の植民地化」、第5章「「尖閣諸島」問題と琉球民族の領土的権利」）
- ④上村英明「声を上げた日本の先住民族」深山直子・丸山淳子・木村真希子編『先住民からみる現代世界——わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』昭和堂、2018年
- ⑤河合優子「日常の実践としてのナショナリズムと人種主義の交錯——東アジア系市民の経験から」河合優子編『交錯する多文化社会——異文化コミュニケーションを捉え直す』ナカニシヤ出版、2016年
- ⑥塩原良和「多文化共生がヘイトを超えるために」岩渕功一編『多様性との対話——ダイバーシティ推進が見えなくするもの』青弓社、2021年
- ⑦高谷幸「移民・多様性・民主主義——誰による、誰にとっての多文化共生か」岩渕功一編『多様性との対話——ダイバーシティ推進が見えなくするもの』青弓社、2021年
- ⑧鄭 映恵「ヘイトスピーチ被害の非対称性」法学セミナー編集部『別冊法学セミナー ヘイトスピーチとは何か』日本評論社、2019年
- ⑨中村一成「ヘイトクライムの修復的アプローチを考える」法学セミナー編集部『別冊法学セミナー ヘイトスピーチに立ち向かう』日本評論社、2019年
- ⑩朴 貞任「京都朝鮮学校襲撃事件」法学セミナー編集部『別冊法学セミナー ヘイトスピーチとは何か』日本評論社、2019年
- ⑪藤岡美恵子「第1章 植民地主義の克服と「多文化共生」論」中野憲志編『制裁論を超えて——朝鮮半島と日本の〈平和〉を紡ぐ』新評論、2007年
- ⑫宮里護佐丸「差別主義と民族主義の清算」深山直子・丸山淳子・木村真希子編『先住民からみる現代世界——わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む』2018年、昭和堂
- ⑬梁 英聖「シティズンシップに潜むレイシズム」『思想』2021年9月号

【参考書】

- ①岩崎稔他『継続する植民地主義—ジェンダー/民族/人種/階級』青弓社、2005年
- ②植木哲也『植民地の記憶——アイヌ差別と学問の責任』緑風出版、2015年
- ③岡和田晃／マーク・ウィンチェスター『アイヌ民族否定論に抗する』河出書房新社、2015年
- ④エイミー・ガットマン編『マルチカルチュラルイズム』岩波書店、1996年
- ⑤小森陽一『ポストコロナリアル』岩波書店、2001年
- ⑥塩原良和「ネオ・リベラリズムの時代の多文化主義——オーストラリアン・マルチカルチュラルイズムの変容」三元社、2005年
- ⑦永原陽子編『「植民地責任」論—脱植民地化の比較史』青木書店、2009年
- ⑧西川長夫『〈新〉植民地主義論——グローバル化時代の植民地主義を問う』平凡社、2006年
- ⑨ガッサン・ハージ（保莉実・塩原良和訳）『ホワイト・ネイション——ネオ・ナショナリズム批判』平凡社、2003年
- ⑩バンセル、N.ほか『植民地共和国フランス』岩波書店、2011年
- ⑪樋口直人『日本型排外主義—在特会・外国人参政権・東アジア地政学』名古屋大学出版会、2014年
- ⑫ミシェル・ヴィヴィオルカ『レイシズムの変貌：グローバル化がまねいた社会の人種化、文化の断片化』明石書店、2007年
- ⑬ジョージ・M. フレドリクソン『人種主義の歴史』みすず書房、2009年
- ⑭前田朗『ヘイト・クライム』三一書房労働組合、2010年
- ⑮松島泰勝『琉球 奪われた骨——遺骨に刻まれた植民地主義』岩波書店、2018年
- ⑯アルバール・メンミ『人種差別』法政大学出版局、1996年
- ⑰テッサ・モーリス＝鈴木『辺境から眺める——アイヌが経験する近代』みすず書房、2000年
- ⑱梁英聖『日本型ヘイトスピーチとは何か』影書房、2016年

【成績評価の方法と基準】

- ・平常点50%（発表、討論への参加）、期末試験50%
- ・発表については、指定テキストの内容の報告だけでなく、討論のための論点の提示を求める。
- ・討論への参加については、内容の理解に加え、討論の進行を助け、他の参加を促すような積極的な疑問の提示、意見表明を評価する。

・期末試験は、予め提示する2、3題の質問に対する小論文形式で行う。答案の提出日は第13回授業と第14回授業の間で後日指定（学習支援システムを通じて提出）。授業の到達目標の達成度を基準に評価する。

【学生の意見等からの気づき】

本授業を受講する以前は人権問題についてよく知らなかったため、当初は内容を理解するのに精一杯だったが、次第に知的関心を刺激されるようになり、授業をとってよかったという受講生の意見を踏まえ、できるだけ具体的な問題を取り上げて関心をもてるように工夫した。

【学生が準備すべき機器他】

課題の提出、学習支援システムの利用にパソコン等が必要。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>国際人権論（マイノリティ、先住民族の権利）、NGO論、植民

地主義と平和

<研究テーマ>人種主義と植民地主義

<主要研究業績>'Condemning J. Mark Ramseyer's Paper "On the Invention of Identity Politics: The Buraku Outcasts in Japan"' in *The Asia-Pacific Journal: Japan Focus*, Volume 19, Issue 9, Number 8, 2021.

『脱「国際協力」——開発と平和構築を超えて』（新評論、2011年）

『資源開発への異議申し立てと先住民族の自己決定権』（東日本部落解放研究所発行『明日を拓く』第80号、2009年）、

『多文化共生論』（『制裁論を超えて——朝鮮半島と日本の〈平和〉を紡ぐ』新評論、2007年）

【Outline (in English)】

【Course outline】

The guarantee of human rights has been considered an issue of universal importance in the modern world. More importantly, socially marginalized groups of people have used human rights to restore their human dignity, contributing to the development of the international human rights systems.

However, the ideas and systems of human rights which were born along with the development of the modern nation-state system now face serious challenges: one is that they are insufficient in, or in fundamental contradictions with, the protection of human dignity of groups of people who have been excluded or exploited in that system. One factor behind it is the continuation of colonialism. The human rights protection systems are now being reconsidered from that perspective.

In this course, the participants will learn how the international human rights protection systems have developed and what impact they have brought to minority and indigenous groups in Japan and elsewhere. They will consider the challenges posed to the international human rights protection systems using racism and colonialism as key concepts. A particular focus will be put on the issues of racism and multiculturalism in present-day Japan. The course provides the participants an opportunity to acquire critical thinking abilities on the issues of human rights and the perspective of the marginalized/discriminated against in thinking about how human rights can be respected for all.

【Learning Objectives】

At the end of the course, students are expected to develop an understanding of how the international human rights system has developed and how it is related to the protection of human rights within national borders, what kind of challenges the world is facing in the changes of the international order since the end of the 20th century and how those issues can be explained with the keywords of colonialism and racism.

【Learning activities outside of classroom】

Before each class meeting, students are expected to have read the relevant text, prepare a summary (when designated) and be ready for class discussion. Your required study time is at least four hours for each class meeting.

【Grading Criteria /Policy】

Grading will be decided based on the following.

Term-end examination: 50%; In-class contribution: 50%

FRI500G1 - 407 (情報学フロンティア / Frontiers of informatics 500)

多文化情報ネットワーク論A

和泉 順子

サブタイトル：インターネットの社会性と情報文化

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

情報科学、特にインターネットに代表されるコンピュータネットワーク技術は広く深く発展し、情報基盤として様々な分野で必要不可欠なものとなっています。これらが、もともとどのような理由で設計された技術なのか、それが時代とともにどのように変わって来たのかを学び、インターネットの社会基盤としての役割や問題を討議します。

【到達目標】

この科目の到達目標は、コンピュータネットワークの仕組みの大枠を理解し、仮想空間を流通する情報の特性や理解を深めることです。知識を蓄積するだけでなく、自身のネットワークおよび関連情報技術の利用や社会性について論理的に考え討議することを目指します。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

多文化情報ネットワーク論Aでは、コンピュータネットワークの設計と基本的な仕組みを理解することにより、ネットワーク上での情報流通や形式を学ぶ。また、関連技術がどのように使われることを想定して設計され淘汰されてきたか、普段利用している情報サービスが技術的にどの程度安全性を確保されているものか、どの程度リスクがあるものかを、学生自身の使い方に鑑みながら確認していく。

なお、履修する学生の所属研究科や学習状況に応じて、講義内容は適宜変更する。

本講義は対面授業を基本とするが、状況に応じてオンライン授業に切り替える場合もある。学期途中での授業形態の変更やそれにもなう各回の授業計画の修正については、学習支援システム（Hoppii）でその都度提示する。履修予定者は、必ず初回授業日の前日までに学習支援システムで本科目を仮登録し、初回授業に参加すること。

課題等の提出・フィードバックは、授業内および学習支援システムを通じて行う。

授業に関する質疑応答については学習支援システムの掲示板機能を活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	講義概要の説明	この講義の目的や進め方を説明し、参照予定の文献を紹介する。
第2回	身近な情報ネットワーク技術	普段利用している情報ネットワーク関連技術を考え、動作環境や仕組みを確認する。
第3回	コンピュータが情報を2進数で扱う理由、情報理論基礎	情報科学の基礎として、2進数の復習とネットワーク技術で使われる主なアルゴリズムを学ぶ。
第4回	情報ネットワークとインターネット	コンピュータネットワークの形式とインターネットの特色を学ぶ。
第5回	インターネットの歴史、OSI参照モデル	インターネットの開発の理由や歴史、OSI参照モデルを学ぶ。
第6回	インターネット関連技術の動向（1）	インターネットアーキテクチャの内、物理層およびデータリンク層の仕組みを学ぶ。
第7回	インターネット関連技術の動向（2）	インターネットアーキテクチャの内、ネットワーク層の仕組みを学ぶ。
第8回	情報科学技術と仕事（1）	情報科学技術が社会に普及したことにより生じる事象（利益、問題点）を仕事の観点から論じる。
第9回	情報科学技術と仕事（2）	前回議論した事象から、今後対策や対応が必要になる事象を技術的・社会的、両方の側面から論じる。
第10回	情報科学技術と安全性（1）	情報科学技術が社会に普及したことにより生じる事象（利益、問題点）を個人または組織に対するセキュリティの観点から論じる。
第11回	情報科学技術と安全性（2）	前回議論した事象から、今後対策や対応が必要になる事象を技術的・社会的、両方の側面から論じる。
第12回	個人情報とプライバシー	保護されるべき個人情報やプライバシーとは、どのようなものかを学び、議論する。

第13回 情報セキュリティとネットワークセキュリティ 主な情報セキュリティ技術を学び、それがインターネットにどのように利用されているかを学ぶ。

第14回 授業のまとめ 授業での議論を振り返り、まとめる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義内容で理解が難しかった部分を補うための自主学習（復習）が必要です。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要な文献は適宜授業内で案内します。

【参考書】

必要な文献は適宜授業内で案内します。

【成績評価の方法と基準】

課題・レポート（30%）、議論・平常点（20%）、最終レポート（50%）で総合的に評価します。

コンピュータネットワークの仕組みの概略と現在のインターネットの利用形態に関連する技術への理解度をレポートで評価し、それに対する授業中の議論を出席および授業参加として評価します。

この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

履修者の理解度に合わせて学習進度や項目を柔軟に変更する。

【学生が準備すべき機器他】

オンライン併用授業の場合は、各自で学習環境を整える必要がある。授業内容の議論や補足はZoomあるいはWebexを用いる。また、毎回の授業資料と課題は学習支援システム（Hoppii）を利用して配布・提示する。授業時間内にこれらに接続可能なネットワーク環境も必要である。

【その他の重要事項】

大学の行動方針レベルが2となった場合、この授業は原則としてオンラインで行う。詳細は学習支援システムで伝達する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域> インターネット上の情報流通に関する研究
<研究テーマ> 主にITSや移動体通信などが扱う実空間情報を軸にしたインターネット上の情報流通と、情報技術の普及や社会性に関する問題
<主要研究業績>

"A Study of Service Architecture for Probe Vehicle Information Systems Including Smart-phone Networks", Proceedings of 18th ITS World Congress, Oct. 2011. 他

【Outline (in English)】

(Course outline)

We will grasp the mechanism and the design philosophy of the internet roughly and discuss its role in real society.

(Learning Objectives)

- To understand the general framework of how computer networks work.
- To develop an understanding of the characteristics and understanding of information circulating in virtual space.

In addition to accumulating knowledge, the course aims to encourage students to think and discuss logically about the use and social aspects of their own networks and related information technologies.

(Learning activities outside of classroom)

You will need to do some independent study (revision) to make up for any difficulties you have in understanding the lecture content.

(Grading Criteria / Policy)

Grading will be decided based on Assignments and mid-term reports (30%), in-class contribution(20%), and term-end report (50%).

FRI500G1 - 408 (情報学フロンティア / Frontiers of informatics 500)

多文化情報ネットワーク論B

和泉 順子

サブタイトル：インターネットの社会性と情報文化

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

インターネットに代表されるコンピュータネットワーク技術の研究背景とその時代で最先端だったシステム設計を学ぶことで情報ネットワークの仕組みを大まかに掴み、今後のインターネットや他情報科学技術の使われ方について議論します。

【到達目標】

この科目では、コンピュータネットワークの仕組みの概略を理解し、現在利用されているインターネットの利用形態に関連する技術を知ると同時に、今後の通信技術の展望を考えることを目標としています。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

この科目の到達目標は、現在深く広く普及しているインターネットを始めとする情報ネットワークについて、その仕組みの概略と開発背景を掴む。その上で、情報ネットワーク技術が社会通信基盤として利用されていることに鑑み、実空間情報が仮想空間上でデジタルデータとして流通することの利便性とリスクを検討し、議論する。

全体を通して、教員と履修者全員によるオープンなディスカッションを目指し、問題意識の整理と解決のための意見交換をしていく。

なお、履修する学生の所属研究科や学習状況に応じて、講義内容は適宜変更する。

本講義は対面授業を基本とするが、状況に応じてオンライン授業に切り替える場合もある。学期途中での授業形態の変更やそれともなう各回の授業計画の修正については、学習支援システム（Hoppii）でその都度提示する。履修予定者は、必ず初回授業日の前日までに学習支援システムで本科目を仮登録し、初回授業に参加すること。

課題等の提出・フィードバックは、授業内および学習支援システムを通じて行う。

授業に関する質疑応答については学習支援システムの掲示板機能を活用する。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	講義概要の説明	この講義の目的や進め方を説明し、参照予定の文献を紹介する。
第2回	身近な情報ネットワーク技術	普段利用している情報ネットワーク関連技術を考え、動作環境や仕組みを確認する。
第3回	インターネットの歴史	インターネットの開発の理由や歴史、コンピュータネットワークの形式とインターネットの特色を学ぶ。
第4回	プロトコルとレイヤ（OSI参照モデル）	OSI参照モデル、および現状のインターネットアーキテクチャと主なプロトコルを学ぶ。
第5回	経路制御アルゴリズム	ネットワーク層で使われる主な経路制御アルゴリズムを学ぶ。
第6回	IPアドレスと名前解決	インターネットプロトコル（IP）の役割と名前解決の仕組みを学ぶ。
第7回	無線技術と移動体通信	無線通信技術の種類と変遷を学び、移動体通信技術について学ぶ。
第8回	クラウドコンピューティング	クラウドコンピューティングの仕組みを学び、利益と弊害を議論する。
第9回	インターネットの社会性	インターネットが共通通信基盤として社会的に普及したことによる利益と弊害を議論する。
第10回	日本の通信技術戦略	日本が進めてきた通信技術戦略の一部を紹介し、その効果について議論する。
第11回	個人情報とプライバシー	保護されるべき個人情報やプライバシーとは、どのようなものかを学び、議論する。
第12回	ネットワーク技術の国際標準化	情報技術の普及と戦略の一角を担う国際標準化について学ぶ。
第13回	知的財産とインターネット	知的財産権の一つである著作権を学び、国境を越えて利用されるインターネット上での振る舞いを考える。
第14回	情報ネットワークの抱える問題、授業のまとめ	情報ネットワークの将来性と問題について考える。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

講義内容で理解が難しかった部分を補うための自主学習（復習）が必要です。本授業の準備学習・復習時間は、各2時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

必要な文献は適宜授業内で案内します。

【参考書】

必要な文献は適宜授業内で案内します。

【成績評価の方法と基準】

レポートまたは小テスト（30%）、平常点（20%）、最終レポート（50%）で総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とする。

【学生の意見等からの気づき】

該当なし

【学生が準備すべき機器他】

オンライン授業、あるいはオンライン併用となった場合、ZoomやWebexを用いた講義となります。PCだけでなくWebカメラやマイクなど、授業参加のためのPCとネットワーク環境は準備してください。

【その他の重要事項】

大学の行動方針レベルが2となった場合、この授業は原則としてオンラインで行う。詳細は学習支援システムで伝達する。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>インターネット上の情報流通に関する研究
<研究テーマ> 主にITSや移動体通信などが扱う実空間情報を軸にしたインターネット上の情報流通と、情報技術の普及や社会性に関する問題
<主要研究業績>

"A Study of Service Architecture for Probe Vehicle Information Systems Including Smart-phone Networks", Proceedings of 18th ITS World Congress, Oct. 2011. 他

【Outline (in English)】

(Course outline)

We will grasp the mechanism of information communication technology roughly and discuss how future information technology is used in real society.

(Learning Objectives)

The goal of this course is to provide students with a general understanding of how computer networks work and the technologies relevant to the current forms of Internet use, and to consider the future prospects for communications technology.

(Learning activities outside of classroom)

You will need to do some independent study (revision) to make up for any difficulties you have in understanding the lecture content.

(Grading Criteria /Policy)

Grading will be decided based on Assignments and mid-term reports (30%), in-class contribution(20%), and term-end report (50%).

OTR500G1 - 501 (その他 / Others 500)

国際文化研究日本語論文演習 A

浅利 文子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語を母語としない留学生が、日本語の論理的文章を読んだり書いたりする練習を通じて日本語を読み書きする能力を拡充し、専門分野の修士論文を書くための基礎力を身につける。

【到達目標】

- ・一定分量の専門的レベルの日本語の文章の論旨を正確に読み取ることができる。
- ・一定分量の専門的レベルの日本語の文章を指定された字数で要約できる。
- ・与えられたテーマで800～1200字程度の小論文を書くことができる。
- ・自分の修士論文についてレジュメを作成し、定められた時間で口頭発表できる。
- ・専門的レベルの日本語の文章やテーマについて、日本語で自分の感想や意見を述べ、他の意見を良く理解して、議論することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

第1回の授業では、受講生に作文を書いてもらい日本語レベルを確認します。第2回では、自己紹介と修士論文のテーマについて作文し、日本語の文章力と研究テーマ等を確認します。第3回から第8回は、学術的・専門的な日本語の文章を課題文として配布し、正確に読めるよう確認した後、指示された字数で要約文を書く練習をします。提出された各人の要約文は、すべて添削して返却します。その後、課題文のテーマについて、全員が感想や意見を出し合い討議します。以上の要約練習により、文章の論理的展開の筋道を読み取ることから、論文の論理的構成の重要性を学びます。第9回から第12回は、小論文を書く練習をします。400字から始め、1200字程度の小論文を書くことを目標に練習しつつ、論理展開や段落構成の基礎を学びます。提出された小論文は、すべて添削して返却します。第13回と第14回は、必要に応じて、7月の概要発表会の準備をします。レジュメの書き方を学び、口頭発表の練習をします。学習内容・方法や難易度は、受講する学生の日本語の水準や希望等に合わせて適宜変更します。

学習支援システムを利用する際は、添削した課題に説明を加えて返却します。対面授業では、次回授業までに添削して返却し、必要に応じて説明をします。各回の授業の内容に応じて、受講生が積極的に意見交換を行う時間を設けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション 自己紹介スピーチ・作文	授業の目的と方針、学び方の説明 受講者の日本語レベル確認、受講者の希望確認
第2回	自己紹介と修士論文のテーマについて作文する	前回の作文を添削して返却、添削部分について質疑応答、受講生の修士論文のテーマを作文によって確認
第3回	課題文①	【演習1】前回の作文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文①の音読確認、要約文の書き方を講義、要約文を書き提出

第4回	課題文②	【演習2】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文①について討議、課題文②音読確認、要約文を書き提出
第5回	課題文③	【演習3】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文②について討議、課題文③音読確認、要約文を書き提出
第6回	課題文④	【演習4】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文③について討議、課題文④音読確認、要約文を書き提出
第7回	課題文⑤	【演習5】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文④について討議、課題文⑤音読確認、要約文を書き提出
第8回	課題文⑤、まとめ	【演習6】前回の要約文を添削して返却、添削部分について質疑応答、課題文⑤について討議、要約文を書くことで何が学べたか自己評価した後、感想や考えを出し合いまとめる。
第9回	小論文を書く①	【演習7】小論文のテーマ設定・論理展開・段落構成等について講義、次回の小論文テーマ指示
第10回	小論文を書く②	【演習8】小論文を書き提出
第11回	小論文を書く③	【演習9】前回の小論文を添削して返却、添削部分について質疑応答、感想・意見交換、次回の小論文テーマ指示
第12回	小論文を書く④	【演習10】小論文を書き提出
第13回	小論文を書く⑤、まとめ 概要発表会のレジュメ作成準備	【演習11】前回の小論文を添削して返却、添削部分について質疑応答、感想・意見交換、概要発表会のレジュメの書き方について講義
第14回	概要発表会の口頭発表練習	【演習12】レジュメ提出、概要発表会の口頭発表練習、感想・意見交換

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ①課題文や添削された文章を正確に音読する練習をする。
 - ②添削された文章は必ず見直し、何をどう直されたか確認する。
 - ③正確に読み、書くために、日常生活においても、つねに正確に聞き、話すことに留意する。
- 本授業の準備学習・復習時間は、各4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

『大学・大学院 留学生の日本語②作文編』アカデミック・ジャパニーズ研究会編著
ウンベルト・エコ『論文作法 調査・研究・執筆の技術と手順』而立書房

【成績評価の方法と基準】

平常点50パーセント（出席状況、発表・討議の内容や積極的姿勢）

提出物50パーセント（各回の提出物の内容の充実度）

【学生の意見等からの気づき】

- ・毎回、日本語で発表し、日本語の文章を書く機会を設けます。
- ・提出された文章は全て添削して返却し、必要に応じて説明をします。
- ・留学生の間違いやすい語法等の例を挙げ、説明します。

【学生が準備すべき機器他】

なし

【その他の重要事項】

秋学期の国際文化研究日本語論文演習Bを継続履修することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>近現代日本文学

<研究テーマ>村上春樹ほか

<主要研究業績>『村上春樹 物語の力』（翰林書房）『村上春樹 物語を生きる』（翰林書房）『村上春樹スタディーズ2008－2010』（若草書房）『村上春樹研究叢書第4輯』『村上春樹研究叢書第5輯』『村上春樹研究叢書第6輯』『村上春樹研究叢書第7輯』（日本語版）等

【Outline (in English)】

Foreign students whose mother tongue is not Japanese read logical sentences written in Japanese and write sentences in Japanese to improve their basic ability to write their own master's thesis in Japanese.

【Grading criteria】

attitude toward class 50% (attendance state, positive attitude)

assignment 50%

OTR500G1 - 502 (その他 / Others 500)

国際文化研究日本語論文演習 B

浅利 文子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語を母語としない留学生が、専門分野の論理的文章を読んだり書いたりする練習を通じて日本語を読み書きする能力を向上させ、専門分野の修士論文を書くための基礎力を拡充する。

【到達目標】

- ・専門的レベルの日本語の文章を指定された字数で要約し、口頭で発表できる。
- ・自分の修士論文のテーマに関して、4000字程度の小論文を書くことができる。
- ・専門的レベルの日本語の文章やテーマについて議論できる。（発言者ひとりひとりの意見を正確に聴き取り、テーマの方向性に沿った論理的な意見を述べたり問題点を指摘したりして、テーマを深化し発展させることができる）

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

第1回の授業で、各受講生は自分の研究テーマについてスピーチします。第2回の授業では、全員が自分の研究テーマについてまとめた作文を提出し、添削を受けた後、音読発表します。第3回から第7回までは、各受講生が自分の研究テーマに沿った書籍や文献から一定の長さの日本語の文章を抜粋して全員に配布し、その要約を書いて発表し、全員でその内容や研究テーマとの関連性について感想・意見を出し合います。第8回から第13回は、各自の研究テーマに沿った小論文を書きます。1200字程度から書き始め、第13回では、4000字程度の小論文を完成させます。第14回は、完成した4000字の小論文を口頭発表し、相互評価をします。提出された要約文・小論文は、すべて添削して返却します。学習内容・方法や速度・難易度は、受講生の水準に合わせて適宜変更します。学習支援システムを利用する際は、添削した課題に説明を加えて返却します。対面授業では、次回授業までに添削して返却し、必要に応じて説明をします。各回の授業の内容に応じて、受講生が積極的に意見交換を行う時間を設けます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	演習の目的と方針の説明、受講者の日本語レベル、研究テーマ、受講者の希望確認
第2回	作文「私の研究テーマ」	【演習1】作文後、添削された作文を各人が音読して発表し、添削内容について質疑応答
第3回	課題文①	【演習2】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文①について討議
第4回	課題文②	【演習3】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文②について討議
第5回	課題文③	【演習4】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文③について討議
第6回	課題文④	【演習5】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文④について討議

第7回	課題文⑤	【演習6】要約文を書いて提出、要約文の添削後、添削内容を確認し、課題文⑤について討議
第8回	小論文を書く①	【演習7】小論文を書く際のテーマ設定・論理展開・段落設定等について講義
第9回	小論文を書く②	【演習8】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第10回	小論文を書く③	【演習9】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第11回	小論文を書く④	【演習10】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第12回	小論文を書く⑤	【演習11】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第13回	小論文を書く⑥	【演習12】小論文提出、口頭発表、添削、相互評価、感想・意見交換
第14回	小論文を書く⑦（まとめ）	【演習13】4000字の小論文を口頭発表・相互評価

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

- ①課題文や添削された文章を正確に音読する練習をする。
 - ②添削された文章は必ず見直し、何をどう直されたかを確認し、正確に音読できるよう練習する。
 - ③正確に読み、書くために、日常生活においても、つねに正確に聞き、話すことに留意する。
- 本授業の準備学習・復習時間は、各4時間を標準とする。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

『大学・大学院 留学生の日本語②作文編』アカデミック・ジャパニーズ研究会編著
ウンベルト・エコ『論文作法 調査・研究・執筆の技術と手順』而立書房

【成績評価の方法と基準】

平常点50パーセント（出席状況、発表・討議の内容や積極的姿勢）

提出物50パーセント（各回の提出物の内容の充実度）

【学生の意見等からの気づき】

- ・毎回、日本語の論理的文章を書き、日本語で発表する機会を設けます。
- ・提出された文章は全て添削して返却します。
- ・留学生の間違いやすい語法等の例を挙げ、説明します。

【学生が準備すべき機器他】

各自、パソコンを持参してください。

【その他の重要事項】

来年度の国際文化研究日本語論文演習Cの履修を推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>近現代日本文学
<研究テーマ>村上春樹ほか
<主要研究業績>『村上春樹 物語の力』（翰林書房）『村上春樹 物語を生きる』（翰林書房）『村上春樹 スタディーズ2008 - 2010』（若草書房）『村上春樹研究叢書第4輯』『村上春樹研究叢書第5輯』『村上春樹研究叢書第6輯』『村上春樹研究叢書第7輯』（日本語版）等

【Outline (in English)】

Foreign students whose mother tongue is not Japanese practice writing in Japanese to improve their ability to write master's thesis on each specialized field.

【Grading criteria】

attitude toward class 50% (attendance state, positive attitude) assignment 50%

OTR500G1 - 505 (その他 / Others 500)

国際文化研究日本語論文演習C

浅利 文子

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

日本語を母語としない留学生が、日本語で修士論文を書き始める準備を整え、実際に執筆しながら論文の書き方や日本語表現について学ぶ。

【到達目標】

- ・修士論文完成までのスケジュール（概要発表会・中間発表会等）を確認する。
- ・従来の修士論文の体裁（構成・分量・注の付け方・図表の入れ方・参考資料の掲載方法・文体・印字体等）を確認する。
- ・修士論文の主題と副題を決める。
- ・修士論文の構成（章立て・各章の分量・各章の内容と節の数やその分量）を決める。
- ・目次を書く。
- ・概要発表会の準備をする（レジュメの準備、口頭発表・質疑応答の練習等）
- ・修士論文の序論、あるいは第1章を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

最初の7回で修士論文を書き始めるための具体的な準備を行い、その後、実際に修士論文を書き始めます。準備の段階では、まず、今まで国際文化研究科に提出された修士論文の体裁を確認し、各自のテーマに従って修士論文の構想を具体的にまとめます。次に、7月末の概要発表会、10月末の中間発表会のレジュメの書き方を学び、口頭発表・質疑応答の練習をすることによって、修士論文の構想・テーマを具体化し深化させます。第8回からは、各自修士論文の序論あるいは第1章を書き始めます。段落と段落、節と節がそれぞれ文章としてのまとまりを持ち、論理的構成の下で互いに関連し合うことを学ぶことを目標として、一つの章を完成させることを目標とします。受講生の希望と実態に合わせて内容を変更する可能性があります。

学習支援システムを利用する場合は、添削した課題に説明を加えて返却します。対面授業では、次回授業までに添削して返却し、必要に応じて説明を加えます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	オリエンテーション	・授業の目的と内容・方針の説明 ・各受講生の修士論文のテーマと進捗状況の確認
第2回	従来の修士論文の体裁を確認する	・構成、分量、注の付け方、図表の入れ方、参考資料の掲載方法、文体、印字体等
第3回	概要発表会のレジュメの書き方	・概要発表会のレジュメの書き方について講義 ・レジュメを書く
第4回	レジュメ提出・添削	・各人のレジュメを添削 ・質疑応答
第5回	レジュメに基づいて口頭発表の練習①	・声の出し方、話し方 ・時間の使い方 ・質疑応答の対応の仕方
第6回	レジュメに基づいて口頭発表の練習② スケジュール確認	・概要発表会、中間発表会、学会発表等のスケジュールを確認

第7回	修士論文の主題・副題、論文構成を確認する	・主題と副題、章立てと分量配分を書いて提出
第8回	修士論文を書く①	・序論あるいは第1章の書いたところまで提出
第9回	修士論文を書く②	・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第10回	修士論文を書く③	・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第11回	修士論文を書く④	・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第12回	修士論文を書く⑤	・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第13回	修士論文を書く⑥	・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答
第14回	修士論文を書く⑦	・序論あるいは第1章の書いたところまで提出 ・添削、質疑応答

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

修士論文の内容については、随時指導教員から指導を受けてください。本授業の準備学習・復習時間は、各4時間を標準とします。

【テキスト（教科書）】

なし

【参考書】

『大学・大学院 留学生の日本語②作文編』アカデミック・ジャパンニーズ研究会編著
ウンベルト・エコ『論文作法 調査・研究・執筆の技術と手順』而立書房

【成績評価の方法と基準】

平常点50パーセント（出席状況、発表・討議の内容や積極的姿勢）

提出物50パーセント（各回の提出物の内容の充実度）

【学生の意見等からの気づき】

修士論文を書き始める準備をし、実際に論文を書き進めながら、論文の論理的構成や日本語表現について、逐次アドバイス・添削を受けることができます。修士論文執筆のペースメーカーとして利用できます。

【学生が準備すべき機器他】

各自パソコンを持参してください。

【その他の重要事項】

国際文化研究日本語論文演習A・B受講者が継続履修することを推奨します。

【担当教員の専門分野等】

<専門領域>近現代日本文学

<研究テーマ>村上春樹ほか

<主要研究業績>『村上春樹 物語の力』（翰林書房）『村上春樹 物語を生きる』（翰林書房）『村上春樹スタディーズ2008-2010』（若草書房）『村上春樹研究叢書第4輯』『村上春樹研究叢書第5輯』『村上春樹研究叢書第6輯』『村上春樹研究叢書第7輯』（日本語版）等

【Outline (in English)】

This class help and give some advice to foreign students whose mother tongue is not Japanese to write their master's thesis in Japanese.

【 Grading criteria】

attitude toward class 50% (attendance state, positive attitude)
assignment 50%

OTR600G1 - 503 (その他 / Others 600)

修士論文演習 A (代表シラバス)

浅川 希洋志、大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を7月の構想発表会で発表し、広くコメントを受けることを当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」と連携を図って進めていきます。履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士1年の研究成果を基に、指導教員と研究計画を練る。
2	研究計画の検討	履修者は、修士1年の研究成果を基に、引き続き指導教員と研究計画を練る。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
4	論文執筆指導②	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を引き続き検討する。
5	研究発表準備①	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について議論する。
6	研究発表準備②	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について引き続き議論する。
7	研究発表準備③	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論する。
8	研究発表準備④	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
9	研究発表準備⑤	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、引き続き指導教員と議論を重ねる。
10	研究発表準備⑥	履修者ごとに構想発表会の準備。履修者は、修士論文/リサーチペーパーの構想について指導教員と議論を重ねる。必要な場合には、発表会のリハサル等も行う。
11	研究発表会の振り返り	履修者は構想発表会を振り返りつつ、具体的な春学期の研究について指導教員と議論する。
12	論文執筆指導③	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を議論・再検討する。
13	論文執筆指導④	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を、更に議論・検討する。
14	まとめ	履修者は残された課題を抽出し、指導教員とともに、夏季休暇中の論文完成に向けた計画を立てる。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内Web等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習(2単位)では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト(教科書)】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み(30%)、構想発表会での評価(35%)、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みで(35%)、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 503 (その他 / Others 600)

修士論文演習 A

LETIZIA GUARINI

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を7月の構想発表会で発表し、広くコメントを受けることを当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」と連携を図って進めていきます。履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士1年の研究成果を基に、指導教員と研究計画を練る。
2	研究計画の検討	履修者は、修士1年の研究成果を基に、引き続き指導教員と研究計画を練る。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
4	論文執筆指導②	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を引き続き検討する。
5	研究発表準備①	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について議論する。
6	研究発表準備②	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について引き続き議論する。
7	研究発表準備③	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論する。
8	研究発表準備④	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
9	研究発表準備⑤	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、引き続き指導教員と議論を重ねる。
10	研究発表準備⑥	履修者ごとに構想発表会の準備。履修者は、修士論文/リサーチペーパーの構想について指導教員と議論を重ねる。必要な場合には、発表会のリハサル等も行う。
11	研究発表会の振り返り	履修者は構想発表会を振り返りつつ、具体的な春学期の研究について指導教員と議論する。
12	論文執筆指導③	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を議論・再検討する。
13	論文執筆指導④	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を、更に議論・検討する。
14	まとめ	履修者は残された課題を抽出し、指導教員とともに、夏季休暇中の論文完成に向けた計画を立てる。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内Web等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習 (2単位) では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト (教科書)】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み (30%)、構想発表会での評価 (35%)、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みで (35%)、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 504 (その他 / Others 600)

修士論文演習 B (代表シラバス)

浅川 希洋志、大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の中間発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士2年春学期及び夏学期中の研究成果を指導教員と共有する。
2	研究計画の検討	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を指導教員とともに検討する。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し、指導教員に提出、議論する。
4	論文執筆指導②	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを、指導教員と引き続き議論・検討する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と検討する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と更に詳細に議論する。
7	研究発表準備③	履修者は、指導教員とともに中間発表会での発表内容の目処を立てる。
8	研究発表準備④	履修者は、指導教員とともに中間発表会の具体的な発表内容について検討する。
9	研究発表準備⑤	履修者は、中間発表会の具体的内容を指導教員に提示し、確認する。必要な場合は、発表会のリハーサルも行う。
10	研究発表会の振り返り	履修者は、中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し、指導教員と議論・確認する。
11	論文執筆指導③	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの初稿を指導教員に提出し、それをもとに指導教員と議論する。
12	論文執筆指導④	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを指導教員と検討し、最終稿の目処を立てる。
13	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備①	指導教員とともに、提出した修士論文/リサーチペーパーを再検討する。
14	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備②	修士論文/リサーチペーパー口頭発表に向けての準備を行う。履修者は指導教員とともに提出論文の内容の詳細な確認を行う。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行うことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習(2単位)では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト(教科書)】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み(30%)、中間発表会での評価(35%)、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組み(35%)で、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内 Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 504 (その他 / Others 600)

修士論文演習 B

LETIZIA GUARINI

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の中間発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士2年春学期及び夏季休暇中の研究成果を指導教員と共有する。
2	研究計画の検討	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を指導教員とともに検討する。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し、指導教員に提出、議論する。
4	論文執筆指導②	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを、指導教員と引き続き議論・検討する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と検討する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と更に詳細に議論する。
7	研究発表準備③	履修者は、指導教員とともに中間発表会での発表内容の目処を立てる。
8	研究発表準備④	履修者は、指導教員とともに中間発表会の具体的な発表内容について検討する。
9	研究発表準備⑤	履修者は、中間発表会の具体的内容を指導教員に提示し、確認する。必要な場合は、発表会のリハーサルも行う。
10	研究発表会の振り返り	履修者は、中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し、指導教員と議論・確認する。
11	論文執筆指導③	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの初稿を指導教員に提出し、それをもとに指導教員と議論する。
12	論文執筆指導④	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを指導教員と検討し、最終稿の目処を立てる。
13	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備①	指導教員とともに、提出した修士論文/リサーチペーパーを再検討する。
14	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備②	修士論文/リサーチペーパー口頭発表に向けての準備を行う。履修者は指導教員とともに提出論文の内容の詳細な確認を行う。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行うことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習 (2単位) では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト (教科書)】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み (30%)、中間発表会での評価 (35%)、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組み (35%) で、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60% 以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内 Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 503 (その他 / Others 600)

修士論文演習 A

浅川 希洋志

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を7月の構想発表会で発表し、広くコメントを受けることを当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」と連携を図って進めていきます。履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士1年の研究成果を基に、指導教員と研究計画を練る。
2	研究計画の検討	履修者は、修士1年の研究成果を基に、引き続き指導教員と研究計画を練る。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
4	論文執筆指導②	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を引き続き検討する。
5	研究発表準備①	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について議論する。
6	研究発表準備②	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について引き続き議論する。
7	研究発表準備③	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論する。
8	研究発表準備④	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
9	研究発表準備⑤	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、引き続き指導教員と議論を重ねる。
10	研究発表準備⑥	履修者ごとに構想発表会の準備。履修者は、修士論文/リサーチペーパーの構想について指導教員と議論を重ねる。必要な場合には、発表会のリハサル等も行う。
11	研究発表会の振り返り	履修者は構想発表会を振り返りつつ、具体的な春学期の研究について指導教員と議論する。
12	論文執筆指導③	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を議論・再検討する。
13	論文執筆指導④	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を、更に議論・検討する。
14	まとめ	履修者は残された課題を抽出し、指導教員とともに、夏季休暇中の論文完成に向けた計画を立てる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内Web等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み（30%）、構想発表会での評価（35%）、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みで（35%）、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 504 (その他 / Others 600)

修士論文演習 B

浅川 希洋志

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の中間発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士2年春学期及び夏季休暇中の研究成果を指導教員と共有する。
2	研究計画の検討	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を指導教員とともに検討する。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し、指導教員に提出、議論する。
4	論文執筆指導②	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを、指導教員と引き続き議論・検討する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と検討する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と更に詳細に議論する。
7	研究発表準備③	履修者は、指導教員とともに中間発表会での発表内容の目処を立てる。
8	研究発表準備④	履修者は、指導教員とともに中間発表会の具体的な発表内容について検討する。
9	研究発表準備⑤	履修者は、中間発表会の具体的内容を指導教員に提示し、確認する。必要な場合は、発表会のリハーサルも行う。
10	研究発表会の振り返り	履修者は、中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し、指導教員と議論・確認する。
11	論文執筆指導③	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの初稿を指導教員に提出し、それをもとに指導教員と議論する。
12	論文執筆指導④	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを指導教員と検討し、最終稿の目処を立てる。
13	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備①	指導教員とともに、提出した修士論文/リサーチペーパーを再検討する。
14	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備②	修士論文/リサーチペーパー口頭発表に向けての準備を行う。履修者は指導教員とともに提出論文の内容の詳細な確認を行う。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行うことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習 (2単位) では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト (教科書)】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み (30%)、中間発表会での評価 (35%)、それを受けた論文完成に向けた最終的な取組み (35%) で、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60% 以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内 Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 503 (その他 / Others 600)

修士論文演習 A

大嶋 良明

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を7月の構想発表会で発表し、広くコメントを受けることを当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」と連携を図って進めていきます。履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士1年の研究成果を基に、指導教員と研究計画を練る。
2	研究計画の検討	履修者は、修士1年の研究成果を基に、引き続き指導教員と研究計画を練る。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
4	論文執筆指導②	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を引き続き検討する。
5	研究発表準備①	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について議論する。
6	研究発表準備②	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について引き続き議論する。
7	研究発表準備③	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論する。
8	研究発表準備④	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
9	研究発表準備⑤	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、引き続き指導教員と議論を重ねる。
10	研究発表準備⑥	履修者ごとに構想発表会の準備。履修者は、修士論文/リサーチペーパーの構想について指導教員と議論を重ねる。必要な場合には、発表会のリハサル等も行う。
11	研究発表会の振り返り	履修者は構想発表会を振り返りつつ、具体的な春学期の研究について指導教員と議論する。
12	論文執筆指導③	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を議論・再検討する。
13	論文執筆指導④	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を、更に議論・検討する。
14	まとめ	履修者は残された課題を抽出し、指導教員とともに、夏季休暇中の論文完成に向けた計画を立てる。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内Web等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習(2単位)では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト(教科書)】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み(30%)、構想発表会での評価(35%)、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みで(35%)、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 504 (その他 / Others 600)

修士論文演習 B

大嶋 良明

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の中間発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士2年春学期及び夏季休暇中の研究成果を指導教員と共有する。
2	研究計画の検討	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を指導教員とともに検討する。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し、指導教員に提出、議論する。
4	論文執筆指導②	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを、指導教員と引き続き議論・検討する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と検討する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と更に詳細に議論する。
7	研究発表準備③	履修者は、指導教員とともに中間発表会での発表内容の目処を立てる。
8	研究発表準備④	履修者は、指導教員とともに中間発表会の具体的な発表内容について検討する。
9	研究発表準備⑤	履修者は、中間発表会の具体的内容を指導教員に提示し、確認する。必要な場合は、発表会のリハーサルも行う。
10	研究発表会の振り返り	履修者は、中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し、指導教員と議論・確認する。
11	論文執筆指導③	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの初稿を指導教員に提出し、それをもとに指導教員と議論する。
12	論文執筆指導④	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを指導教員と検討し、最終稿の目処を立てる。
13	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備①	指導教員とともに、提出した修士論文/リサーチペーパーを再検討する。
14	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備②	修士論文/リサーチペーパー口頭発表に向けての準備を行う。履修者は指導教員とともに提出論文の内容の詳細な確認を行う。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行うことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習 (2単位) では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト (教科書)】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み (30%)、中間発表会での評価 (35%)、それを受けた論文完成に向けた最終的な取組み (35%) で、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60% 以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内 Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 503 (その他 / Others 600)

修士論文演習 A

松本 悟

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を7月の構想発表会で発表し、広くコメントを受けることを当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」と連携を図って進めていきます。履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士1年の研究成果を基に、指導教員と研究計画を練る。
2	研究計画の検討	履修者は、修士1年の研究成果を基に、引き続き指導教員と研究計画を練る。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
4	論文執筆指導②	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を引き続き検討する。
5	研究発表準備①	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について議論する。
6	研究発表準備②	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について引き続き議論する。
7	研究発表準備③	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論する。
8	研究発表準備④	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
9	研究発表準備⑤	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、引き続き指導教員と議論を重ねる。
10	研究発表準備⑥	履修者ごとに構想発表会の準備。履修者は、修士論文/リサーチペーパーの構想について指導教員と議論を重ねる。必要な場合には、発表会のリハサル等も行う。
11	研究発表会の振り返り	履修者は構想発表会を振り返りつつ、具体的な春学期の研究について指導教員と議論する。
12	論文執筆指導③	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を議論・再検討する。
13	論文執筆指導④	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を、更に議論・検討する。
14	まとめ	履修者は残された課題を抽出し、指導教員とともに、夏季休暇中の論文完成に向けた計画を立てる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内Web等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み（30%）、構想発表会での評価（35%）、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みで（35%）、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 504 (その他 / Others 600)

修士論文演習 B

松本 悟

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の中間発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士2年春学期及び夏学期中の研究成果を指導教員と共有する。
2	研究計画の検討	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を指導教員とともに検討する。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し、指導教員に提出、議論する。
4	論文執筆指導②	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを、指導教員と引き続き議論・検討する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と検討する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と更に詳細に議論する。
7	研究発表準備③	履修者は、指導教員とともに中間発表会での発表内容の目処を立てる。
8	研究発表準備④	履修者は、指導教員とともに中間発表会の具体的な発表内容について検討する。
9	研究発表準備⑤	履修者は、中間発表会の具体的内容を指導教員に提示し、確認する。必要な場合は、発表会のリハーサルも行う。
10	研究発表会の振り返り	履修者は、中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し、指導教員と議論・確認する。
11	論文執筆指導③	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの初稿を指導教員に提出し、それをもとに指導教員と議論する。
12	論文執筆指導④	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを指導教員と検討し、最終稿の目処を立てる。
13	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備①	指導教員とともに、提出した修士論文/リサーチペーパーを再検討する。
14	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備②	修士論文/リサーチペーパー口頭発表に向けての準備を行う。履修者は指導教員とともに提出論文の内容の詳細な確認を行う。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行うことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習 (2単位) では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト (教科書)】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み (30%)、中間発表会での評価 (35%)、それを受けた論文完成に向けた最終的な取組み (35%) で、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60% 以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内 Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 503 (その他 / Others 600)

修士論文演習 A

佐藤 千登勢

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を7月の構想発表会で発表し、広くコメントを受けることを当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」と連携を図って進めていきます。履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士1年の研究成果を基に、指導教員と研究計画を練る。
2	研究計画の検討	履修者は、修士1年の研究成果を基に、引き続き指導教員と研究計画を練る。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を検討する。
4	論文執筆指導②	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、春学期の研究計画を引き続き検討する。
5	研究発表準備①	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について議論する。
6	研究発表準備②	履修者は、構想発表会を意識し、指導教員と具体的な春学期の研究について引き続き議論する。
7	研究発表準備③	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論する。
8	研究発表準備④	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、指導教員と議論を重ねる。
9	研究発表準備⑤	履修者ごとに構想発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの構想について、引き続き指導教員と議論を重ねる。
10	研究発表準備⑥	履修者ごとに構想発表会の準備。履修者は、修士論文/リサーチペーパーの構想について指導教員と議論を重ねる。必要な場合には、発表会のリハサル等も行う。
11	研究発表会の振り返り	履修者は構想発表会を振り返りつつ、具体的な春学期の研究について指導教員と議論する。
12	論文執筆指導③	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を議論・再検討する。
13	論文執筆指導④	履修者は、構想発表会でのコメントを受けて、指導教員と修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を、更に議論・検討する。
14	まとめ	履修者は残された課題を抽出し、指導教員とともに、夏季休暇中の論文完成に向けた計画を立てる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内Web等を活用した情報共有を積極的に行なうことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み（30%）、構想発表会での評価（35%）、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組みで（35%）、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR600G1 - 504 (その他 / Others 600)

修士論文演習 B

佐藤 千登勢

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

文献サーベイや調査をもとに修士論文/リサーチペーパーを執筆します。

【到達目標】

1. 修士論文/リサーチペーパーを完成することができる。
2. 修士論文/リサーチペーパーの内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

修士論文/リサーチペーパーに必要な補足調査や文献サーベイ、論文執筆、口頭発表について指導します。論文の骨子を11月の中間発表会で発表し広くコメントを受けることを、当座の目標とします。修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究B」と連携を図って進めていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1	研究成果の共有	履修者は、修士2年春学期及び夏季休暇中の研究成果を指導教員と共有する。
2	研究計画の検討	履修者は、修士論文/リサーチペーパー完成に必要な補足調査や文献の洗い出し、秋学期の研究計画を指導教員とともに検討する。
3	論文執筆指導①	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの一部を執筆し、指導教員に提出、議論する。
4	論文執筆指導②	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを、指導教員と引き続き議論・検討する。
5	研究発表準備①	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と検討する。
6	研究発表準備②	履修者ごとに中間発表会の準備。修士論文/リサーチペーパーの全体構成を指導教員と更に詳細に議論する。
7	研究発表準備③	履修者は、指導教員とともに中間発表会での発表内容の目処を立てる。
8	研究発表準備④	履修者は、指導教員とともに中間発表会の具体的な発表内容について検討する。
9	研究発表準備⑤	履修者は、中間発表会の具体的内容を指導教員に提示し、確認する。必要な場合は、発表会のリハーサルも行う。
10	研究発表会の振り返り	履修者は、中間発表会でのコメントを受けて修士論文/リサーチペーパーの全体構成や結論を再検討し、指導教員と議論・確認する。
11	論文執筆指導③	履修者は、修士論文/リサーチペーパーの初稿を指導教員に提出し、それをもとに指導教員と議論する。
12	論文執筆指導④	履修者は、指導教員に提出した修士論文/リサーチペーパーを指導教員と検討し、最終稿の目処を立てる。
13	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備①	指導教員とともに、提出した修士論文/リサーチペーパーを再検討する。
14	修士論文/リサーチペーパー口述試験の準備②	修士論文/リサーチペーパー口頭発表に向けての準備を行う。履修者は指導教員とともに提出論文の内容の詳細な確認を行う。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

与えられた課題への取り組み、必要な関連文献の精読、学内 Web 等を活用した情報共有を積極的に行うことが求められます。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習 (2単位) では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これはあくまでも標準としての授業外学習時間とご理解ください。

【テキスト (教科書)】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【参考書】

履修者のテーマにより、必要な文献をその都度紹介します。

【成績評価の方法と基準】

毎週の指導内容に関する取組み (30%)、中間発表会での評価 (35%)、それを受けた論文完成に向けた最終的な取り組み (35%) で、総合的に評価します。この成績評価の方法をもとに、本授業の到達目標の 60% 以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

個々の担当教員より、授業、学習支援システム等を通じて、適宜情報共有されます。

【学生が準備すべき機器他】

PCおよび学内 Web、インターネットを活用したオンラインによる情報共有を常に行うことが重要ですので、それに合わせた機器を用意してください。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

The seminar is designed to assist students in writing up the Master's thesis/ Research paper.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own MA thesis/research paper.
2. to be able to orally present the contents and also significances of your MA thesis/research paper.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise your ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Based on daily learning activities (30%), presentations (35%), and effort to write up the Master's thesis/Research paper (35%), students who are considered to successfully achieve 60% or more of course goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 001 (その他 / Others 700)

博士論文演習 I A (代表シラバス)

浅川 希洋志、大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究分野に関わる文献サーベイを行うことで、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化します。それと同時に、博士論文に関係する投稿論文の執筆を進めます。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画をおおむね明確にする。
2. 博士論文に関係する投稿論文の執筆を開始する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	これまでの研究の振り返り	修士論文などこれまでの研究成果を再検討し、博士論文との関連や発展の方向性を検討する。
2回	研究テーマの確認	第1回の検討結果をもとに博士論文のテーマを洗練させ、確認する。
3回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
4回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを引き続き、修得する。
5回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルの修得を、更に進める。
6回	文献サーベイ④	必要があれば、他の研究分野の文献なども利用しながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
7回	文献サーベイ⑤	必要があれば、他の研究分野の文献なども利用しながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを、引き続き修得する。
8回	文献サーベイ⑥	必要があれば、他の研究分野の文献なども利用しながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを、更に高次のレベルで修得するよう努める。
9回	研究報告①	修士論文や文献サーベイに基づき、投稿論文の準備を進める。
10回	研究報告②	修士論文や文献サーベイに基づき、投稿論文の準備を引き続き進める。
11回	研究報告③	指導教員の指導の下で、修士論文や文献サーベイに基づいた投稿論文の準備を進める。
12回	研究報告④	指導教員の指導の下で、修士論文や文献サーベイに基づいた投稿論文の準備を、引き続き進める。
13回	研究計画作成①	博士ワークショップの発表準備等を通して、研究計画を検討する。
14回	研究計画作成②	博士ワークショップの発表準備等を通して、研究計画を引き続き検討する。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修するなどして、自らが積極的に対応していくことが重要です。

大学設置基準に基づく、準備・復習時間は講義及び演習(2単位)では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢(50%)、研究の進展・投稿論文の執筆状況等(50%)を勘案して、総合的に評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】**【授業の概要 (Course Outline)】**

This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of future dissertation into a publishable journal article.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing a paper in your relevant field.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 001 (その他/Others 700)

博士論文演習 I A

佐藤 千登勢

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究分野に関わる文献サーベイを行うことで、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化します。それと同時に、博士論文に関係する投稿論文の執筆を進めます。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画をおおむね明確にする。
2. 博士論文に関係する投稿論文の執筆を開始する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	これまでの研究の振り返り	修士論文などこれまでの研究成果を再検討し、博士論文との関連や発展の方向性を検討する。
2回	研究テーマの確認	第1回の検討結果をもとに博士論文のテーマを洗練させ、確認する。
3回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
4回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを引き続き、修得する。
5回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルの修得を、更に進める。
6回	文献サーベイ④	必要があれば、他の研究分野の文献なども利用しながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
7回	文献サーベイ⑤	必要があれば、他の研究分野の文献なども利用しながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを、引き続き修得する。
8回	文献サーベイ⑥	必要があれば、他の研究分野の文献なども利用しながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを、更に高次のレベルで修得するよう努める。
9回	研究報告①	修士論文や文献サーベイに基づき、投稿論文の準備を進める。
10回	研究報告②	修士論文や文献サーベイに基づき、投稿論文の準備を引き続き進める。
11回	研究報告③	指導教員の指導の下で、修士論文や文献サーベイに基づいた投稿論文の準備を進める。
12回	研究報告④	指導教員の指導の下で、修士論文や文献サーベイに基づいた投稿論文の準備を、引き続き進める。
13回	研究計画作成①	博士ワークショップの発表準備等を通して、研究計画を検討する。
14回	研究計画作成②	博士ワークショップの発表準備等を通して、研究計画を引き続き検討する。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修するなどして、自らが積極的に対応していくことが重要です。

大学設置基準に基づく、準備・復習時間は講義及び演習(2単位)では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢(50%)、研究の進展・投稿論文の執筆状況等(50%)を勘案して、総合的に評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of future dissertation into a publishable journal article.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing a paper in your relevant field.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 001 (その他 / Others 700)

博士論文演習 I A

浅川 希洋志

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究分野に関わる文献サーベイを行うことで、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化します。それと同時に、博士論文に関係する投稿論文の執筆を進めます。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画をおおむね明確にする。
2. 博士論文に関係する投稿論文の執筆を開始する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていきます。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	これまでの研究の振り返り	修士論文などこれまでの研究成果を再検討し、博士論文との関連や発展の方向性を検討する。
2回	研究テーマの確認	第1回の検討結果をもとに博士論文のテーマを洗練させ、確認する。
3回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
4回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを引き続き、修得する。
5回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルの修得を、更に進める。
6回	文献サーベイ④	必要があれば、他の研究分野の文献なども利用しながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
7回	文献サーベイ⑤	必要があれば、他の研究分野の文献なども利用しながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを、引き続き修得する。
8回	文献サーベイ⑥	必要があれば、他の研究分野の文献なども利用しながら、博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを、更に高次のレベルで修得するよう努める。
9回	研究報告①	修士論文や文献サーベイに基づき、投稿論文の準備を進める。
10回	研究報告②	修士論文や文献サーベイに基づき、投稿論文の準備を引き続き進める。
11回	研究報告③	指導教員の指導の下で、修士論文や文献サーベイに基づいた投稿論文の準備を進める。
12回	研究報告④	指導教員の指導の下で、修士論文や文献サーベイに基づいた投稿論文の準備を、引き続き進める。
13回	研究計画作成①	博士ワークショップの発表準備等を通して、研究計画を検討する。
14回	研究計画作成②	博士ワークショップの発表準備等を通して、研究計画を引き続き検討する。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修するなどして、自らが積極的に対応していくことが重要です。

大学設置基準に基づく、準備・復習時間は講義及び演習(2単位)では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢(50%)、研究の進展・投稿論文の執筆状況等(50%)を勘案して、総合的に評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】**【授業の概要 (Course Outline)】**

This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of future dissertation into a publishable journal article.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing a paper in your relevant field.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 002 (その他 / Others 700)

博士論文演習 I B (代表シラバス)

浅川 希洋志、大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究分野に関わる文献サーベイを通して、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化します。それと同時に、博士論文に関係する研究発表及び投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画を明確にする。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。
3. 博士論文に関係する最初の学術論文を投稿する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていきます。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す。
2回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
3回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
4回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
5回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
6回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
7回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う。
8回	文献サーベイ④	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
9回	文献サーベイ⑤	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
10回	論文執筆指導①	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
11回	論文執筆指導②	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
12回	論文執筆指導③	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
13回	論文執筆指導④	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
14回	まとめ	秋学期の研究成果のまとめと次年度に向けた春季休暇中の計画を立てる。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修するなどとして、自らが積極的に対応していくことが重要です。大学設置基準に基づく、準備・復習時間は講義及び演習 (2単位) では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢 (50%)、研究の進展・投稿論文の執筆状況等 (50%) を勘案して、総合的に評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of future dissertation into a publishable journal article.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing a paper in your relevant field.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 002 (その他/Others 700)

博士論文演習 I B

佐藤 千登勢

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究分野に関わる文献サーベイを通して、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化します。それと同時に、博士論文に関係する研究発表及び投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画を明確にする。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。
3. 博士論文に関係する最初の学術論文を投稿する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す。
2回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
3回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
4回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
5回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
6回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
7回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う。
8回	文献サーベイ④	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
9回	文献サーベイ⑤	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
10回	論文執筆指導①	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
11回	論文執筆指導②	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
12回	論文執筆指導③	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
13回	論文執筆指導④	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
14回	まとめ	秋学期の研究成果のまとめと次年度に向けた春季休暇中の計画を立てる。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修するなどして、自らが積極的に対応していくことが重要です。大学設置基準に基づく、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を勘案して、総合的に評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】**【授業の概要（Course Outline）】**

This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of future dissertation into a publishable journal article.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing a paper in your relevant field.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 002 (その他/Others 700)

博士論文演習 I B

浅川 希洋志

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究分野に関わる文献サーベイを通して、博士論文のテーマ、関連する研究領域、必要な専門知識、コアとなる文献、研究方法を明確化します。それと同時に、博士論文に関係する研究発表及び投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文のテーマ、研究方法、研究計画を明確にする。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。
3. 博士論文に関係する最初の学術論文を投稿する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

研究分野の文献サーベイやその分析を通じて、博士論文の執筆に必要な専門知識や方法論を身につけていきます。指導教員や他の大学院生との議論を通して、より高度な分析力や批判的な考察力を修得し、研究者としての素養を磨いていきます。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク (学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す。
2回	文献サーベイ①	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
3回	文献サーベイ②	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
4回	文献サーベイ③	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
5回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
6回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
7回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う。
8回	文献サーベイ④	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
9回	文献サーベイ⑤	博士論文執筆に必要な高度な知識とスキルを修得する。
10回	論文執筆指導①	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
11回	論文執筆指導②	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
12回	論文執筆指導③	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
13回	論文執筆指導④	修士論文や文献サーベイに基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
14回	まとめ	秋学期の研究成果のまとめと次年度に向けた春季休暇中の計画を立てる。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修するなどとして、自らが積極的に対応していくことが重要です。大学設置基準に基づく、準備・復習時間は講義及び演習 (2単位) では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢 (50%)、研究の進展・投稿論文の執筆状況等 (50%) を勘案して、総合的に評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to facilitate the development of ideas for the doctoral dissertation. While taking this course, students are expected to conduct a literature survey, acquire the requisite methodology, and also make part of future dissertation into a publishable journal article.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing a paper in your relevant field.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 003 (その他/Others 700)

博士論文演習Ⅱ A (代表シラバス)

浅川 希洋志、大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究計画に沿って必要な調査(文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等)を実施します。調査結果をふまえて研究計画の修正及び2本目の投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文に必要な調査を進めることができる。
2. 博士論文に関係する2本目の投稿論文の執筆を開始できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

定期的に履修者が調査の進捗を報告し、それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について、指導教員が助言を行います。

また、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返り	1年次及び2-3月の研究成果を報告し、春学期の研究計画を議論する。
2回	調査報告①	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
3回	調査報告②	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
4回	調査報告③	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
5回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
6回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
7回	調査報告⑥	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
8回	調査報告⑦	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
9回	調査報告⑧	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
10回	調査報告⑨	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
11回	調査報告⑩	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
12回	調査報告⑪	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
13回	研究まとめ	博士ワークショップの発表準備等を通して、春学期の研究成果をまとめる。
14回	秋学期及び夏季休暇の計画	春学期の進展を振り返り、秋学期の研究計画を検討し、夏季休暇中にすべき調査・研究内容を明確化する。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。特に、博士課程2年目は博士論文執筆のための調査に注力します。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修するなどしながら、自ら対応することが重要です。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習(2単位)では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト(教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢(50%)、研究の進展・投稿論文の執筆状況等(50%)を勘案して、総合的に評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing another paper in your relevant field.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 004 (その他/Others 700)

博士論文演習ⅡB (代表シラバス)

浅川 希洋志、大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究計画に沿って必要な調査(文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等)を実施します。調査結果をふまえて研究計画の修正及び2本目の投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文の一部にあたる2本目の学術論文を投稿できる。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

定期的に履修者が調査の進捗を報告し、それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について指導教員が助言を行います。学術論文の投稿や学内外の学会での発表を推奨し、その準備や指導教員の研究プロジェクトへの参加などを通じて、研究者としての素養を磨いていきます。また、履修者の報告に関しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す。
2回	調査報告①	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
3回	調査報告②	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
4回	調査報告③	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
5回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
6回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
7回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う。
8回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
9回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
10回	論文執筆指導①	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
11回	論文執筆指導②	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
12回	論文執筆指導③	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
13回	論文執筆指導④	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
14回	まとめ	2年間の研究成果のまとめを行うとともに、博士論文の構成や目次を検討し、不足する調査内容を明確にする。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。特に、博士課程2年目は博士論文執筆のための調査に注力します。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修するなどしながら、自ら対応することが重要です。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習(2単位)では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト(教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢(50%)、研究の進展・投稿論文の執筆状況等(50%)を勘案して、総合的に評価します。本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本です。

【Outline (in English)】

授業の概要 (Course Outline)

This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing another paper in your relevant field.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 005 (その他 / Others 700)

博士論文演習Ⅲ A (代表シラバス)

浅川 希洋志、大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます。

【到達目標】

1. 博士論文の要旨を完成させる。
2. 博士論文の予備論文 (草稿) を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

文献サーベイや調査結果に基づいた博士論文を章ごとに執筆・報告し、議論していきます。必要に応じて追加的な文献サーベイを行い、追加調査を実施します。

また、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	執筆・調査計画の立案	2-3月の研究成果の報告を行うとともに、追加調査が必要な項目の洗い出し、博士論文の執筆計画を立案する。
2回	博士論文執筆指導①	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
3回	博士論文執筆指導②	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
4回	博士論文執筆指導③	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
5回	予備論文 (草稿) への指導①	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。この頃までに予備論文 (草稿) を完成させる。
6回	予備論文 (草稿) への指導②	完成した予備論文 (草稿) について、指導教員と議論・検討を行う。
7回	予備審査結果を踏まえた検討	予備審査での各指導教員の指摘を整理し、追加調査や文献サーベイを検討する。
8回	追加調査報告・文献サーベイ①	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
9回	追加調査報告・文献サーベイ②	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
10回	追加調査報告・文献サーベイ③	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
11回	口頭発表準備①	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ、博士論文全体の構成と流れを、指導教員と議論・検討する。
12回	口頭発表準備②	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ、博士論文全体の構成と流れを、指導教員と議論・検討する。
13回	口頭発表準備③	博士ワークショップの口頭発表準備等を通して、博士論文の全体の構成を固める。
14回	博士論文の骨子の確定	博士ワークショップでのコメントをふまえ、博士論文全体の構成と内容を見直し、本格的な執筆を行う。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行っていきます。特に、博士課程3年目は博士論文執筆に注力します。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって自ら対応、補強していくことが重要です。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習 (2単位) では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢 (50%)、研究の進展・投稿論文の執筆状況等 (50%) を勘案して、総合的に評価します。本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本です。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing preliminary versions of your dissertation.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 006 (その他/Others 700)

博士論文演習Ⅲ B (代表シラバス)

浅川 希洋志、大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます。

【到達目標】

1. 博士論文を完成することができる。
2. 博士論文の内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

博士論文を完成させ、その内容と意義を公開審査会の場で発表します。また、審査委員からの助言を受けて必要な改善を行います。履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	博士論文執筆指導	博士学位請求論文完成に向けて、最終的な指導を指導教員より受ける。
2回	投稿論文・学会発表準備①	指導教員より、提出した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
3回	投稿論文・学会発表準備②	指導教員より、完成した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
4回	投稿論文・学会発表準備③	指導教員より、完成した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
5回	口頭発表指導①	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
6回	口頭発表指導②	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
7回	口頭発表指導③	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
8回	学位請求論文の要旨指導①	指導教員より、公開審査会に向けて学位請求論文の要旨に関する指導を受ける。
9回	学位請求論文の要旨指導②	指導教員より、公開審査会に向けて学位請求論文の要旨に関する指導を受ける。
10回	学位請求論文公開審査会発表指導①	公開審査会に向けて学位請求論文の発表練習を行う。
11回	学位請求論文公開審査会発表指導②	公開審査会に向けて学位請求論文の発表練習を行う。
12回	学位請求論文の修正①	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。
13回	学位請求論文の修正②	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。また、出版に向けた論文の修正を行う。
14回	学位請求論文の修正③	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。また、出版に向けた論文の修正を行う。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行っていきます。特に、博士課程3年目は博士論文執筆に注力します。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって自ら対応、補強していくことが重要です。大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習(2単位)では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢(50%)、研究の進展・投稿論文の執筆状況等(50%)を勘案して、総合的に評価します。本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本です。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing preliminary versions of your dissertation.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 003 (その他 / Others 700)

博士論文演習Ⅱ A

佐藤 千登勢

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究計画に沿って必要な調査（文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等）を実施します。調査結果をふまえて研究計画の修正及び2本目の投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文に必要な調査を進めることができる。
2. 博士論文に関係する2本目の投稿論文の執筆を開始できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

定期的に履修者が調査の進捗を報告し、それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について、指導教員が助言を行います。

また、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返り	1年次及び2-3月の研究成果を報告し、春学期の研究計画を議論する。
2回	調査報告①	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
3回	調査報告②	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
4回	調査報告③	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
5回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
6回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
7回	調査報告⑥	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
8回	調査報告⑦	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
9回	調査報告⑧	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
10回	調査報告⑨	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
11回	調査報告⑩	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
12回	調査報告⑪	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
13回	研究まとめ	博士ワークショップの発表準備等を通して、春学期の研究成果をまとめる。
14回	秋学期及び夏季休暇の計画	春学期の進展を振り返り、秋学期の研究計画を検討し、夏季休暇中にすべき調査・研究内容を明確化する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。特に、博士課程2年目は博士論文執筆のための調査に注力します。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修するなどしながら、自ら対応することが重要です。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を勘案して、総合的に評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本となります。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing another paper in your relevant field.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 004 (その他/Others 700)

博士論文演習 II B

佐藤 千登勢

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究計画に沿って必要な調査(文献、一次資料収集、アンケート、フィールドワーク等)を実施します。調査結果をふまえて研究計画の修正及び2本目の投稿論文の執筆を進めていきます。

【到達目標】

1. 博士論文の一部にあたる2本目の学術論文を投稿できる。
2. 学内外の学会で博士論文に係る研究発表を行う。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

定期的に履修者が調査の進捗を報告し、それをもとに議論を行い、調査の進め方、分析の方法、追加的に必要な専門知識、論文の方向性、追加調査の必要性等について指導教員が助言を行います。学術論文の投稿や学内外の学会での発表を推奨し、その準備や指導教員の研究プロジェクトへの参加などを通じて、研究者としての素養を磨いていきます。また、履修者の報告に関しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	研究の振り返りと計画の見直し	春学期及び夏季休暇中の研究結果を報告し、必要に応じて研究計画を見直す。
2回	調査報告①	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
3回	調査報告②	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
4回	調査報告③	研究計画に従って文献、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
5回	研究発表①	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
6回	研究発表②	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容を検討する。
7回	研究発表③	博士ワークショップもしくは学内外の学会での発表内容の検討・発表・振り返りを行う。
8回	調査報告④	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
9回	調査報告⑤	研究計画に従って文献、一次資料、アンケート、フィールドワーク等の調査を行い、結果を報告する。
10回	論文執筆指導①	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
11回	論文執筆指導②	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
12回	論文執筆指導③	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
13回	論文執筆指導④	文献サーベイや調査結果に基づき投稿論文を執筆し、指導教員と議論・検討する。
14回	まとめ	2年間の研究成果のまとめを行うとともに、博士論文の構成や目次を検討し、不足する調査内容を明確にする。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行います。特に、博士課程2年目は博士論文執筆のための調査に注力します。なお、専門知識を補強したい場合には、修士課程の講義科目等を履修するなどしながら、自ら対応することが重要です。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習(2単位)では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト(教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢(50%)、研究の進展・投稿論文の執筆状況等(50%)を勘案して、総合的に評価します。

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本です。

【Outline (in English)】

授業の概要 (Course Outline)

This seminar is designed to assist in research for the dissertation. While taking this course, students are expected to make another part of their dissertation into a journal article for publication.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing another paper in your relevant field.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 005 (その他 / Others 700)

博士論文演習Ⅲ A

高柳 俊男

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます。

【到達目標】

1. 博士論文の要旨を完成させる。
2. 博士論文の予備論文（草稿）を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

文献サーベイや調査結果に基づいた博士論文を章ごとに執筆・報告し、議論していきます。必要に応じて追加的な文献サーベイを行い、追加調査を実施します。

また、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1回	執筆・調査計画の立案	2-3月の研究成果の報告を行うとともに、追加調査が必要な項目の洗い出し、博士論文の執筆計画を立案する。
2回	博士論文執筆指導①	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
3回	博士論文執筆指導②	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
4回	博士論文執筆指導③	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
5回	予備論文（草稿）への指導①	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。この頃までに予備論文（草稿）を完成させる。
6回	予備論文（草稿）への指導②	完成した予備論文（草稿）について、指導教員と議論・検討を行う。
7回	予備審査結果を踏まえた検討	予備審査での各指導教員の指摘を整理し、追加調査や文献サーベイを検討する。
8回	追加調査報告・文献サーベイ①	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
9回	追加調査報告・文献サーベイ②	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
10回	追加調査報告・文献サーベイ③	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
11回	口頭発表準備①	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ、博士論文全体の構成と流れを、指導教員と議論・検討する。
12回	口頭発表準備②	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ、博士論文全体の構成と流れを、指導教員と議論・検討する。
13回	口頭発表準備③	博士ワークショップの口頭発表準備等を通して、博士論文の全体の構成を固める。
14回	博士論文の骨子の確定	博士ワークショップでのコメントをふまえ、博士論文全体の構成と内容を見直し、本格的な執筆を行なう。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行っていきます。特に、博士課程3年目は博士論文執筆に注力します。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって自ら対応、補強していくことが重要です。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を勘案して、総合的に評価します。本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本です。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing preliminary versions of your dissertation.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 006 (その他/Others 700)

博士論文演習Ⅲ B

高柳 俊男

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます。

【到達目標】

1. 博士論文を完成することができる。
2. 博士論文の内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

博士論文を完成させ、その内容と意義を公開審査会の場で発表します。また、審査委員からの助言を受けて必要な改善を行います。履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1回	博士論文執筆指導	博士学位請求論文完成に向けて、最終的な指導を指導教員より受ける。
2回	投稿論文・学会発表準備①	指導教員より、提出した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
3回	投稿論文・学会発表準備②	指導教員より、完成した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
4回	投稿論文・学会発表準備③	指導教員より、完成した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
5回	口頭発表指導①	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
6回	口頭発表指導②	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
7回	口頭発表指導③	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
8回	学位請求論文の要旨指導①	指導教員より、公開審査会に向けて学位請求論文の要旨に関する指導を受ける。
9回	学位請求論文の要旨指導②	指導教員より、公開審査会に向けて学位請求論文の要旨に関する指導を受ける。
10回	学位請求論文公開審査会発表指導①	公開審査会に向けて学位請求論文の発表練習を行う。
11回	学位請求論文公開審査会発表指導②	公開審査会に向けて学位請求論文の発表練習を行う。
12回	学位請求論文の修正①	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。
13回	学位請求論文の修正②	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。また、出版に向けた論文の修正を行う。
14回	学位請求論文の修正③	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。また、出版に向けた論文の修正を行う。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行っていきます。特に、博士課程3年目は博士論文執筆に注力します。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって自ら対応、補強していくことが重要です。大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習(2単位)では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢(50%)、研究の進展・投稿論文の執筆状況等(50%)を勘案して、総合的に評価します。本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本です。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing preliminary versions of your dissertation.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 005 (その他 / Others 700)

博士論文演習Ⅲ A

浅川 希洋志

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます。

【到達目標】

1. 博士論文の要旨を完成させる。
2. 博士論文の予備論文（草稿）を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

文献サーベイや調査結果に基づいた博士論文を章ごとに執筆・報告し、議論していきます。必要に応じて追加的な文献サーベイを行い、追加調査を実施します。

また、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	執筆・調査計画の立案	2-3月の研究成果の報告を行うとともに、追加調査が必要な項目の洗い出し、博士論文の執筆計画を立案する。
2回	博士論文執筆指導①	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
3回	博士論文執筆指導②	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
4回	博士論文執筆指導③	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
5回	予備論文（草稿）への指導①	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。この頃までに予備論文（草稿）を完成させる。
6回	予備論文（草稿）への指導②	完成した予備論文（草稿）について、指導教員と議論・検討を行う。
7回	予備審査結果を踏まえた検討	予備審査での各指導教員の指摘を整理し、追加調査や文献サーベイを検討する。
8回	追加調査報告・文献サーベイ①	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
9回	追加調査報告・文献サーベイ②	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
10回	追加調査報告・文献サーベイ③	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
11回	口頭発表準備①	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ、博士論文全体の構成と流れを、指導教員と議論・検討する。
12回	口頭発表準備②	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ、博士論文全体の構成と流れを、指導教員と議論・検討する。
13回	口頭発表準備③	博士ワークショップの口頭発表準備等を通して、博士論文の全体の構成を固める。
14回	博士論文の骨子の確定	博士ワークショップでのコメントをふまえ、博士論文全体の構成と内容を見直し、本格的な執筆を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行っていきます。特に、博士課程3年目は博士論文執筆に注力します。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって自ら対応、補強していくことが重要です。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を勘案して、総合的に評価します。本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本です。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing preliminary versions of your dissertation.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 006 (その他/Others 700)

博士論文演習Ⅲ B

浅川 希洋志

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます。

【到達目標】

1. 博士論文を完成することができる。
2. 博士論文の内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

博士論文を完成させ、その内容と意義を公開審査会の場で発表します。また、審査委員からの助言を受けて必要な改善を行います。履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
1回	博士論文執筆指導	博士学位請求論文完成に向けて、最終的な指導を指導教員より受ける。
2回	投稿論文・学会発表準備①	指導教員より、提出した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
3回	投稿論文・学会発表準備②	指導教員より、完成した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
4回	投稿論文・学会発表準備③	指導教員より、完成した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
5回	口頭発表指導①	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
6回	口頭発表指導②	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
7回	口頭発表指導③	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
8回	学位請求論文の要旨指導①	指導教員より、公開審査会に向けて学位請求論文の要旨に関する指導を受ける。
9回	学位請求論文の要旨指導②	指導教員より、公開審査会に向けて学位請求論文の要旨に関する指導を受ける。
10回	学位請求論文公開審査会発表指導①	公開審査会に向けて学位請求論文の発表練習を行う。
11回	学位請求論文公開審査会発表指導②	公開審査会に向けて学位請求論文の発表練習を行う。
12回	学位請求論文の修正①	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。
13回	学位請求論文の修正②	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。また、出版に向けた論文の修正を行う。
14回	学位請求論文の修正③	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。また、出版に向けた論文の修正を行う。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行っていきます。特に、博士課程3年目は博士論文執筆に注力します。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって自ら対応、補強していくことが重要です。大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習(2単位)では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢(50%)、研究の進展・投稿論文の執筆状況等(50%)を勘案して、総合的に評価します。本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本です。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing preliminary versions of your dissertation.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 005 (その他 / Others 700)

博士論文演習Ⅲ A

佐藤 千登勢

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます。

【到達目標】

1. 博士論文の要旨を完成させる。
2. 博士論文の予備論文 (草稿) を完成させる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

文献サーベイや調査結果に基づいた博士論文を章ごとに執筆・報告し、議論していきます。必要に応じて追加的な文献サーベイを行い、追加調査を実施します。

また、履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1回	執筆・調査計画の立案	2-3月の研究成果の報告を行うとともに、追加調査が必要な項目の洗い出し、博士論文の執筆計画を立案する。
2回	博士論文執筆指導①	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
3回	博士論文執筆指導②	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
4回	博士論文執筆指導③	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。更に、必要に応じて追加文献サーベイや調査を行い、その内容を指導教員に報告し、議論する。
5回	予備論文 (草稿) への指導①	博士論文の一部を執筆し、それをもとに指導教員の指導を受ける。この頃までに予備論文 (草稿) を完成させる。
6回	予備論文 (草稿) への指導②	完成した予備論文 (草稿) について、指導教員と議論・検討を行う。
7回	予備審査結果を踏まえた検討	予備審査での各指導教員の指摘を整理し、追加調査や文献サーベイを検討する。
8回	追加調査報告・文献サーベイ①	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
9回	追加調査報告・文献サーベイ②	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
10回	追加調査報告・文献サーベイ③	予備審査での各指導教員の指摘をふまえ、追加調査や文献サーベイを行い、その成果を報告する。
11回	口頭発表準備①	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ、博士論文全体の構成と流れを、指導教員と議論・検討する。
12回	口頭発表準備②	追加調査や文献サーベイの成果をふまえ、博士論文全体の構成と流れを、指導教員と議論・検討する。
13回	口頭発表準備③	博士ワークショップの口頭発表準備等を通して、博士論文の全体の構成を固める。
14回	博士論文の骨子の確定	博士ワークショップでのコメントをふまえ、博士論文全体の構成と内容を見直し、本格的な執筆を行なう。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行っていきます。特に、博士課程3年目は博士論文執筆に注力します。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって自ら対応、補強していくことが重要です。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習 (2単位) では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢 (50%)、研究の進展・投稿論文の執筆状況等 (50%) を勘案して、総合的に評価します。本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本です。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

【到達目標 (Learning Objectives)】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing preliminary versions of your dissertation.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 006 (その他/Others 700)

博士論文演習Ⅲ B

佐藤 千登勢

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

文献サーベイや調査結果をもとに博士論文を執筆していきます。

【到達目標】

1. 博士論文を完成することができる。
2. 博士論文の内容と意義をわかりやすく口頭で発表できる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

博士論文を完成させ、その内容と意義を公開審査会の場で発表します。また、審査委員からの助言を受けて必要な改善を行います。履修者の報告に対して、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行うこともあります。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり/Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし/No

【授業計画】 授業形態：オンライン/online

回	テーマ	内容
1回	博士論文執筆指導	博士学位請求論文完成に向けて、最終的な指導を指導教員より受ける。
2回	投稿論文・学会発表準備①	指導教員より、提出した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
3回	投稿論文・学会発表準備②	指導教員より、完成した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
4回	投稿論文・学会発表準備③	指導教員より、完成した博士学位請求論文をもとにした投稿論文や学外の学会発表に関する指導を受ける。
5回	口頭発表指導①	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
6回	口頭発表指導②	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
7回	口頭発表指導③	博士ワークショップあるいは学内で開催される国際文化情報学会での発表内容の検討を行う。
8回	学位請求論文の要旨指導①	指導教員より、公開審査会に向けて学位請求論文の要旨に関する指導を受ける。
9回	学位請求論文の要旨指導②	指導教員より、公開審査会に向けて学位請求論文の要旨に関する指導を受ける。
10回	学位請求論文公開審査会発表指導①	公開審査会に向けて学位請求論文の発表練習を行う。
11回	学位請求論文公開審査会発表指導②	公開審査会に向けて学位請求論文の発表練習を行う。
12回	学位請求論文の修正①	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。
13回	学位請求論文の修正②	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。また、出版に向けた論文の修正を行う。
14回	学位請求論文の修正③	審査小委員会のコメントを受けて、必要であれば学位請求論文を修正する。また、出版に向けた論文の修正を行う。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

博士論文作成のための日常的な研究の積み重ねと執筆作業を行っていきます。特に、博士課程3年目は博士論文執筆に注力します。補強したい専門知識に関しては、指導教員の助言にしたがって自ら対応、補強していくことが重要です。大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、本科目は博士論文作成のためのものであり、それ以上の時間を費やすことは当然のこととご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

日頃の研究姿勢（50%）、研究の進展・投稿論文の執筆状況等（50%）を勘案して、総合的に評価します。本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

担当の教員ごとの気づきに関しては、授業等で適宜フィードバックされます。

【その他の重要事項】

授業形態については、担当教員より事前に周知されますが、2024年度の授業は対面形態が基本です。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to assist students in writing up their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

They are twofold:

1. to be able to write up your own doctoral dissertation.
2. to start writing preliminary versions of your dissertation.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

Study, read, and actively publicise and exchange ideas.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

Daily attitude toward own research topic (50%) and steady progress in writing academic papers and doctoral dissertation (50%) are considered as criteria for the grade of this course. Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 101 (その他 / Others 700)

博士ワークショップ I A

重定 如彦、大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から、他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士課程において具体的に調査研究を行っていくための計画書である論文プロポーザルを書き上げ、構想発表会で発表する。論文プロポーザルは、
 - (1) 研究テーマ
 - (2) 研究の目的
 - (3) 研究の方法
 - (4) 研究計画
 - (5) 期待される成果
 - (6) 文献リスト等
 が含まれていることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか (該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、構想発表会において論文プロポーザルを発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを提出します。履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング (グループディスカッション、ディベート等) の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク (学外での実習等) の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	討論者①	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第2回	討論者②	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第3回	討論者③	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第4回	討論者④	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第5回	討論者⑤	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第6回	研究発表とコメント①	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第7回	研究発表とコメント②	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第8回	研究発表とコメント③	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第9回	研究発表とコメント④	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第10回	研究発表とコメント⑤	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第11回	研究発表とコメント⑥	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

第12回	研究発表とコメント⑦	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第13回	研究発表とコメント⑧	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第14回	研究発表とコメント⑨	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習 (準備学習・復習・宿題等)】

「国際文化共同研究A」の履修者の発表に対するコメントは、授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに構想発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習 (2単位) では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これらはいくまでも標準である、とご理解ください。

【テキスト (教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

- ①平常点 (コメント・シート) : 20点
・「国際文化共同研究A」に討議者として少なくとも5回参加し、コメント・シート (毎回A4のシート1枚) を提出する。加えて、構想発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。
- ②論文プロポーザル : 80点
・論文プロポーザルの内容 : 40点
・論文プロポーザルについての発表 : 40点
本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

- ・「国際文化共同研究A」のうち、いつの授業 (5回) に討論者として参加するかは、あらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。
- ・レポートやコメントの提出先は研究科執行部 (研究科長、専攻副主任)。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Masters students, as well as to present their research proposals and rough design of their dissertations.

【到達目標 (Learning Objectives)】

Three objectives:

1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to write up the thesis proposal to serve as a foundation for your doctoral research. It should include:

- (1) research theme
- (2) research goals
- (3) research methods
- (4) research plan
- (5) possible outcome

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research A as well as Thesis Planning Presentations (TPP). According to the current government requirements, you are expected to 'theoretically' spend four hours or more for each class session.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

- Comment sheets submitted: 20%
- Thesis proposal: 80% (its content: 40%, presentations given in TPP: 40%)

*Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 102 (その他 / Others 700)

博士ワークショップ I B

重定 如彦、大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から、他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士課程において具体的に調査研究を行っていくための計画書である論文プロポーザルを書き上げ、中間発表会で発表する。論文プロポーザルは、
 - (1) 研究テーマ
 - (2) 研究の目的
 - (3) 研究の方法
 - (4) 研究計画
 - (5) 期待される成果
 - (6) 文献リスト等
 が含まれていることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究B」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、中間発表会においてこれまでの研究成果と今後の研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを提出します。履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】
あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】
なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	討論者①	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第2回	討論者②	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第3回	討論者③	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第4回	討論者④	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第5回	討論者⑤	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第6回	研究発表とコメント①	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第7回	研究発表とコメント②	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第8回	研究発表とコメント③	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第9回	研究発表とコメント④	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第10回	研究発表とコメント⑤	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第11回	研究発表とコメント⑥	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

第12回	研究発表とコメント⑦	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第13回	研究発表とコメント⑧	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第14回	研究発表とコメント⑨	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「国際文化共同研究B」の履修者の発表に対するコメントは、授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに中間発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。大学設置基準に基づく、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これらはいくまでも標準である、とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

- ①平常点（コメント・シート）：20点
・「国際文化共同研究B」に討論者として少なくとも5回参加し、コメント・シート（毎回A4のシート1枚）を提出する。加えて、中間発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。
- ②論文プロポーザル：80点
・論文プロポーザルの内容：40点・論文プロポーザルについての発表：40点
本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

- ・「国際文化共同研究B」のうち、いつの授業（5回）に討論者として参加するかは、あらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。
- ・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Masters students, as well as to present their research proposals and rough design of their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

Three objectives:

1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to write up the thesis proposal to serve as a foundation for your doctoral research. It should include:

- (1) research theme
- (2) research goals
- (3) research methods
- (4) research plan
- (5) possible outcome

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research B as well as Thesis Interim Presentations (TIP). According to the current government requirements, you are expected to 'theoretically' spend four hours or more for each class session.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

- Comment sheets submitted: 20%
- Thesis proposal: 80% (its content: 40%, presentations given in TIP: 40%)

*Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 103 (その他 / Others 700)

博士ワークショップⅡ A

重定 如彦、大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から、他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士論文の土台となる研究テーマに関する先行研究分析報告書を書き上げる。
先行研究分析報告書は、内外の主要な先行研究の分析を行ない、それをふまえた上で、自身の研究の立ち位置やオリジナリティを示したものであることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、構想発表会においてこれまでの研究成果と今後の研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを提出します。
履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	討論者①	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第2回	討論者②	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第3回	討論者③	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第4回	討論者④	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第5回	討論者⑤	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第6回	研究発表とコメント①	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第7回	研究発表とコメント②	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第8回	研究発表とコメント③	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第9回	研究発表とコメント④	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第10回	研究発表とコメント⑤	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第11回	研究発表とコメント⑥	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第12回	研究発表とコメント⑦	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

第13回	研究発表とコメント⑧	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第14回	研究発表とコメント⑨	7月開催の構想発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

「国際文化共同研究A」の履修者の発表に対するコメントは、授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに構想発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。

大学設置基準に基づく、準備・復習時間は講義及び演習(2単位)では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これらはあくまでも標準である、とご理解ください。

【テキスト(教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点(コメント・シート)：20点
・「国際文化共同研究A」に討議者として少なくとも5回参加し、コメント・シート(毎回A4のシート1枚)を提出する。加えて、構想発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。
②先行研究分析報告：80点
・先行研究分析報告の内容：40点・先行研究分析報告についての発表：40点
本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

・「国際文化共同研究A」のうち、いつの授業(5回)に討論者として参加するかは、あらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。
・レポートやコメントの提出先は研究科執行部(研究科長、専攻副主任)。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Masters students, as well as to present their Prior research analysis and rough design of their dissertations.

【到達目標 (Learning Objectives)】

Three objectives:

1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to write up the prior research analysis to show your progress and originality.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research A as well as Thesis Planning Presentations (TPP). According to the current government requirements, you are expected to 'theoretically' spend four hours or more for each class session.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

- Comment sheets submitted: 20%

- Prior research analysis: 80% (its content: 40%, presentations given in TPP: 40%)

*Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 104 (その他 / Others 700)

博士ワークショップⅡ B

重定 如彦、大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から、他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士論文の土台となる研究テーマに関する先行研究分析報告書を書き上げる。

先行研究分析報告書は、内外の主要な先行研究の分析を行ない、それをふまえた上で、自身の研究の立ち位置やオリジナリティを示したものであることをその要件とする。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

【授業の進め方と方法】

修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究B」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、中間発表会においてこれまでの研究成果と今後の研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを提出します。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	討論者①	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第2回	討論者②	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第3回	討論者③	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第4回	討論者④	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第5回	討論者⑤	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第6回	研究発表とコメント①	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第7回	研究発表とコメント②	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第8回	研究発表とコメント③	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第9回	研究発表とコメント④	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第10回	研究発表とコメント⑤	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第11回	研究発表とコメント⑥	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第12回	研究発表とコメント⑦	11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

第13回 研究発表とコメント⑧ 11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

第14回 研究発表とコメント⑨ 11月開催の中間発表会で研究成果や研究計画を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

「国際文化共同研究B」の履修者の発表に対するコメントは、授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに中間発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。

大学設置基準に基づく、準備・復習時間は講義及び演習（2単位）では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これらはあくまでも標準である、とご理解ください。

【テキスト（教科書）】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点（コメント・シート）：20点
・「国際文化共同研究B」に討議者として少なくとも5回参加し、コメント・シート（毎回A4のシート1枚）を提出する。加えて、中間発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。

②先行研究分析報告：80点

・先行研究分析報告の内容：40点
・先行研究分析報告についての発表：40点
本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

・「国際文化共同研究B」のうち、いつの授業（5回）に討論者として参加するかは、あらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。

・レポートやコメントの提出先は研究科執行部（研究科長、専攻副主任）。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline (in English)】

【授業の概要（Course Outline）】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Masters students, as well as to present their Prior research analysis and rough design of their dissertations.

【到達目標（Learning Objectives）】

Three objectives:

1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to write up the prior research analysis to show your progress and originality.

【授業時間外の学習（Learning Activities Outside of Classroom）】

You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research B as well as Thesis Interim Presentations (TIP). According to the current government requirements, you are expected to 'theoretically' spend four hours or more for each class session.

【成績評価の方法と基準（Grading Criteria/Policy）】

- Comment sheets submitted: 20%

- Prior research analysis: 80% (its content: 40%, presentations given in TIP: 40%)

*Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 105 (その他 / Others 700)

博士ワークショップⅢ A

重定 如彦、大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメンテーターを担うとともに、自ら研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から、他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士論文を構成する章を書き、論文として学術雑誌等に投稿する。構想発表会においては、完成した章(投稿論文原稿)の発表に加え、博士論文の構成(章立て)を示し、博士論文の全体像を説明する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究A」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、構想発表会においてこれまでの研究成果や博士論文の構成(章立て)を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを提出します。履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】

あり / Yes

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	討論者①	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第2回	討論者②	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第3回	討論者③	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第4回	討論者④	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第5回	討論者⑤	「国際文化共同研究A」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第6回	研究発表とコメント①	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文(学位請求論文の草稿)を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第7回	研究発表とコメント②	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文(学位請求論文の草稿)を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第8回	研究発表とコメント③	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文(学位請求論文の草稿)を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第9回	研究発表とコメント④	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文(学位請求論文の草稿)を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第10回	研究発表とコメント⑤	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文(学位請求論文の草稿)を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第11回	研究発表とコメント⑥	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文(学位請求論文の草稿)を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第12回	研究発表とコメント⑦	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文(学位請求論文の草稿)を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第13回	研究発表とコメント⑧	7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文(学位請求論文の草稿)を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

- 第14回 研究発表とコメント⑨ 7月開催の構想発表会で研究成果や予備論文(学位請求論文の草稿)を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

「国際文化共同研究A」の履修者の発表に対するコメントは、授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに構想発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習(2単位)では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これらはいくまでも標準である、とご理解ください。

【テキスト(教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点(コメント・シート)：20点

・「国際文化共同研究A」に討議者として少なくとも5回参加し、コメント・シート(毎回A4のシート1枚)を提出する。加えて、構想発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。

②博士論文を構成する章：80点

・博士論文を構成する章の内容：40点・博士論文を構成する章についての発表：40点

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

・「国際文化共同研究A」のうち、いつの授業(5回)に討論者として参加するかは、あらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。

・レポートやコメントの提出先は研究科執行部(研究科長、専攻副主任)。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Masters students, as well as to write up, present, and publicise their dissertations.

【到達目標 (Learning Objectives)】

Three objectives:

1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to publish part of your dissertation. In Thesis Planning Presentations (TPP), you have to present what you have written together with the table of contents, as well as to explain the whole thesis structure.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research A as well as TPP. According to the current government requirements, you are expected to 'theoretically' spend four hours or more for each class session.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

- Comment sheets submitted: 20%

- Written-up chapter(s): 80% (its content: 40%, presentations given in TPP: 40%)

*Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

OTR700G1 - 106 (その他 / Others 700)

博士ワークショップⅢ B

浅川 希洋志、大野 ロベルト

その他属性：

【授業の概要と目的 (何を学ぶか)】

研究者となった際の後進の指導・教育のトレーニングとして修士課程の学生の研究発表に対するコメントを「実践知」の観点からコメントできる。また、自らの研究計画や研究成果を発表するスキルを修得していきます。

【到達目標】

1. 研究内容の論理性や研究方法の妥当性の観点から、他の院生の研究発表に的確なコメントを行うことができる。
2. 他の院生の研究発表を「実践知」の観点からコメントできる。
3. 博士論文を構成する章を書き、論文として学術雑誌等に投稿する。中間発表会においては、完成した章(投稿論文原稿)の発表に加え、博士論文の構成(章立て)を示し、博士論文の全体像を説明する。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか(該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連)】

【授業の進め方と方法】

修士課程2年次の必修科目である「国際文化共同研究B」の授業に討論者として参加し、その結果をレポートにまとめます。また、中間発表会において博士論文の要旨を発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを提出します。

履修者の発表などに対しては、授業、学習支援システム、個々のメール等を通じて、適宜フィードバックを行います。

【アクティブラーニング(グループディスカッション、ディベート等)の実施】

なし / No

【フィールドワーク(学外での実習等)の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第1回	討論者①	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第2回	討論者②	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第3回	討論者③	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第4回	討論者④	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第5回	討論者⑤	「国際文化共同研究B」の討論者として修士課程2年生の発表に対するコメントを行う。
第6回	研究発表とコメント①	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第7回	研究発表とコメント②	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第8回	研究発表とコメント③	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第9回	研究発表とコメント④	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第10回	研究発表とコメント⑤	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第11回	研究発表とコメント⑥	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第12回	研究発表とコメント⑦	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。
第13回	研究発表とコメント⑧	11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

第14回 研究発表とコメント⑨ 11月開催の中間発表会で博士学位請求論文の要旨を口頭発表するとともに、他の院生の発表に対するコメントを文書で作成する。

【授業時間外の学習(準備学習・復習・宿題等)】

「国際文化共同研究B」の履修者の発表に対するコメントは、授業内に行うと同時にレポートとしても提出します。さらに中間発表会での他の院生の発表に対するコメントも文書で提出します。また、自らの研究発表については論文演習科目等を活用しながら事前に準備を行います。

大学設置基準に基づくと、準備・復習時間は講義及び演習(2単位)では1回につき4時間以上が標準となります。しかし、科目の性格上、これらはあくまでも標準である、とご理解ください。

【テキスト(教科書)】

特になし。

【参考書】

特になし。

【成績評価の方法と基準】

①平常点(コメント・シート)：20点
・「国際文化共同研究B」に討議者として少なくとも5回参加し、コメント・シート(毎回A4のシート1枚)を提出する。加えて、中間発表会で他の院生の発表に対するコメントをまとめ、提出する。

②博士論文を構成する章：80点
・博士論文を構成する章の内容：40点・博士論文を構成する章についての発表：40点

本授業の到達目標の60%以上を達成した者を合格とします。

【学生の意見等からの気づき】

N/A

【その他の重要事項】

・「国際文化共同研究B」のうち、いつの授業(5回)に討論者として参加するかは、あらかじめ同授業の担当者も含めて相談すること。
・レポートやコメントの提出先は研究科執行部(研究科長、専攻副主任)。

【担当教員の専門分野等】

この科目は研究科執行部が担当します。

【Outline (in English)】

【授業の概要 (Course Outline)】

This seminar is designed to facilitate the development of teaching skills and research skills. Students are expected to comment on the presentations given by Masters students, as well as to write up, present, and publicise their dissertations.

【到達目標 (Learning Objectives)】

Three objectives:

1. You are able to grasp the problems and logic of other students' works and to make appropriate comments.
2. You are able to make comments on other students' works from the perspective of 'practical wisdom'.
3. You are able to publish part of your dissertation. In Thesis Interim Presentations (TIP), you have to present what you have written together with the table of contents, as well as to explain the whole thesis structure.

【授業時間外の学習 (Learning Activities Outside of Classroom)】

You are required to submit report about presentations made in Intercultural Communication Collaborate Research B as well as TIP. According to the current government requirements, you are expected to 'theoretically' spend four ours or more for each class session.

【成績評価の方法と基準 (Grading Criteria/Policy)】

- Comment sheets submitted: 20%

- Written-up chapter(s): 80% (its content: 40%, presentations given in TIP: 40%)

*Students who successfully achieve 60% or more of goals will be able to earn a passing grade for the course.

